

撃を考へるにも及ぶまいが（その實こんな卑劣な動機に驅られては居られないほど國家の事態は重大になつて居るのである）、太分理會して居なくてはならぬ事がある。それは大英國が、今や何處まで結果を及ぼすか分からぬやうな恐ろしい危機に際會して居ることである。大英國は此の危機の意義を十分に理會しなければ、必ず經濟的に滅亡するに極つて居る。無論英國は、資本家の奴隸となつて甘んずるやうな國家としての政策を採用して憚らず、又た人民の大多數を驅つて劃一的な而かも牢乎たる賃銀奴隸制度に追ひこみ、以て、物質的に富める國とは成ることが出来るであらう。然かし、如何なる國民も『半分奴隸で、半分自由民』の情態では存在することが出来ない。然のみならず一體この奴隸制度——それが經濟的のものであつても、將た又た心理學的のものであつても、——なるものは、大英國本來の思想及び習慣と甚しく相反せるものである。故に、今後二たび勞働軍が覺醒し來つて、眼前の事相を看破するに至るときは、必ずや此の賃銀制度を一掃し、自身で全國の産業的事業を引き受けるやうにするであらう。

### 第三章 「ギルド」の概要

「ギルド」の組織には何にも、神秘的なところが無い。何かの産業に従事せる被傭者を同業の情誼

にて結びつけたものに過ぎない。大きな産業に屬せる特殊の職業に、更らに小分けをするのが便宜だといふなら然うして差支はない。例へば、鐵及び鋼鐵工業の中には十四五も小分けが出来るが、何れも皆な「ギルド」といふ親の分かれに過ぎない。「ギルド」の實行上の主義は、産業的「デモクラシー」である。此の點に於て「ギルド」は國家社會主義ステイトソシヤリズム又は集合主義コレクティビズムと異なつて居る。國家社會主義 (State Socialism) 又は合同主義 (Collectivism) に於ては、統制が外部から來て、自然官僚式になる。之に反し「ギルド」は其れ自體の事を自から處理し、上は總裁から下は事務所の「ボーイ」に至るまで、役員の任命を自身でやり、他の「ギルド」と交渉し、また完全なる單位としての國家とも交渉をする。「ギルド」は國家の官僚政治を排斥する。然かし又た「サンデカリズム」をも排斥する。何となれば、産業的「デモクラシー」の主義に服従する如き國家とは、共同經營をすること  
を承諾するからである。共同經營を認めても、「ギルド」の管理上に干渉すべき外部團體の權利を認めると言ふわけではない。然かし、大政策に關しては、國家とも形式上及び實質上の共同を爲しても差支はない。蓋し「ギルド」の政策は私的のものならずして公的のものである。公事については公衆（これを代表するものが國家である）に相談をし、又た公衆の利害に顧慮する必要がある故である。「サンデカリズム」が如何なる程度まで、國家そのものを排斥するかに關しては、之れを精確



に理會することが容易でないし、又た其んな研究をするのは、吾人目前の仕事でもない。たゞ吾人は「ギルド」は土地や家屋や機械の絶對的占有者と成る筈のものでもなく、又た成つてはならぬと考へて居る丈の事である。然かし吾人は不相變社會主義者である。何となれば、國家は詮するところ、一般の社會を代表せるものであつて、最後の仲裁者となるべきものだからである。この事は比喩を以て明らかにし得ると思ふ。愛蘭と蘇蘭と威斯とが、自治體だと假定し、而かも三國ともに帝國議會に隸屬し、此の議會には、英國植民地の各自治體から代表者を出す時代になつたと假定せよ。而して、斯く代表者を出して各團體に對し、貢ぎをさせることが、帝國議會にとりて必要だと假定せよ。斯くせば、英蘭からは幾ら、愛蘭、からは幾ら、蘇蘭威斯、加奈太、南阿、濠州からは幾らと取立てなければならぬ成る。其の取立てる金額は、帝國議會の賛成を得ねばならぬが、取立てる方法は各自治體の任意事項であつて、他からの干渉を受けない。此の意味に於いて「ギルド」も大きな社會的責任を有し、其の責任に對しては相互に協賛を遂げねばならぬし、又た往々にして公衆に恭順せねばならぬ必要がある。然かし、其の責任が一度明確に定まつた上は「ギルド」は最早や産業的自由體であつて、自己の方法と機關とを使用して詳細のことを執行するものである。

故に吾人は、國家社會主義又は合同主義と一部分に於て一致して居る。彼等は、國家といふ組織を保存し、一定の職能を國家に持たせて置くのが宜しいと考へて居るのである。其の職能については、後に詳しく定義することとする。然かし、吾人は「サンヂカリズム」とも、實質上一致して居る。蓋し「サンヂカリズム」の徒は、自分の事業は自分で統制するが至當である。自己は自己の經濟上の主人であるからと言ふ實際の主張を爲すものである。且つ「サンヂカリズム」を合理的に解釋するときは、國民精神を酌める善政といふものゝ有り得ない事はないといふ考と矛盾はしないであらう。

然かし、國家的組織と國家的職能とを認めたとて、經濟は政治に先だゞざる可からずと言ふ吾人の主張が無効になるのではない。反つて此の主張は強くなるばかりである。近代の政治家が甘まく仕事の上がらぬのは、大處高所に着眼して居るべき場合に、なほ手段方法の末節にのみ力を注いで居るからである。例へば専門の學者や藝術家が、家事の爲めに研究を廢して居るやうなものである。政治家がら財政上の問題といふ大負擔を取り去るときは、大きな事で成功を博することが出来る。斯くなれば今よりもよい爲政治家の「タイプ」が表はれてくるであらう。財政上の顧慮は、個人をも腐蝕させ政治をも腐蝕させる。今若し「ギルド」が經濟上の支配權を有し來るときは、而して又た其れに屬する勞働者が、今日の賃銀制度に屈從せる勞働者以上の成績をあける事になれば、社會の



文化的發展の爲めに必要なるべき全ての金を義捐するのに、労働者は少しも吝しむことが無いであらう。「サンヂカリスト」は、組合の方が國家よりも、此の成績をあける事が多いといふ。吾人の確信するところに依れば、爲政者として必要なる人物は、<sup>インダストリアリスト</sup>産業者でなく、之れと全く「タイプ」を異にせる行政者である。前者は當然産業方法を司どるべき人であつて、後者は訓練されたる想像力と靈的知覺とを有する人である。美術、教育（大學統制をも含み）、國際關係、司法、公的行動——此等を始め、其他諸般の問題は、特殊の知力を有するものゝ出る事を必要とするであらう、否な今日も其の必要がある（但し求めて得られないが）、而して此等の諸問題は、「ギルド」其ものゝ特殊の影響をうけしむべきものでなくて、「アーノールド」(Arnold)の所謂「社會の最もよき心」を持つた者の影響を受けしめなければならぬ。

先づ「ギルド」の最も重要な任務は<sup>コミュニタリアン</sup>相待相依の主義を基礎として、社會を産業的に組み直ほすことである。換言すれば賃銀制度の全廢を行ふ事である。かうすれば大分仕事が出来来る。失業問題の如きも結局的の解決がつく。「ギルド」の各員は相互に同等の權利を有して居る、随つて、働らいて居る時にも遊んで居る時にも、病氣の時にも達者の時にも、相互に扶け又た扶けられることが出来る。且つ、「ギルド」は「デモクラチック」な選舉方法により、労働時間は何時間にするか、一般に

雇傭條件は何うするかと言ふやうな問題を、自分で決定することが出来る。斯くなれば今日の工場法や礦山規程等を設けて、労働時間を制限しようとして居る事は（此等の法規は節約法規に過ぎないと吾人は前にも述べて置いた）、皆な無用の事となり、此等の法規は全滅してしまふ。(will go by the board)。「ギルド」は、當然「ギルド」自身の便宜や必要をも顧慮するであらう。例へば機械工業の「ギルド」に適する時間や條件は、農業「ギルド」には適しないといふ事も起るであらう。「ギルド」が斯かる事につき一々處理をするのに、外部から法規を以て檢束するのは、烏滸の沙汰と考へられるであらう。今日の老廢保險の如きものすら、逆ても間に合はぬと一笑に附せられる事であらう。

それから「ギルド」は、今日の資本的階級を倒ほし、他の一方に於ては、國家にかはつて組合員全體の福利増進の責任を引受けんとするものである。

「ギルド」は今日の傭主及び資本家より、産業の指導法を教はつて居みから、富の生産を一層有効に行ひ、富の分配を一層經濟的に行ふことも出来るであらう。之れが爲めには、「ギルド」相互間の親密と共同とが必要になる。社會的の仕事は「ギルド」が孤立して居ては出来るものでない。供給をする「ギルド」と、其の生産したものを分配する方の「ギルド」との間には互に不斷の接觸と同



情ある交渉關係とがなくてはならぬ。『吾が物がほの振舞』(dog in the manger)を許すことは出来ない。『これは吾が「ギルド」のものである』といはずして、『吾々は此の機械と生産物とを保護して居る』といふ態度でなくてはならぬ。「ギルド」は各自の財産を蓄積するの目的で存在してはならぬ。其の道徳上及び法律上の立ち場は、飽くまでも保管人といふ立ち場でなくてはならぬ。斯くせば必ず「ギルド」の中がら、何等かの形式で共同經營法が表はれるやうになり、獨り他の「ギルド」のみならず國家とも共同することが行はれて來るであらう。

競走的なる賃銀制度の全廢は、「ギルド」を組織するに當つて、是非とも行はねばならぬ事であるが、此の全廢と共に、管理部と労働部との間に存する今日の差別も必ず全廢されるであらう。故に精神労働者たると筋肉労働者たるとの別なく、労働者は如何なる種類及び等級のものも、皆な「ギルド」の一員とならねばならぬ。例へば、技術家は自己の發明と改良を有効に使はうとすれば、是非とも「ギルド」に頼らなくてはならぬ。然るに従來彼等は其の傭主又は外部の資本家に頼よつて此の目的を遂げて居たのである。此等の技術者は、今後生産増加又は勞力節約上の如何なる發明をしようとも、十分に其の試驗をして貰ふことを主張するのは、彼等技術家一同の利益である。従來は、賃銀奴隷間の競争者と同じく、技術家の發明品も失敗の原因たり飢餓の原因たるものとして、

被傭者から恐れられてがた居、今後は其んな事も無くなるであらう。「ギルド」生活の眞面目は、經濟的利益と經濟的目的との統一に在つて存するものである。

現今の賃銀制度が、自づから賃銀を平均させると言ふ傾向のあるのは、疑ひもない事實である。今までは熟練工と不熟練工との間に差別があつたが、今では段々に此の差別も消滅しかけて居る。之れ一つには機械の發達と、外國との競争による經濟的壓迫との爲めであつて、又一つには金の値段の増した爲めである。(註——本書は一九二二—三年の間の事實を材料として居る)此の傾向に對しては吾人は反對せず、寧ろ歡迎するものである。然るに、今日管理部面上層に位する人には、矢張り多少餘計の報酬をするのを吝しまぬ傾きがあつて、此の賃銀の平均といふことも此の方面までは波及して居ないやうに見える。勿論この方面にも、何時かは經濟的の平坦化が行はれるであらう。然かし、此の上層に位する者は、才能を買はれて居る者である。而して彼等の奉仕は、當然需要せられ又た其の報酬は之れを確實にしてやるべきものである。假令へ、賃銀平等化の作用が、吾人の豫想以外に行くものとするも、地位と報酬には矢張り差別を設けて置く方が「ギルド」の管理を有効にする上に都合がよい。吾人は報酬の差等を毛ざらひする者ではない。其れが果して理想的でないか如何うか、其んなことは吾々の知つた事でない。然かし「ギルド」の財源の分配上には、



少しも不公平なやり方の行はれない事は、保證して置く。「デモクラチック」に統制されて居る以上は如何なる團體も金ばなれし過ぎるやうな事はない。然かし「ギルド」も暫く経験を積むうちには、技巧獎勵上、有能者の惹きつけ方に苦心し、出来るだけ高給を拂つて之れを誘ふの必要をも認めるに至るであらう。發明の才ある者、組織の能力ある者、統計の才ある者、その他種々の人材に對し適當の報酬を爲さんとせば、金以外にも色々方法が有るであらう。兎にも角にも、此等の人材には十分の報酬が拂はるゝ事になるのは疑ひがない。

大體「ギルド」の大意は斯んなものである。以下の諸章は、委曲について實行の方案を陳べたものである。

然かし吾人は西班牙に於ける「ギルド」の如きものを造らうとするのではない。吾人の「ギルド」は昔の夢想家が華胥の國を心に畫いてやつたやうな冒險事業とは違ふ。吾人は目前焦眉の急に迫まられて、此の「ギルド」論を書いて居るものである。本書に略説したやうな産業組合を組織することとは、今日の賃銀奴隷の境遇及び彼等の心理的屈從情態から彼等を救ひ出す唯一の實行方案であると信じて居る。吾人は「アルトルーリヤ」(Alturia——無何有郷)からの旅客ではない。現在の賃銀制度といふ醜汚なる現在の中に挿み且つ動いて居る者である。吾人今日の案は、今日よりも優れた明日を造り出さうとする案である。「ギルド」の思ひつきは、敢て今ま始つたものでもない。二十年前にも、先見の明ある社會主義者の間に、「ギルド」の話が日常の會話に上ほつて居た。若し此等の社會主義者が、因習的な政治の方面に走つて行かなかつたならば、既に十年前に於て、「ギルド」は實際政策となつて居たであらう。政治といふ魔鏡にだまされて、吾人は再び岐路に走る事なく、政治家のみを夢みる皮相淺薄の労働黨員の爲めに再び無駄骨を折つてはならぬ。今度こそは社會主義者に警告して、社會主義は一の經濟的方策であるから、之を達成するのは經濟的方面に於てせねばならぬと言つてやることを忘れてはならぬ。吾人の「ギルド」社會主義と稱する特殊の産業組織は、産業上の「デモクラシー」を實現すべき唯一の實行方案である。

これ實に、實行的である。然かも労働者が之れを欲しなければ實行に成らぬ。實行的といふだけに、吾人も其の實現上の大障礙を赤裸々に暴露して置くものである。前に言つた事で分かると思ふが「ギルド」は會員入會の點に於ては、絶對的に包容的でなくてはならぬ。——なほ大海の涓滴を擇ばざる如くあるべきである。然かし、將來の「ギルド」の中堅(Nucleus)は、職工組合でなくてはならぬ。「賃銀制の過渡」と題せし一章に於て、吾人は障壁を撤し、境界を廣くし、何人にも入會の出来るやうにするのが職工組合に取り必要なことを、力説して置いた。今日の急事之れに如



くものはない。吾人は此所に今一度、現在の生産業に關する組合を調らべて見て、職工組合が如何なる點まで擴張が出来るかを見ようと思ふ。職工組合の人員は左の通りである。

職業類別	被備者數	賃銀労働者數	職工組合員數
建築架設工	五一三、九六一	四七六、三五九	一五五、九二三 (六十八組合)
炭坑夫及石工	七九五、〇九〇	九三九、五一五	七二九、五七三 (八十四組合)
金屬工、機械工及造船工	一、四二六、〇四八	一、三三〇、九〇二	三六九、三二九 (二百一十一組合)
織維工業	一、二二九、七一九	一、一八九、七八九	三三九、一八二 (二百七十三組合)
印刷、製本製紙其他	三一七、五五〇	二七九、六二六	七三、九三九 (三十八組合)
衣類工業	六四五、二三三	五五二、一六五	六七、〇二六 (四十組合)
木工及家具工	二二四、〇九八	二一〇、四〇七	三八、八三六 (九十一組合)

これは代表的のものゝみを擧げたのであるが。他の産業も此の通りにあけて見ることが出来るが、管々しいから略した。政治的労働黨員が、職工組合員を驅つて政治界に大馬の勞をとらしめ、労働黨員としての本業を忘却したのは、其の罪咎めても猶ほ餘りあるものである。吾人は政治的な労働黨に對し餘り嚴酷だといふ咎めを蒙むつて居るが、吾人の言つたり書いたりした事は、心の中

で思つて居るより餘程柔らかである。賃銀は下がる一方である。労働者は團結力が貧弱である。——(八百の職工組合が僅か七種の職業にあるではないか)——而して此等の無力な賃銀労働者の代表者を以て自稱せる者は、議會の「バーリユース」(Purifiers——町外づれ)で、温く々と日向ほつこをして居る。これ敵を見て脱走するやうなものである。此等の人々に比すれば「メツツ」の「バゼイン」(Bazine——佛の元帥「メツツ」にて降伏)と雖も鬼神と見えやう。

然かし、實のところ、形勢は其れほど絶望したものでも無い。例へば、七種の産業に、八百有餘の團體を造つた労働者を考へて見よ。彼等にして若し今少しく適當に鼓舞されて居たならば、七大組合の人員を増加することも今日大に容易であつたらう。彼等は、一時經濟的發達の爲めに堰返へし水の中に取り遣こされたが、今や賃銀奴隷制度上の必要から、此等の組合は急速に聯合を形成しつゝある有様である。而して其の一方に於ては、政治の無効といふ事に關し、漸次覺醒し來るに隨ひ、労働者は今は斯うして居られないと言ふ感念が急速に擴がりつゝある。今や、各職工組合員は古るい團結と軍容とを心の中から忘れて了つて、一種の産業には一つの組合のみを設け、一の組合には何人でも入會せしめるといふ理想の方へ、斷乎として幕進すべきものである。これが彼等目前の第一の義務であり又た唯一の義務である。



吾人は、今後よく時局を理解し、政治的生活を追求せざるのみならず、自己の組合の事業以外には心を向けないやうな、青少年の職工組合が起つて来ることを、信じて疑はざるものである。私利に汲々として「人民を愚にせんとする」政治家 (the political obscurantists on the make) は、今や既に過去の人物として湮滅に歸せんとして居る。現在の貨銀制度が廢たれて、木乃伊の如くなつて了ふまでには、斯かる舊時代の人物は姿をかくし、獨り前記の如き青少年のみが舞臺に残つて居るであらう。

#### 第四章 模範的實例

「ギルド」の大意は略述したから、今度は其の實際に應用される工合を調らべて見よう。今までは製造業即ち生産工業のみに就いて論じて來た、今其中の一つを取つて實例とせんは容易なるべけれども、此の際吾人の調査の範圍を擴るは、運輸業について調らべて見る方が一層興味が多からうと思ふ。運輸業は明らかに、生産の一部分である。一番初めから原料又は半原料を運送し、一番仕事までの仕止品の運搬にたづさはるものである。競争的資本主義の世の中に於ては、運輸の便を經濟的に行ふのが、最も重要な事である。現今の産業國に於ては、製造業者と運輸業者との間には、

由來猛烈な利害の衝突があつた。米國などは特に其れが甚しい。米國には大きな鐵道系統が幾つもあつて、未開墾の地方の發達を計かり、暴利を貪ほつて居る。米國の政策は、主として運輸業中心であつた。米國の大鐵道が西部諸洲の政策を動かして來たことは、百年近くの久しきに及び、吾人の「經濟力は政治力に先だち且つ之れを司配する」との論を十分に證明して居る。故に「フランク・ノリス」(Frank Norris) の小説、——特に其の「オクトーパス」(Octopus) には、鐵道關係者が絶大の勢力を持つて居ることが描寫してある。東部諸州に於てすらも、此の勢力は非常なものである。但だ東部に於ては、製造家の勢力が大に之れと拮抗して居るだけの差である。大體に就いていへば、米國の鐵道政策は産業の負擔し得る限りの最高率の運賃を徴收して來た。而して其の運賃率は、運輸系統内の地方の繁榮の増加と共に増加して來た。一體からいふと、鐵道は其んなことの出來た義理ではない。何となれば製造業者が仕事を始めた後と々々と跟いて來た後入資だからである。然るに、大英國の鐵道は、米國に比し餘ほど甘まく行つて居る。其の資本は増資々々で段々殖え、今日此の龐大資本を土台にして配當が割り出されて居る。鐵道國有運動は、由來社會主義者の主張する所たる而已ならず、商業會議所中にも其の賛成者が多かつた。但し資本家の團結は有力に表はれて居た。數年前「バーミンガム」の商業會議所は、國有贊成の決議をした事がある。其の時「ア



サー・テムバレーン氏は、之れに干渉して、「諸君よ、犬に犬を食はしむべきか」と言つた。多くの製造家等は鐵道からの苛斂誅求に懲りて、鐵道の國有を喜んで居る。然し彼等は國有とすれば、獨り鐵道のみに限らず何んでもかでも國有になるだらうと言ふ事を知つて居る。そこで、彼等は其うなつても困まるといふので、今日の私有鐵道の不便を忍んで居るのである。獨逸は鐵道を國有とし、色々の方法で獨逸の産業の便を計かつた。例へば「ソリゲン」の如き製造業中心地から海外諸港への直通荷物運搬の便を計かつた如きである。其の結果として、英國には澤山な異常現象を呈した。例へば「パーミンガム」の金物製造業者は數年前には其の生産品を先づ「ソリゲン」に送り、其處から南阿へ仕向けたが安すく當ると言ふことを経験した。此の手段により、此等の製造業者は船舶業者の誅求を免かれて居た。

然かし、賃銀制度は、資本主義化した英國の鐵道に於ても、獨佛の國有化した鐵道に於ても、同様の弊害を呈して居る。賃銀奴隷の目から見れば、國有と私有と同じく厭ふべきものである。其實、私有の英國鐵道諸會社の方が、獨逸や佛國の國有鐵道よりも、賃銀が高くして労働條件が優良である。國有化せる佛國の鐵道の如きは、今日現に不平滿々の有様である。

其の理由は手近かにある。國有鐵道も買收費に利子を拂はなくてはならぬ事、丁度私營會社と同じである。且つ普通に所謂官僚は、重役會議に比し融通が利かないで不便であることは、從事屢々例證があがつて居る。故に、賃銀制度は、資本主義の鐵道と國有鐵道とを取りかへても、「丸太の王」と「鴻の鳥の王」とを取換へたのに過ぎない、〔註、——昔蛙ども王様が欲しいと言つたら、「ジュビター」遊び丸太の無力を嘲弄し、今一層有力な王様が欲しいと言つた。「ジュビター」は之れに鴻の鳥を與へた。鴻の鳥は蛙を食つてしまつた。〕

此の事實からして二つの結論が出来る。——

(一)投資者が資産又は利益に對し第一の代價要求權を有する間は、賃銀奴隷制度は止まらない。  
 (二)官僚主義は無能で、私有資本主義的競争制度は壓制をする。何れにころがつても良くない。  
 此の際、産業上の「デモクラシー」(「ギルド」ニ表はれし如き)採用するより外に道はない。  
 然らば、運輸業の「ギルド」を起すときは、現在の如き賃銀奴隷制度の亂脈と混沌とから如何いふやうにして遁がれる事出来るであらうか。

一九〇一年の調査によれば、「人と貨物と郵便物との運搬に従事せし雇傭員」は一、四九七、六二九名に達した。一九一一年の調査は未だ出来ないが、若し發表されたらば、必らず人口の増加に應じ其れだけ此の人数も増加せしことを證明するであらう。故に大體に於て先づ百五十萬の會員で運輸「ギルド」が出来得るわけになる。運輸業労働組合の中から此の「ギルド」に何人加はつてくるか。



試みに一九二〇年末の各種運輸業労働組合の名と會員數とを列擧して見よう。これは合計の處を擧げてよいが、各種の職工組合を一々列擧した方が、「ギルド」を構成すべき各部分の小別けと、其の組織の複雑なことを想像せしめる上に便宜である。

鐵道従業員聯合	七五、一五三
「バルファスト」及「ダブリン」車掌及び火夫組合	三八六
汽漚車技手及火夫組合	一九、八〇〇
「ポイントマン」及び「シグナルマン」組合	三、七九〇
一般鐵道労働者組合	七、二八四
大英國及愛爾蘭鐵道事務員組合	九、四七六
「エアンバフ」及「レイズ」馬車々掌組合	二二二
倫敦馬車々掌組合	五、六九〇
全國石炭運搬夫聯合	一、五三五
市電及荷車労働者聯合	一七、〇七六
荷車、「トロツコ」及自備車労働者聯合	三、九九五
英國荷車労働者聯合	二、八三九
「ワイガン」地方荷車労働者及「トロツコ」労働者組合	一四六

「ニューカッスル」市電労働者組合	三八八
「ハリフハックス」地方荷車労働者組合	三五九
「リメリック」荷車労働者及倉庫労働者組合	八九〇
「サウス・シールズ」小蒸汽労働者組合	二〇五
「ウエヤー」郵便船労働者總會	九〇
「タイン」同上	六三八
「ハル」水夫火夫組合	五一一
「モンクウエヤマス」小蒸汽労働者地方協會	五一
全國水夫火夫組合	一一、〇〇〇
船船技手組合	七、〇〇〇
「タイン」小蒸汽労働者組合地方支部（ニューカッスル）	一五三
「タイン」地方「フォックボート」労働者組合	一〇五
全國司厨夫、料理夫、肉及麩麵労働者	三、六二四
「タイン」地方舟子組合	三八七
「テムズ」河舟子、點火夫、見張番組合	二、三二四
「ワイバート」見張番組合	三二八
點火夫（テムズ河）聯合	二四八



「アツバー・マトシイ」舟子及運搬夫組合……………一、二〇〇  
「マンチエスター」水先案内組合……………四三  
「グリーノック」及「ポート・グラスゴウ」筏夫組合……………三六  
仲仕聯合……………四、二二五  
「グリーノック」運搬夫組合……………二一八  
「モントローズ」埠頭労働者組合……………二〇  
船渠、埠頭、河岸及一般労働者組合……………一八、二四〇  
「カルザフ」「ベナールス」及「パリー」石炭積込人夫組合……………一、四五〇  
「マーシー」埠頭及鐵道荷車運搬夫組合……………五、〇八三  
全國船渠労働者組合……………一四、二五三  
労働者保護同盟……………二、五〇〇  
「グレート・グリムズビー」石炭労働者組合……………八〇  
「グリムズビー」一般職工組合……………五一六  
「リメリック」港被傭者組合……………四〇  
「グリーノック」船渠労働者組合……………一六二  
北英石炭積込人夫組合……………一、六八四  
「ダンスタン」同上……………一七六  
愛蘭運搬及一般労働者組合……………五、〇一一

一九一〇年には、全體で五十九の運輸業労働者の組合が有つた。其の支部が此外に一九四七あり  
會員數は總體で二四二、二七〇名であつた。換言すれば、運輸業被傭者六名のうち、一名だけが組合  
に加入したわけである。

一見しても分かるやうに、此の運輸業労働者の組合の種類は随分澤山なものである。然かし、苟  
くも想像力を有する人は、「人間と貨物と郵便物との運搬」に、人力の如何に必要なかを其れから  
其れへと想像して行く事が出来るであらう。又た「ギルド」の形成に必要な勞力も想像し得られ  
るであらう。其の勞力の中でも、最も大切なるは統一の仕事である。此等の五十九の組合は、各自  
に本部があつて、其れに總裁と會計と起案係と幹事と支部幹事とがあつて、其の役員の人數も各組  
合の人員及び所管地方の廣さに准じて多い。此等の組合の多くは、此等の私利的計策の爲めに、互  
に孤立して居る。且つ、傭主側と被傭者との間には特別の契約が結ばれる事があつて、傭主組合の  
切り崩し策を助ける事に成る。然かし、労働者が今後一層教化程度を進め、運輸業労働者の一致  
團結の必要を認め来るに従ひ、統一の行はるゝやうに成ることは疑ひが無い。これは將來あまり遠  
くないうちに實現されるであらう。一九〇七年以來、四つの組合は大きな組合と合併し、十二の組  
合は分散して他の組合に其の會員を附けた。最近の鐵道及び船渠労働者の「ストライキ」は、組合



相互間の團結の必要を教へたものである。

今若し全部の運輸業労働者が一つの團體に纏まつて「人間と貨物と郵便物との運搬」に對し統制權を持つやうに成れば、「ギルド」の事業は其の時から直ぐ始めてよいのである。然らば其の事業は如何なるものであらうか。

先づ(一)國民一般(即ち他の諸「ギルド」からの要求に應じ、運輸の任務を引受け、少くとも今日位には有效且つ經濟的に仕事をせねばならぬ。(二)その會員各自の保護を爲さねばならぬ。

「ギルド」加入者の保護といふ事が、社會的革命的の眼目である。社會的革命的は、賃銀労働者の保護を現在の産業制度が爲し得ない爲めに、今や焦眉の急を要する事業と成つて居るものである。此の點に於ても、賃銀制度の全廢といふ問題が實際に起つて来る。「ギルド」統制と競争的資本主義との根本的差別は、資本主義が單に商品として労働を買ひ、而かも成るべく使用料や利子のとれるやうな値段で(即ち賃銀といふ値段で)之れを買はうとするに反し、「ギルド」は其の會員の勞力を共同的に適用し、資本家の誅求を免かれて、利子や使用料とは關係なく勞力の生産から生ずる上がり高を其の會員に分配しようとするものである。其の實、今までの競争的賃銀のやうなものは、其の時には全廢されて居る。其の結果として、資本家一個人の利益に向けらるゝ如き餘剩價值なるものは

無くなつて居るのである。即ち賃銀なければ餘剩價值なく、使用料なく、利子なく、利益も無いわけである。

人一人たび此の「ギルド」の一員となるときは、再び競争的な賃銀制度の爲めに、苛酷に使はれたり飢餓に逼まつたりする事はないかと、心配するには及ばないであらう。例へば、各運輸業者は、正直に自分の仕事をすれば、生活費は貰へるわけである。——否な今日の賃銀と均しい生活費の外に、失業により失はるゝ額が加はり、其外に餘剩價值の一部分(即ち今日使用料や利子として個人の懐から出して居る部分)が加はり、更に其他の經營法の改良に伴ひ節約し得たものゝ一部が貰へるわけである。故に今後の労働者は、今日の所謂賃銀は貰はないのであつて、今の賃銀の三倍にも當たる報酬が貰へるのである。

然かし生計費のみが、何にも人生に於て最も大事な事ではない。有力な團結が有るときは、個人にも社會にも有難いところの保護の力が出てくるものである。支那の「ギルド」は此の事をよく理會して居る。支那の「ギルド」の或るものは、非常な有力なものであつて、會員の不幸は死ぬまで救済してくれる。此の主義の適用により將來小説家の題材となるべき情趣に富んだ一面が展開される事であらう。然かし、吾人は其んな簡単な救済法を小説的に描寫せん爲めに、此の議論をして居



るのではない。然かし又た病氣のときや年老いてからは、運輸業労働者も、此の「ギルド」から保護を仰がなければならぬ。又た困つたときは、其の援助を求めなければならぬ。要するに「ギルド」は、一の経済的組織たると同時に、一の友誼團體である。丁度獨逸の學生が、其の「コーズ」(Cours)——學生團)に屬し社會的援助及び交遊も其の所屬團に求めて居るやうに、此の運輸業労働者も、自己の「ギルド」に屬し、其れより食はせて貰つて居るのみならず、其の交誼を仰いで居るのである。吾人の、前章に於て「ギルド」は養老金も保険も疾病救恤金も、其他澤山な有益事業をも爲すの責任を自から負ふものだと言つたのは、此の意味であつた。

「ギルド」の經濟上如何なる仕事を爲すか、又た其の事業は如何なる方法で行ひ、如何にして其の生産せし爲の分配を行ふか、——に就いては、今後適當の場所で詳説する事とする。然かし兎に角「ギルド」會員は、今日よりも遙かに優される精神的及び物質的利益をうける報酬として、自己の仕事に頭腦も筋肉も感情も傾倒して掛らなくてはならぬと言ふのは至當であらう。今日の運輸業労働者は仕事はして居ない。唯だ勞苦して居るばかりである。仕事(ウオーク)と違つて勞苦(トイール)は近代文明の最も不經濟なものである。

斯くて愈よ、人間と貨物との運輸に従事する百五十萬人の労働者が、互に相結合して國富の中から相當分配を貰ふことに成つたとせよ。是時に及んでや、仕事を探がすと言ふことは問題でない。仕事はされるのを待つて居るからである。斯くて各會員は喜んで自分の仕事を引うけるものと假定する。そこで一番重要な問題は能率問題である。能率のあがる上がらぬは、訓練の有無で可まる訓練は管長組織の有無で可まる。斯うなると、左の如き結論が出来る。「デモクラシー」は無政府主義ではない。産業的「デモクラシー」も、産業の民制的統制の必要あり、随つて、民政的に管長組織を任命するの必要がある、と。現今の鐵道管理者は株主の利益本位で、株主が任命する。將來の管理者は「ギルド」の利益を本位として、「ギルド」自身これを任命すべきである。「ギルド」は公益團體であつて、私營會社ではないから、此の役員の任命も、亦た公益本位で行ふべきものである。管長組織になれば、報酬に等級が出来ると言ふ人もあらうが、適當な等級別は有つてもよいと思ふ。今や此の「ギルド」には利害關係が一致して居るから、管理者も副管理者も、職工長も其他も、自己を任命した者以外には、利益を計かつてやるべき人も無いわけである。此の點に於ては、十分に「デモクラシー」の思想に信頼して居て好い。労働者は作品の出來の善し惡しに就き、誰れよりも鑑識がある。管理者の良否に就いても亦た同然である、と吾人は信じて居る。労働者は、今後最早や無關係なる政治的思想に心を引かるゝ事もなく、自己の仕事に專一なることを得るを以て、成るべく、善



い人を最高の地位に選出することが出来るであらう。例へば、今日でも炭坑夫が衡り方を選する  
とき、殆んど間違ひをすることが無い。無論不公平といふ事は、何時の世にも免かれないが、今日  
有能の士が資本家の利益本位で無視される事が頻繁に起るのに比すれば、將來の不公平は物の數に  
も入るまい。吾人の運輸業労働者の「ギルド」も、初めは現在の役員を依然として其の職に据ゑて  
置く事であらう。(但し其人が「ギルド」に加入せざれば此の限りでない)。

次に考ふべき問題は、仕事の分配である。経験と統計とから考へれば、今後二三十年内には、乗  
客の數も幾百萬に上り、貨物の量も數百噸に達するであらう。之れを運搬するに幾多の船舶、幾多  
の荷車「トロツコ」及び幾多の市街電線及び自動車並に鐵道の客車貨車がある。先づ目立つて節約  
の行はるゝ事は、今日と違つて船舶、荷車、鐵道等に競争のない事である。此等は皆な共同して各  
各出來得る限りの力を出し、而かも其の力が最も有効に使用される事になるであらう。

斯くなれば、生産の一部分としての運輸事業に對し、今までのやうに餘計の豫算を立て置く必  
要はあるまい。「ギルド」は、全ての労働者の生活標準は、大約同一ならざる可らずとの假定から出  
發する事となるであらう。但し「ギルド」と「ギルド」との間には多少の標準上の差等があるであ  
らう。然かし、多少は生活標準が接近して居ると見てよい。そこで使用した人數と、使用した機械

の力(人間の労働に換算しての)とを加ふれば、生産の價值は直ぐ決まる。斯うなれば、勞力と富  
とに關する意味の改造が起ると吾人の先きに言つた事が、いよく本當になつて来る。

前章に於て、吾人は國家が「ギルド」と共同する權利を有することを認め、此の點に於て「サン  
ヂカリスト」と意見を異にせる事を陳べて置いた。今ま一度更たてて言ふが、全ての「ギルド」の  
使ふ材料は之れを國家に一任すべきものである。而して「ギルド」の専有するものは、其の組織化  
せし所の勞働力のみである。「ギルド」は此の勞働力に對しては、十二分の統制權が無くてはならぬ。  
然かし、國家は從來の「經濟上の所謂使用料」に今後代はつたものに對し、當然「ギルド」と同一  
の請求權を有するものである。これは經濟的使用料に代はつたものであつて、今までのまゝの使用  
料ではない。今までののは競争的資本主義による個人の所有に屬して居たのである。使用料徴收制度  
のことを初めて説いたのは、「アダム・スミス」であつて、之れを證明したのは「ソロール・ロージ  
ヤース」(Thorold Rogers)が、嚆矢であつたが、此の使用料は再び「ギルド」の制度に於ても採  
用する事となつて居る。即ち特許又は免許に對する報酬としての税のことである。使用料と稱す  
る税が、段々高額に取立てられるやうになつて、終に今日の如き高額に達したのは、資本主義の起  
つた結果である。然るに、國家に對し「ギルド」の支拂ふ税は、競争が無くては其の額を決める事



が出来まいといふ論もあらう。然かし、國家が金を必要とする程度と、「ギルド」の財産情態とから割り出して、決めることが出来る。假りに、次年度の全國豫算が、二億五千萬磅だとせよ。之れだけの金額は一個人としてか又は團體の一員としてかの市民から徴收されねばならぬ。然るに「ギルド」に加入した者に對しては別々に税をかけないで「ギルド」全體にかけるの便宜がある。さうすると各「ギルド」は銘々に國家に代はりて其の會員數に相當の金額を會員から徴せざる事になる。吾人の今まで陳べ來つたことは、「ギルド」の概要である。吾人は之れ以上の詳しい事は述べる必要がない。何となれば、職工組合組織が発達すれば、殆んど全ての詳細の事項は其の意義と價值とを一變し來るからである。然かし、吾人は、以上の説述によりて「ギルド」の長所も十分明瞭にし得たことと信ずる故に、吾人以上の説述によりて經濟的解放を實現する方法が明かに成つた而已ならず、由來「デモクラシー」を脅かす（それも尤もな點もあるが）所の國家的官僚制度と、産業的「デモクラシー」とが、今後は利害相衝突すべきものでないと言ふ事を論證し得たと吾人は信じて居る。

### 第五章 「ギルド」組織を施し得べき産業

各種の職業を分類して、幾つかの重要産業に歸攝することは容易の業である。併かし、職業手藝作業等の大英國に存するもの現に一千二百種の多きに達して居ることを想へば、同じ組織を全てに適用するのは容易でない事が分かる。否な一見したばかりでは其んな事は困難なるのみならず、全然不可能の如くにすら見える。然し乍ら、賃銀制度が全て此等の職業に適用せられて居ると同様に勞働報酬の新方法も、同様に此等全部に適用し得られるであらう。此の議論は不合理ではあるまい。然かし、吾人は此の議論を極端まで持つて行かつと言ふ考はない。何となれば、其の實、賃銀制度そのものは、極く粗雑且つ任意的に行はれて居るに過ぎないからである。果して然りとせば、「ギルド」制度も亦た粗雑且つ任意的に行はれるであらうとは論じ得られやう。故に、吾人は、順次に各種の職業を論じて了ふまでは、最後の結論を急いではならぬ。然し乍ら、吾人は研究中にも、大體の原理は忘れてはならぬ。但だ産業は複雑なものであるから、自然例外も出て來やうし、或は實行上、殆んど例外と見做してよいやうなものも出て來やうといふものである。

然らば、其の大體の原理とは何であるか。小工業が大工業に發達し行く跡について、此の所に詳しい事を陳べる必要はない。吾人の「大産業と賃銀制度」の章に説いたので十分である。大産業の支配力が強くなるに従つて、賃銀制度は之れと相結んで發達した。「ギルド」組織は、此の賃銀制度



から労働専有権を譲り渡されたものである。故に「ギルド」の原理は、何よりも先づ大産業に適用せらるべきものである。故に大體に於ていへば、大規模生産に關する節約法則に従ふところの全ての産業及び職業は、自づから先づ「ギルド」組織を施こされ得べきものだ、——これが吾人の大體の原理である。「ギルド」そのものは餘り「ギゴチ」ない組み立てをしてはならぬ。其の構成上融通のきくものとして置かなくては宜しくない。

批評家は「ギルド」が貸銀制度に代はるべきものなる事を否定するかも知れぬ。彼れは、國家社會主義こそ唯一の解決策だと主張するかも知れぬ。「國家社會主義と貸銀制度」と題する章に於て陳べし如く、若し國家社會主義者が天下を取れば、貸銀制度は繼續するであらう。何となれば、國家が生産及び分配の機關を一手に掌握する爲めには、先づ其の代償をしなくてはならぬ。然るに、其の代償金を支拂ふ爲には、労働者に今日の使用料利子及び利益と同等の重き負擔を課せざるを得ない。故に若し、國家社會主義が事實として實現された場合には、國家の官僚は、労働者から矢張り餘剩價值を絞り取つて、之を以て國債の利子償却に充てるであらう。然るに、餘剩價值なるものは、本來貸銀制度あるによりて生ずるものである。若し貸銀制度が全廢せらるゝときは、官僚に資本家から必要の資金を借りても其の利子が拂へなくなり、隨つて借金が出來なくなる。故に、國家社會主義

にとりて貸銀制度の必要なるは明白である。如何にして産業組織の改良案が、理窟の上では立つかも知れないが、吾人の實行し得る案としては、貸銀制度から貸銀奴隷を解放するの外に道はないと思ふ。國家社會主義は、畢竟資本主義の高級形式、否な少くとも資本主義の一變形に過ぎない。隨つて貸銀奴隷を解放するの力はない事を知つた。公的及び私的資本制度から労働者を保護せんが爲めに組織せられし「ギルド」は、丁度國家に誂へ向きの「イクイボイズ」(同じ重さの分銅)であつて、兩者相待つて平衡が取れる。——即ち國家と「ギルド」とは、國家といふ全體の有機體を生命あるものにする所の「アナボリズム」(建設同化)と「カタボリズム」(破壊變質)との兩つの衝動及び傾向を、かたみ交はりに相補ふものである。「ギルド」の經濟的職能と、國家の精神的職能とは、互に相補充し合ふものである。さればとて、國家は現に經濟的實體エコンミツク・エンチチであつて、又た常に然かあり得べきものと假定してかゝるのは、此上もない失策であり又た此上もない危険である。

否な、貸銀制度で行く官僚政治は、個人的資本制度と同じく壓制的なものに成る。成るほど、國家社會主義は、或る小さな社會改革的特權を與へて呉れるかも知れぬ、——これが貸銀制度の特色である、——然かし其の特權の代償を拂ふものは貸銀奴隷である。

若し國家社會主義が、解決策となり得ない、とすれば「ギルド」の外には何があらうか、故に今



までの賃銀制度の後とを繼ぐ可きものは「ギルド」組織のみである。「ギルド」は賃銀制度を其の初めの要素に分解するものである。富の生産の永久的要素を現在の産業制度に存する一時的要素と分離し、永久的要素は之れを保存し、一時的要素は之れを道徳的及び經濟的批判の火中に投じてしまふものである。是に於てか「ギルド」は實に労働の獨占權を繼承する而已ならず、労働の所産（使用料利子及び利益は労働獨占の中に含まれて居る）をも獨占するものなる事が發見される。こんな譯はだからして、「ギルド」は國民の富の生産及び分配に關する産業的仲裁者たるに至るものだと謂へる。

今も大量生産の原則を適用せる大産業について概観をもて見よう。現在の如き團體組織を前に控へて「ギルド」を如何なる方法で組織したらば好からうか。各種の職業を今の職工組合に従つて類別し、其の二々につき一つ々々の「ギルド」を造るべきか。又はすべて似よりの職業は一つの「ギルド」に屬せしめ、其の間多少融通をつける事にした方が好いか。

生産調査は産業の大英國を大別して、十七類に分ち、其中に農業も含めて居る。（吾人は農業のことは別に引離して論じて見たいと思ふ。これは、一つには便宜上の爲めもある、主たる理由は、農業には農業特有の問題が存するといふ點にある）。其の十七類といふのは、建築、礦山、鐵及び銅

鐵、造船機械工業、他の金屬工業、衣類、織維工業、製紙及び印刷、藥品、煉瓦、陶器、及び「セント」食料品、酒類及び煙草、木工及び家具、皮革、公益事業、其他——此の十七である。然るに、此の大別は、更に小別して百〇六種にしてある。而して全體で六百九十三萬六千人の被僱者を有し、其の勞力の所産は七億千二百萬磅として居る。今も吾人は（農業を除き）何れだけの數の「ギルド」を必要とするか。十六でよいものが、百〇六も必要か、換言すれば、有力な「ギルド」を少數に造るか、弱い「ギルド」を多數に造るか、——これが問題である、いふ迄もなく、「ギルド」が有力なれば有力なるだけ、労働獨占權も完全になる。獨り之れのみには止まらず全體としての「ギルド」が有力なれば、之れを構成した各部分も亦た有力と成る。且つ、「ギルド」が自己充足的なること多ければ多きだけ、——即ち原料より仕上げまでの全ての生産過程を自分の力でやつてのける事が出来れば出来るだけ、「ギルド」は一層效率を増して来る。例へば、機械工業の例で言はう。前章にも説いた如く機械工場に備はれて居るものは四五五六一名であつて、鐵道架設に従事せるものは二四一五二六名、合計雜と七十萬人である。これは一大勞働力と言つてよい。然るに、暖房、通氣及び衛生機械工業に従事せるものは一四、一四名であり道具及び器具を製造する者は二三、四五五名、科學的機械に従事する者は二四、二二二名、鐵冶工場及び作業場にある者は、一九、八四八名である。此等



は前記の七十萬人のうちには含まれて居ない。此等も實は同一工業に屬するものではなからうか。彼等は仕事の上のみならず、原料の上に於ても、一般の機械工業群に頼よつて居ることが多い。吾人の解決せざる可らざる問題は、競争問題でなくて、反つて經濟合同の問題である。——即ち完全なる組織化の問題である、それから今一つは便宜といふ問題である。今ま此等の比較的微力な多数の部類に分かれて働らいて居る労働者は、自づから、本體に合併したいと言ふの希望があるに違ひない（有力な「ギルド」こそ其の頼よりとする所であるから）「獨り之れに止まらず、労働者は甲の機械業から乙の機械業に轉ずるには容易に轉ずる者であつて、別に所屬團體に顧慮するところは無い者である。故に若し機械業全體を網羅する「ギルド」が出来たならば、之れほど簡單で且つ安全な團體形式は有るまい。

今一例として、衣類業を挙げよう。前章にもあけた如く、之れは二大別になつて居る。——衣類工及び私人に傭はるゝ女用小間物工が合せて四四〇、六六四名、製靴工が、一二六、五六四名である。双方合せて雜つと五十七萬の被傭者數だが、其の大部分は婦人である。然るに此外に帽子製造人が三〇、八二九、手袋造りが四、八二八名、美術毛皮品が五、一八六、帽子用毛皮等が二、〇一六、造花及び裝飾工が三、五五三名もある。言ふまでもなく、此等の小工業は、衣類工業の一部分である。然るに

此等の職工——これも多くは女工——が、其の本隊たる五十七萬人の大軍から保郷せられ後援せらるゝでなくば、如何うして一般の「レベル」まで其の生活費をあけることが出来やうか。

此等の小さい別かれに就いて調査して居たところから考へれば、「ギルド」は大きな包括的なものに限ざるやうである。一步進めて言つて見れば、實は上記の大別中で少なくとも二つ丈は合併しても好いものがあると思ふ。——即ち建築業は煉瓦陶器及び「セメント」と合併しても好からう。又た結局のところを言へば、鐵及び鋼鐵業造船業機械工業等と、「其の他の金屬工業」とは之れを區別することが困難であらう。此の「其の他の金屬工業」と言ふ中には、錠前及び金庫製造が七、四一八名、鐵板、金物、盆椀類、錫かけ漆かけ諸器具、寢臺造り等が六、九七〇名、刃物工が一四、六七四名、針、「ピン」釣針、職工が、一三、二五二名、銅眞鍮加工場（鑄鑄、轆機及び鑄型）に働らくものが、二〇、八二七名、眞鍮工場（仕上げ品）に働らく者が、三六、五四一名、鉛、錫及び亞鉛工が八、一九四名、其他一二の業務に従事する者が有る。要するに、「バーミンガム」及び「セフィールド」の金屬工が、何故に「ニューカッスル」「サンダーランド」「グラスゴウ」及び「ベルファスト」の金屬工と合併してはならぬかといふ理由も無い。

然かし若し此の多数の産業が、容易に「ギルド」組織に就くとすれば、而して又た、若し大規模



の「ギルド」が労働者を最もよく保護するにせよ、小さな關係のない諸職業は如何うしたならば宜しいかと言ふ面倒な問題が起る。然るに其中の或ものに就いて觀察して見よう。牛馬犬及び家禽の食物に關する職業者は一、八七九名である。これは農業關係のものを見えないでもない。加工した燃料品に關する者は、一五三七名である。これは礦山關係の「ギルド」に屬すべきものである。毛屑棉襪類關係の工場に出る者が二、三七五名、これは織維工業「ギルド」に屬すべきものである。洋傘「ステッキ」業が七、四九七名、これは衣類關係の「ギルド」に屬しても好ささうに思はれる。鹽田及び製鹽工場關係が四、五一一名。これは一見したところ何處に屬せしめやうも無いが、よく考へると何處かに相當なところが有るだらう。燐寸製造及び棧附製造工場關係が四、二二九名。これは燃料關係と同列にしたがよい。「インキ」「ゴム」封臘關係は一、三二〇名、言ふまでもなくこれは印刷製紙業關係である。洗濯、「クリーニング」及び染物業は一、三〇、六五三名で、これは明瞭に衣類工業の一部である。樂器關係は一〇、一一七名であつて、之れ計かりは謎である。獵用器業は六、三七四名、玩具及び運動具關係は、二、三三七名、象牙、骨、角其他美術品は二、五九二名である。此の最後に述べた四つだけは一小「ギルド」を構成すべきものかも知れない。此等は主として娯樂目的である。或は此等の小さな雜業は「ギルド」組織に適しないかも知れぬ。然かし之れとても賃銀を

拂つて居る。賃銀制度が破壊されるときは、而して又た「ギルド」が病者及び老廢者の扶持に任ずるときは雜業者は非常な割合の惡い位地につく事は成る。恐らく雜業「ギルド」といふ一種の「ギルド」を造つても嫌いかも知れぬ。そして性質上大「ギルド」に屬せしめ得ざる如き職業全部を纏羅しても宜いであらう。金加工（二、一八八）、寶石類（三七、九九七）、時計類（五、二七九）等、は他の金屬類として分類してあるが、實は一般の金屬工業とは大して關係のない特殊の職業である。然かし此所に證據するの必要あることは、此等も亦た賃銀制度によりて存在せるものであつて、隨つて賃銀制度が「ギルド」に變はれば、賃銀稼ぎ人は何處かの「ギルド」に屬せしめなければならぬ一事である。即ち會員を保護するに足る丈けに多數有力な「ギルド」に世話してやらなくてはならぬ事である。何んな場合でも「ギルド」といふ避難所は設けてやらねばならぬ。

此所に述べられし職業及び産業はすべて生産的のものである。此の事は先づ注意して置くべき事である。若し其れ、分配方面の職業に至つては一種特別の難問題を生ずる。然かし大體に於ていへば、比較的簡單な性質を持つた難問題のみである。

初めて研究を仕出したときには「ギルド」といふものが今ま吾人の考へて居るやうな包括的な又た遍通的なものに成らうとは、吾人自身も豫想しなかつた所である。産業組織の解剖的要素となつ



て、此の組織を組み立つて、居る生産的及び分配的職業は「ギルド」組織を造つても宜からう位に考へて居たのである。而して、比較的小さい職業は、現在と多少相似たるものとして繼續し、而かも「ギルド」により改良された労働條件にて好影響を蒙むるであらうと思つて居た位の事である。然るに、議論を進めて行くうちに、「ギルド」には、其の會員を十分食はして行き、病氣や怪我の時には世話までして、老年になつたり働けなく成つたりすれば之れを扶助してやる「オ、ナス」(重い責任)があることを知るに至つた。左ればとて、此の責任を國家と半分持ちにすると云ふ事は、如何にも「ギルド」を馬鹿にしたやり方である。何となれば、斯くせば労働當局が二つ出来て、「ギルド」の主義に反するのみならず、「ギルド」は政府の費用をも負擔せねばならぬ事に成るからである。養老基金として、年に二千萬磅疾病扶助基金として更に三千萬磅を年々國家に献納し、「ギルド」に任かせた方が遙かに甘まく行きさうな仕事までも、「ギルド」以外の屋上架屋的な機關にやらせる——といふ事は「ギルド」としては愚策である。然かし若し「ギルド」が全ての經濟的責任を受けるとなれば、有らゆる労働者を何處かの「ギルド」に屬せしめて一人も無所屬者の無からん事を期すべきである。故に「リンカーン」が、合衆國は「半奴隷、半自由」(half-slave half-free)で何時までも行けるものでないと先見して居た如く、大英國も「半ギルド半賃銀制度」で何時までも

續いて行けるものではない。賃銀労働者の大軍が賃銀奴隷制度の全廢を決心する瞬間からして、「ギルド」編成の運動が全國一致で起つてくる事は疑ひがない。

次に又た苟くも何等かの仕事をして居る者は各自の「ギルド」に屬すべきものだと言ふ事になれば、今日仕事をして居る人間は如何ういふ工合に編成されて行くかを考へて見なければならぬ一九〇一年の調査によれば。務め人の數は一八、二六一、一四六名であつた(總人口四一、四五八、七二一名のうち)。一九一一年の報告では、之れが一般に増加して居るが、其の詳細の數字はまだ發表されて居ない。然かし一九〇一年の統計數字を見た丈けでも、「ギルド」の今後解決せざる可からざる編成問題の一般は想像がつく。

業 務 別

従 事 者 數

- 一、官公吏……………二五三、八六五
- 二、國防關係(海外在住を除く)……………二〇三、九九三
- 三、學職其他……………七七三、五八二
- 四、家庭務め……………二、一九九、五一七
- 五、商事勤務……………七一二、四六五



六、交通關係事務.....	一、四九七、六二九
七、農業.....	二、二六二、四五四
八、漁業.....	六一、九二五
九、礦山石切場.....	九四三、八八〇
一〇、金屬、機械、器具等.....	一、四七五、四一〇
一一、貴金屬、寶石、時計、運動具.....	一六八、三四四
一二、建築造營.....	一、三三五、八二〇
一三、木工、家具、器具、飾付.....	三〇七、六三二
一四、煉瓦、「セメント」陶器、玻璃.....	一八九、八五六
一五、藥品.....	一四九、六七五
一六、皮革、毛髮羽毛.....	一一七、八六六
一七、製紙、印刷書籍文房具.....	三三四、二六一
一八、纖維工業.....	一、四六二、〇〇一
一九、衣類.....	一、三九五、七九五
二〇、食料品、糧草、酒類、下宿業.....	一、三〇一、〇七六
二一、瓦斯、水道、衛生.....	七八、六八六
二二、一般及び雜.....	一、〇七五、四一四

の二十二類の中で、吾人は暫く吾人の「ギルド」の編成法を講じて見なければならぬ。第四類及び五類は無論なほ調らべた上で適當なところに嵌めこまねばならぬ。第二類——即ち國防事務——は「ギルド」と見ることが出来ぬ。之れ文けは當分産業「ギルド」の外に措くがよい。然かし、此の場合と雖も例の如く餘まり窮窟な約子定規はやらぬ考へである。大體前記の分類でよからうと思ふ。

以上の議論から先づ結論せられる事は、「ギルド」は元と大産業に適用するものであるけれども、亦た小さい職業にも適用し得られざるに非らず、否な、之れを包括するを本期とすべきものなる事——此の一事である。

此れ以外の結論を引き出す前には、先づ左の諸問題からして考へて來ねばならぬ。——

- 一、性質又は職業に於て非凡なる如き個人は、「ギルド」外に留まり得るか、得るとせば、如何にして生計を立つべきか。
- 二、特殊の職業又は發生中の職業は「ギルド」外に留まり得るか、得るとせば、如何にして「ギルド」制度の社會に於て職につき得るか、又た職につくとせば如何なる條件に基づくか。
- 三、貸銀制度は何等かの形式にて保存され得べきか。



四、頭腦を働らかす者、著者、新聞記者、説教者等は、十分の精神的及び知的自由を得せしめるに（ギルドの内にも外にもありても）如何なる方法を採用すべきか。此等の問題に對する答解は次章に述べよう。

### 第六章 孤立的職業

前章の終りに起された四つの問題は、個人又は團體の獨立といふ根本問題に觸れて居るものである。此の個性的獨立の保存といふことが産業上に必要と考へて居る人も少なくない。此等の人々は少くも個性の自由を制限するやうな共同努力には反對するのである。即ち彼等は、一方に於ては職工組合主義に反對し、他方に於ては「トラスト」に反對する。此の兩組織は個性を滅却するものだと彼等は論ずるのである。之れと同様に、社會的運動はすべて彼等にとりて禁物である。何となれば、國家が經濟界で仕事をする事になれば、個人の傭主と同じく壓制的であるかも知れぬ（より以上に壓制的では無いとしても）と言ふのである。斯くも個人的自由を心配するのが人情である以上は、自由は何時までも傷かずに永續すべきものであらう。群集の生産又は分配の事業に於ては、天下無類の個人性を有する者も、鑄型に入れられて、平凡な「タイプ」となつて了といふ危險の常に存

することは、吾人も之れを疑ふものではない。然かし、現在の産業制度に對しては、まだ幾らでも大きな不平がある。個人的資本主義の世の中には、産業的天才の教養といふ事も少しも行はれない。況んや系統的教化をや。試みに互に性質を異にせる十人の者があるとせよ。此人々にして、別に金もなければ「引き」もないとしたならば、果して其の能力を十分に發揮し得るものが何人あるだらうか。若し其の中の誰れかが『アライヴ』(alive)——名を立てる)すれば、之れは餘程珍しい例である。然るに、資本家は直ぐに其れ來たとばかりに之れを食ひ物にする。——『それ見ぬことか、吾等の産業制度が好いからこそ此のやうに實力あるものは頭を擡げるではないか』と。然るに、今日、天才とか特殊の才ある者とか、世に出ることの少ないのは事實であるが、よく考へて見るといふと、此の一人の名をあけし者よりも、名のない九人の方が、精神的にも道德的にも優良な人物であるかも知れぬ。例へば吾人は人を評してよく斯んな事を世間でいふのを聞く。あの男は珍らしく力のある男だが、あまり大人し過ぎる、——彼は氣力 (push) が無いからね』と。然るに、此の「プッシュ」といふは、實は儕輩を押しつけて進む力のことである。又た例へば、吾人は成功した人のことを評して、よく世間で斯んな事をいふのを耳にする。——『フム、あの男は才物は才物だが、全たく無遠慮だ』と。又曰『あの男は自分より偉らい者を利用することを心得て居る』と、



又曰「あの男は若かい才物を身邊に集める丈けの鋭どいところの有る男だ」と。こんな例はまだ、有るが、さう澤山に擧げるにも及ぶまい。要するに、其の要點は斯うなる。——個人的資本主義は、個性の利益を制限する。随つて、其の限られたる狭まい範圍にとり的確に役に立たぬやうな全ての才能は、爲めに破却されて了ふ——と。是に於てか、「デモクラシー」の根本の原則に融れた問題が起てくる。如何なる制度と雖も、「デモクラシー」制下の個人に潜在せる諸能力を成るべく多く發揮せしめるでなければ、眞の「デモクラシー」とは謂へない。

吾人若し「デモクラシー」指導者の多數の人々の常にやる所をよく調らべて見るときは、彼等が「デモクラシー」の機關を利用して、一定のところまで頭を擡げる、それから自己の地位が安全になると、意識的か無意識的かは知らぬが、直ぐに資本家の眞似をしたがり、資本家風の着色を帯びた道徳を口にするやうに成る。蓋し彼等の目的は、個人的資本制度を民衆化せんとするに在つて、精神上實質上これを轉覆しようとするのは目的でないやうに見える。さればにや、政治方面の「デモクラット」等の所謂『徑歴』（キャリアー）は、「ロイド・ジョージ」又は「ボナー・ロー」等の『徑歴』と比し、單に形式を異にせるのみである。故に、思慮ある人々は、新らしく「デモクラット」だと稱して出てくる男が、舊式の資本主義者と同じく自由の障礙をする者に成らないやう、豫じめ

用心して置くがよい、（それを嫉妬するのは好くないが警戒は怠つてはならぬ）——と言つて居る向きが充分ある。吾人までも其の杞憂の裾分けにあつかるわけも無いが、「ギルド」を送るにつけても産業的天才と、個性の能力と、趣味との涵養を計かり、其れを壅塞しないやうに心がく可きである。

故に「ギルド」は解放と自由繼續との機關とすべきものであつて、舊るい壓制に取つて代つた新しい壓制形式となつてはならぬ。「ギルド」に屬せしめ難き非凡無類の職業に對しては、如何なる規程にした方が好いか、之れを決める前に先づ其の何物たるかを調べて見よう。

(I) 現實に富の生産及び分配には關與せざる、思想觀念の職業、例へば僧侶とか、説教者、藝術家、工匠、新聞記者、著者等は此中に入る。

## (II) 發明家

新思想及び發明等にして、未だ「ギルド」の承認し居らざる者を率先唱導し提示するに専らなる者の一群。

(VI) 純然なる學者、及び獨創的研究に専らに従事せる全ての人々。

(V) 貸銀制度を保存して置いて好いやうな其他の者の一群。

法律醫術等の職業は態ざと畧した。これは、此等の職業が既に「ギルド」の胚胎（未だ事實として



の「ギルド」ではないにしても）と成つて居るからである。最近の醫師會に於て、「マンチェスター」の「レントール」(Rentoul)博士は、吾人の唱導するのと正さに同一の主義にて醫術「ギルド」を設けんとの計畫を畧説したが、此の説には、同業者仲間にも賛成者があつた。

(I) 知的生活をするものに、毎日同じやうな平凡な機械的仕事をさせるのは、知的自由と知的進歩とに對する最大の障害である。精神は風の如きものである。己の吹き度いままに吹く、之れを捕へ之れを籠に入れんとするは、無謀の企てである。然るに、吾人は先きに失業者惠與金並に養老金疾病救恤金を國家の手から「ギルド」の手に移す事にしたが、此等の惠與金救恤金の類は、此の「ギルド」外に孤立せる人々には授けない事になる。故に、自から求めて僧侶になり説教者となり、藝術家となり、工匠となり、新聞記者となる者は、誰れか助けしてくれる人に頼よつて生活して行かねばならぬ。今日は漸く食つて行く位の間が多數であるが、「ギルド」の世の中になれば、今日よりも富める人が有らうから、其等の人に頼よつて行く事も出来る。「ギルド」に加入して働らいて居る人間は、購買力も多い。随つて、自分の欲しいと思ふものは何でも買ふことが出来る。而して其の欲しいと思ふものの中には、物質以外のもの、例へば思想とか文學とか、宗教的儀式とかも有るであらう。彼等は勿論これを買ふことが出来る何となれば其の欲しいと思ふものには金を出すことを

吝しまぬからである。故に、宗教の主義が、多數の人に共鳴を起す底のものでありさへせば、宗教上の集まりは今後も引つゞいて、催ほすことが出来る。但だ今日と違ふことは、今日のやうに執事や寄附者が威張る事が止んで、會全體が、金のあるものゝ集まりに成るだけの事である。これは宗教の事であるが、美術品に於ても同様に、今後は需要が増加する。(創作にしても原圖の複製にしても)。工匠は今日より需品は殖ゑない。今後の人は趣味が高くなつて居るから、良い作品でなければ需品が少ないからである。建築にしても、家具にしても、織物にしても、技巧の優れたものほど需要が多い。此の意味からいへば、工匠は「ギルド」に加入して居た方が割りがよい。其の作品に對する需要は「ギルド」内部に於ける方、外部に於けるよりも多いからである。然かし彼等は、大量生産に反對で、二本の手を頼よりに、獨立の生活がして見たければ、自分の名聲と技倆とをあけて其れによりて財政上の要求を充たす事も出来るやう。然かし、初めから左様しなくとも「ギルド」加入と獨立とを折衷した生活をする事も出来る。今ま假りに年の若い大工があつて、木彫りの名人に成つたとせよ。彼等は少年のときには慰みに彫つたり、經驗の爲めに彫つたりして居たが、段々「ギルド」の人々からの需めに應じて彫る事もあるやうに成り、次第に其の名が擴まつて、頼み手は特別の包み金まで出すやうに成り、煖爐柵とか椅子とか、階子とかの飾りを彫つてもらふものが多く



なつたとせよ。斯うなれば、彼れは「ギルド」を一年ぐらゐ退ざいても好からう。尤も、其間は會員の扶助の爲めに、疾病救恤金失業救恤金養老金等の出し前を「ギルド」に納めなくてはならぬ。其の出し前の高は、直ぐに計算がつく。後とになつて再び「ギルド」に歸らうと思へば、歸られる。例へば流行が廢たつたやうな場合はさうするがよい。流行が廢たつて舞ひ戻つて來て見ても、斯かる人は以前よりも経験を積んで居るから「ギルド」にとつては矢張り有益な人間である。之れと同様に、説教者も、一時傳道の爲めに暇を貰ひ、其の間は傳道事業に賛成の人々から金を貰つて衣食し、相當の時期の後に再び「ギルド」に舞ひ戻つて復た本との仕事に就くことが出来る。この規則は國教以外の多くの宗旨のものには恐らく適用されるであらうが、羅馬教の僧侶、及び「イングランド教」(「アングリカン」)の僧侶には適用が出来ぬかも知れぬ。此等は別に有志後援會などが出來て其れに扶養される事に成るであらう。

新聞記者も亦た之れに類する。よい成績をあけんとせば、彼れは自主獨立の人とならなければならぬ。「クエーカー」宗徒が、すべて精神的の奉仕は、隨意的且つ無報酬的でなくてはならぬと主張して居るのは、正しい考である。新聞記者の精神的使命は、有給記者の團體が殖ゑて、新聞の商業的經營に隷屬せざる可からざるに至つて下落して了つた。今日の如き「ジャーナリズム」(新聞業)の世

の中には、賣文といふことが行はれる。これは人類最大の罪惡である。これが爲めに、國民生活は普通一般に想像せらるゝ以上の破壊を蒙つて居る。

然し乍ら、新聞種子や意見を適當に發表するには、毎日極まり切つた仕事をしなくてはならぬ事が多い。副主筆は其の新聞の特別の政策如何を顧みず、自分のするだけの仕事は威張つてする事が出来るかも知れぬが、自己の確信に反する言葉を筆にすることは大威張りでは行れない事かも知れぬ。故に新聞記者には二つの種類がある。——(a)自分の書がなくてはならぬ事を書く人と、(b)世間の要求するものを書く人とである。第一種のもものは、自分の良心で立つて行く人である。斯かる人は其れに適するやうに生活法をかへて行かねばならぬ。第二種の人物は、自分の腕で立つて行く人である。斯んな人は何時でも其の腕を買つてくれる市場がある。然るに自己の良心といふ法廷に出て物を書く人は何にか職業で食つて行き、又は少數者の保護を仰いで食つて行き乍ら、傍ら筆を執つて居るやうにする方が都合が好い。

「ギルド」制度の世の中になつて、収益といふことを考へないで好いやうに成れば、新聞事業の本當の職能は那邊に存するか。之れにつき今日では大分人々の考も判然として來たやうである。其の職能の第一は報導といふ事である。報導すべき新聞種子の供給は、漸次海外電報及び内地電報に關



する組織團體が取扱ふべき仕事と成つて來て居る。新聞は——所謂新聞である限り——電信電話によつて作られるものである。故に新聞記者の中で、種子取りをする者は、結局電報（有線無線の別なく）に關係しなければならぬ。さうすれば將來飯の食ひはぐれはない——恐らく公吏の資格にて使はれる事になるであらう。

今假りに、一團の人が、一定の思想と教説とを傳播せんことを希望するとせよ、（それが政治的、社會的、宗教的、又は技術的何れの思想教説であるかに論なく）此の一團の人々は、其の仲間のうちにて主筆を指命し、政策を樹て、外交策を決める事となる。それから印刷「ギルド」に相談をして必要なる保證を提供し、斯くて愈々彼等の「機關新聞」が發行される段取りに成る。彼等が其の主筆を補助する事と成るか、又は主筆は任意に「主義の爲めに」働らく事に成るかは、關係者一同で決める事である。兎に角、今日主張して置かなければならぬ事は、「ギルド」制度に於ては、個人的行動と思想の自由發表との餘地が多くなるといふ一點である。

(II) 發明及び發明家に關する問題は、非常に大切であるから、之れは十分に論じて置かなければならぬ。依て之については別に一章を設ける事にした。

(III) 「ギルド」に直接受け容れられざる如き新しい思想や發明も、之れを妨害してはならぬ。何

となれば、斯んな新しい思想や發明の出る爲めに、行政も沈滞を免かれ、保守的なやり方や保守的な傾向も、幾分進取的になるからである。今假りに、或る「ギルド」が甘まく行つて居るとせよ。其の各機關（生命ある人間も生命なき機關も）整然と運轉して居る。而して満足の念が全會員に溢れて居るとせよ。然るに、人間の發明力には限りが無い。發明は後とからくと出て來て機械的及び經濟的の革命が起りさうで心配になる。可なり新しいと思つて居た機械も、間に合はなくなり現在のやり方に新陳代謝が行はれ、新説を唱へるものが舊説を唱へて居るものゝ地盤を奪ふ等——要するに完全な「ブールベルズマン」(bouleversement)——ひつくり返ること）が行はれるやうに成る。そこは人情だから、舊株を墨守するものは必ず新しい者に反抗する。而かも極力反抗する。専門外の人は機械學力學上の新しい原理が、如何に手痛く批判攻撃されるかを、十分には想像し得ない。最近の例をあけるに止めて置くが、其の例が三つある。一は自動車の「ナイト・スリーヴズ・バルブ」(Knight Sleeve Valve) 二は無線電信、三は空氣より重もくて空中を飛ぶ機械——である。此中第三の例のみについて見よう。一世紀の久しい間、人間は空氣より軽い瓦斯體によりてのみ空中を行くことが出來ると考へられて居た。然るに空氣より重もい飛行機なるものが出て來て、今までの舊説の反對にも拘はらず、立派に飛んで見せる世の中に成つた。斯くて未だ不完全ではある



が、若い航空者が勝利を博した。ことだけは確かである。水船主張者に對し鐵船主張者が大に奮闘した事、それに次いで鐵船主張者に對し鋼鐵船主張者が同じく奮闘した事も、つい近頃の事であつた。産業の歴史の上にも斯のやうな話が多い。其中には、軍人や辯護士や政治家などの話よりも面白い話が多い。今後にも新しい發明の出来る度に此のやうな争闘は反覆されるであらう。吾人は其の覺悟で居なくてはならぬ。

將來の科學者及び機械發明家及び發見者等に對し、吾人は今後は、單なる政見の如きものゝ爲めに争ふ以上に此等の發明發見者を辯護して争ふ世の中になることを保證して置く。「異派」といふものゝ存在するのは取りも直ほさず、人生の重要事項については、世人が無關心に成り得ないといふ證據である。異派に屬する考を持つた者は、直ちに協會を造つて自分等の主張を證明し、何度も實驗して見る金を造らうとするものである。例へば若し或る「ギルド」が「空氣よりも輕ろき」航空機を主張するならば、「空氣よりも重もい」航空機の採用案を排斥するであらう。これは想像するの困難でない。さうすると新派の方でも直ちに協會を造る、之れに屬する機械技師は「ギルド」を退く。廣く寄附金を募集する（此の場合、恐らく「ギルド」自身でも寄附をするか、又は便宜を計つてやるだらう。「ギルド」は保守的であつても卑劣なことはせぬから）。斯くて先鞭を着けた仕事

清々進捗して行く。

「ギルド」の一員が、個人として其の教會とか新聞とか、繪畫とか書籍とか、發明とかに對し、寄附後援をするのは如何なる方法でやるかに就き、簡單に此所で述べて置く方が便宜である。八百屋物や衣類の代を拂ひ、又は其他の物の代を拂ふ事についても、亦たさうである。各「ギルド」はそれらに銀行の代はりをする。銀行と言つても、今日吾々の考へて居るやうな銀行は古るい。「ギルド」の各員は、毎月又は毎季に自分の給料だけを預金した形ちに成る。故に彼は自分の預金が今は何圓になつて居るかを心得て居る筈である。假りに今日同様の貨幣制度が今後も續くとせんか、彼れは時々現金を引出して小額の支拂ひをして、其の残りは自分名義で積み立てゝ貰つて置く。之に對し彼れは「ギルド」手形を發行することが出来る。自分の一存で何か金を使ふことが起れば、此の手形を發行しさへすればよい。

(IV) 純乎たる學問研究の爲めに規定を設けることも、將來の教育には必要な事項である。此所には唯だ科學的研究が、現今の如き制度の下では發達しない事を述べて置くに止どめやう。高等教育をうけた無産階級、統制力を有する富める「ギルド」は、學問研究に無關心なわけもなく、其の便宜を講ずることを怠たるわけも無い。然し乍ら此の問題は更に詳しく論じなければならぬ。何となれ



ば、國家及び「ギルド」の聯絡及び關係を詳しく調らべて見なければならぬからである。

(V) 爰に今一つ残つて居る問題は、賃銀制を保存して置く可きやうな職業が残つて居るか如何うかといふ事である。吾人は其んな職業があるか如何うかは知らぬが、婦人の仕事の或ものは、矢張り賃銀仕事による事となるかも知れぬ。家婦のやうなものも然うであらう。着物の仕立てをする職業も然うである。但し、之れは高等なものに成ると、矢張り一専門を形成する。前にも言つたやうに、婦人は賃銀制度に一番あとで入つて來た者であるから、之れを離れるのも一番あとに成るであらう。何時に成つて此の制度を離れるかは、一に婦人次第であるが、又た一つには結婚制度の發達如何にも關係がある。然かし此の發達は今日から豫言は出來ない。兎に角、雜業の中には「ギルド」の影響を蒙むらずに存続するものがあらう。其れが何々の職業であるかは今のところ分明でないが、恐らく一代も其れ以上の間も今のまゝにして居るかも知れぬ。又た「ギルド」其れ自身も、漸次成熟の域に達するに従つて其の會員外に一定の職業者を留めて置くのが便利だと思ふ事も起るであらう。昔し工場組織が始めて起つたとき、暫くの間は織維工業を工場組織にしないのが便利ではなかつたかと考へられて居た事もある。自宅業者が工場に入るやうに成つたのは、近頃のことである。今日でも未だ自宅で紡績機織をやつて居るものが幾らか残つて居る。然かし世間一般の發達は斯かる例

外の者を後ろに遺してずん／＼進歩して行つた。

### 第七章 「ギルド」か「トラスト」か

將來の産業闘争は、一方には「トラスト」、他方には「ギルド」といふ二大々關の間の取組みである。「トラスト」は資本の特占者であり、「ギルド」は労働の獨占者である。若し「トラスト」が甘まゝく労働を征服することが出來るならば、今日の奴隸的情態は必然の結果として永續する。「トラスト」勝たずんば「ギルド」が勝ち、「ギルド」が勝てば「トラスト」が負ける。産業社會は其の兩立を許ささない。

抑も「トラスト」といふ意味、其の目的及び其の方法に關しては、幾多の誤解がある。「トラスト」と言へば、人は直ぐに競争を無くする爲めに存するものゝ如く考へる。即ち、生産と分配との費用を節約して、生産品を廉價で賣り、外部の競争者が立つて行けないやうにするのが「トラスト」だといふ人は直ぐさう思ふ。然るに此の結果の生ずることも有り然らざる事もある。要するに之れは「トラスト」本來の目的ではないのである。其の實、この競争防止といふことは、「トラスト」の第一目的に附隨して起るものであつて、第一目的は矢張り、費用を整理して配當の斷へないやうにするとい



ふ事に存するものである。換言すれば、「トラスト」は、本來一の財政的組織である。第一「トラスト」といふ言葉が純然たる財政上の企てに適用されたといふ事實があるのに徴しても分かる。人名簿又は倫敦電話帳を見ても直ぐに分かる通り「トラスト」は其の範圍及び目的に於て財政的のものである。吾人は又た此の語を私法上の意味に使うて、例へば財産を他人の「トラスト」に於て措く（即ち「託する」とか、財産管理権を行使するとか、管理人を指定するとか言ふ意味で、此の「トラスト」の語を使ふ場合がある。財産管理人は、事業や財産の處理方針其他につき、決定権を有する場合と雖も、殆んど財政的動機のみで行動し、管理方面は「マネジャー」に一任する形になるのが常である。且つ「トラスト」基金は、一般に債券証券證書等の性質を帯びたものであつて、財産管理人が再投資を行ふ場合には、議會の條令により一定形式の保證金を納める事に成つて居る。配當の支拂に關しては、「トラスト」（個人であつても大企業であつても）は、原料に加工して生じた勞働價值から賃銀を差引いた額に應じて配當額を定める。即ち餘剩價值から配當を行ふものであつて、商品として勞働を競争價格で安く買入れ、其れに澤山働らかせて出來た餘剩價值から配當を行ふものである。吾人は曩きに被傭者一人當りの生産の正味と之れに支拂はれた平均賃銀とを計算して置いた。此の二つの間には差額が出るやうにしないではならぬ——といふのが「トラスト」の主張である。

ある。此の目的を達するには、絶對的に賃銀制度を繼續しなければならぬ。然るに「ギルド」は、此の目的を打破せんが爲めに、餘剩價值を生じないやうにし、何等の壟斷も出來ないやうに、其の金の出どころを無くして了ふことを主要の目的とせるものである。此の餘剩價值の吸收といふことが將來の經濟的革命的革命の核心である。

「トラスト」組織が産業界を蠶食するやうに成つたのは、形の上に表はれざる「トラスト」が形式あるものと成り、其の財政上の將來を安固にすることの必要に迫られた結果である。故に「トラスト」は、賃銀制度維持の必要を深く自覺して居るものである。其の結果として、將來は主もに左の問題を中心として争闘が行はれた事になる。——即ち「トラスト」は賃銀奴隷どもの物質的慰樂を増さんが爲めに、「ギルド」の上は手を越して勞働を高價に買ひ上げ、まだ十分に成熟し切れない「ギルド」は「トラスト」の知らない苦勞をする事になるか如何うか。——この問題である。

故に吾人は今「トラスト」の運用及び組織を精確に理會し、特に非公式に出來て居る「トラスト」、随つて目には見えぬ、直接に攻撃も出來ないやうな「トラスト」について、十分明瞭に理會し置かんとすることが重要である。

「トラスト」組織の起原は合資經營の發生に於て之を窺ふことが出来る。大英國に於ては、合資會



社の最初の目的は、組合員の利益と責任とを定め且つ制限せんことに在つた。子供が大きく成つて組合つて商賣をする様になり。又は娘が片付くやうに成ると、娘の持参金を如何うするか俸の生計を如何するかと言ふやうな問題が、親爺の目前の緊急問題となる。是に於て、親爺が商賣の金を無闇に引き出す憂が起つてくる。そこで此事の出来ぬやうにする爲め、合資分配と有限責任との制度を設ける必要が起つた。之れ昔の會社法が實際は社員をして其の事業を自から處理するの權能を得せしめんとする法規たりし所以である。今日と雖も、株主は自分の投資した事業に於いては、自分は一種の社員だと漠然さう思ふこともある。然かし實際の事實は今日其れとは餘程違つたものに成つて居る。普通一般の投資者は會社を以て單に配當を得るの機關と見て居る。其の配當が如何なる手段で得られるかは、株主の間ふ所でない。株券債券さへ持つて居れば、其れが造酒株であらうと、洗濯株であらうと、土地株であらうと、金礦株であらうと如何うでもよい。たゞ何割の配當かと云ふ事を問題にする丈けである。彼れに取つては社員組合員などいふ事は無意義である。

斯くて、商賣の儲かり具合と其の株券の市價とのみを願望するやうな投資者が多數に起つて來た。數年前までは、此種の株主に直接に投資方を依頼したのであつたが、最近に至りては、倫敦、巴里、伯林、紐育其他の金融機關が仲に立つて此等の株主を集める事に成つた。かゝる事實あるが爲に、先

づ財政機關の車に油を塗つてからでなくては、社債でも株券でも巨額には募集することが出来ぬやうに成つて居る。此の金融機關は即ち「トラスト」である。「トラスト」の目的は純然たる金融的のものである。其の配當を生ずる所の勞働は、市場にて賣買せらるゝ一種の商品である。「トラスト」は、此の市場を甘まく抱きこんで征服し、若し聽かざれば餓死を以て脅かし、又は警察力を以て威どし、それでも應じない時は最後に武力を用ふるをも辭せない。如何なる範圍まで投資者の組織が擴がつて居るかは、門外漢には窺ひ知ることが出来ない。それは世間一般にも分からず勞働黨にも分らない。例へば、倫敦の或る會社の如きは三千萬磅以上を統制し、大小の投資者は發信用人名簿の上でも合計二十萬人に上ほつて居る。此等の投資は綿密に分類され——或者は或種の投資法を選び、又或者は他種の投資法を希望し、或者は五朱利付の債券を求め、或者は事業を買はふと思ふ。——といふやうに分類してある。倫敦の株式仲買店の中には、投資者を三種に分けて居るのがある。第一種は公債のみを希望する者、第二種は相當有利な普通の株式又は優先株を買ひたいと言ふ者、第三種は投機希望のものである。此外か別に金礦への投資希望者あり、麥酒株希望者あり、事業希望者あり、土地希望者あり、家屋希望者其他種々雑多の希望別がある。佛國の銀行業者は、佛國農夫の貯金を集め出すに妙を得て居る。佛國の農夫は六朱利付の無記名債券を好む。佛國で豐作の年に



は、必ず新株募集が澤山出る。それは巴里でも募集し倫敦でも募集する。殆んど全ての倫敦の金融業者は巴里に支店又は代理業者を置いて居る。今日佛國は英國よりも世界中の金貸しとしては大きい米國及び獨逸は今でも借り手の方である。斯くて、或は貸し或は借ること（何れにしても銀行には利益である）により、世界中に一大金融網が張り渡たされる。其の金融組織は形ちに表はれては居ないが、其れでも中々有力である。米國では（外國よりも中央集注的であるが）之れを『金權（マナー・パワー）』と稱し、此の權力の前には諸公も叩頭し、諸王を支配する者も支配される。

「トラスト」は、此の金權の發動である。其の産業に對する態度たるや、正に株主の會社に對する態度である。經濟的生産及び分配、競争廢止（貸銀だけは競争させようとするが）、海陸運輸機關の占領、——すべて此の如きことは、「トラスト」組織から結果し來たるものである。然かし此等は、悉く貸銀制度永續の獎勵により、壟斷を行ひ配當を保護せんとの大目的を達する手段に過ぎない。

金融の發達につれ、一定の大投資者が一定の工業を左右して居るといふ事實が發見された。例へば「カーネギー」一派は米國の鋼鐵界を統制し、「アームール」の一派は米國の罐詰業を統制し、「デューク」一派は、米國の煙草事業を統制して居る。然るに此等事業を合同して、増資を行つた方が一層便利且つ有利であることが、次第に明瞭に成つて來た。斯くて鋼鐵トラスト起り、小麥トラス

ト、煙草トラスト其他五つ六つの「トラスト」が起つた。此等の「トラスト」は、本來は金融機關であつて、産業諸問題などは重きを置いて考へて居ないのであつた。大英國に於ては、邦が古いだけに産業的發達は一層複雑な結果を生み出した。随つて大英國の「トラスト」は米國ほど簡單でなく、又た目にも立たない。自由貿易論者は、往々自由貿易は「トラスト」を撲滅する力があると主張する。之れを事實に徴するに、殆んど全ての大英國の産業は無形的に「トラスト」になつて居る、——鐵にせよ、鋼鐵にせよ、造船、纖維工業、鐵道、藥品、いづれも「トラスト」の名こそ無けれ、實は皆な「トラスト」をやつて居ないものは無い。壁紙「トラスト」などは公然たる「トラスト」である。然らば表向きにならぬ非公式の「トラスト」は如何にして「トラスト」的事業をやつて居るか。其の方法に二つある。——(a)同業組合を設け、定價又は相場をきめる。(b)株式を交換し、支配人を指命する。斯く言へば誰れの心にも浮んで來る名前がある。故「フハーネス」卿、「セーント・デービッツ」卿、チャールス・マカラ」卿、「アーサー・キーン」氏、「デイ・エー・タマス」氏其他數十名の「トラスト」王の名である。此等の人々は「アーモアーズ」及び「カーネギー」の徒の原型手本たりし英國紳商である。而して何れの點から觀察しても、「カーネギー」等の米國紳商に比し力倆も多く、經論にも富んで居る。



此等の米國及び英國の「トラスト」王には一つ共通の點がある。即ち彼等が各その事業に通曉せることである。此の事實は「トラスト」を以て本來金融的のものだとする吾人の論を破ぶるに足るものであるか。彼等にして若し自己の事業に通曉せる人であるとするも、其の仕事を實際に經營して行く上には、必要の場合に金の融通を工面することが一番大事な務めではなからうか。彼等の中の一人につき其の成功の來歴を辿つて見よう。此人は初め船を一隻借りた。次に或る船の株を幾枚か買つた。其のうち非定期汽船を數隻買入れた。次に新に船を造らせた。さうして居るうち、自分で船を造つた方が儲かると考へた。それからして、鋼鐵と機械とを買はねばならぬと氣付いた。そして、鋼鐵板の製造及び船舶機械の製造で一と儲けして見ても好かりさうに考へた。其のうち色々な企業に手を出した。然かし其れは多少船舶と關係は有つた。彼れは多量の石炭を買はねばならなかつた。それでは一層のこと相當な山があれば手を出しても好からうと考へた。そして其れを實行した。然かし斯んな事をして居るうち、斷へず巨額の資金が入つた。そこで彼れは古るい會社を改造しては新らしい會社を起して來た。次第に遣り繰りをして居るうち、金融の事にも通じて來た。そこで當節は自分が法律的には責任はなくとも道德的には責任のあるやうな自分の株主に對し、色々甘まい事を言つて誘ひ出し、又は機嫌をとり、或は威嚇手段をとつたりする事に、彼れは終日憂身を

やつして居る。斯んなわけで金融の事に頭も氣力も費ひきつて居るから、其の澤山な工場の何れにも足を入れた事もない。其れのみならず、彼れは資本を遊ばせても置けないから、船は引つゞき造らなければならぬ。其れかと言つて空ら手では株主に顔を合はせる事も出来ない。株主は「ネダリ屋」で、顔さへ見れば「呉れく」といふ。株主の一部に「其う船ばかり造らぬでもよい」といふ者があれば、彼は他かを獵さつてまはり、丁抹か獨逸か、瑞典か、佛蘭西か、奧地利か、南米かの或る會社で汽船の欲しいといふのを探かし當てる。然るに其會社に今ま金はない。船は五萬磅乃至二十五萬磅の價のものだが「マー、現金でなくも好い。船は造つて上げるから五朱利付の債券を九十圓宛で渡してくれ」と頼のむ。其れを受取つて彼れは兎ある金融商に行き、此の債券を九一か九二で賣る。其れが英國か佛國の市場に持つて行かれて、九五で賣れる。そこで例の紳商は自分の株で又た一隻船が出来る。斯ういふやうにして彼れは金融に通曉してくる。其れと同時に彼れは金の爲めに東奔西走して居る。彼れに斯んな事の出来るのも金融市場の好景氣の時に限る。彼れは貸銀制度を全廢すれば一文の金も取れぬ。貸銀から配當を生み出すやうにして居るからである。そこで彼は労働者に對しては非常にやましい。自分の腹をいためぬ限りは、労働者との利益分配も始める。「ボーナス」も出すし、急進黨中の穩健派として議會にも出るし、終には（反對黨から資格無效の請願が出て下



院議員を止められ) 上院議員にまでも成つた。然るに爰に一つ明白な事實がある。それは産業から出て彼れが金融界の人と成つた事である。彼れの今日あるは、其の金融に適する才能を有せし爲めである。彼れは數百名の人を使つて居る。彼等は皆な彼れよりも技術の上では優れて居る。

彼れは、幾くら金を造つても造つても足ることを知らない男であつて、其の事業に適する人ではない。「ギルド」組織のよいのは此の點である。造船とか、機械工業とか、炭坑事業とか、言ふやうな工業が、右の如く金融の鼻息を窺つて經營されねばならぬと言ふ道理はない。人類は此等の工業を、金融の流行を顧慮せずに行はんことを、要求するものである。世に金融界の流行ほど變動のあるものは無い。今日は「ゴム」が人氣があるが昨日は硝酸とか自轉車とかであつた、明日は又た油に人氣があるかも知れぬ。

故に、若し、「ギルド」が有力なる需要の真相を解し、之れを金融情況に煩ひされないやうにするときは、船舶でも汽罐でも、鐵板でも、有効に造り出すこと、今日の金融制度による廻はりくどい、而かも往々卑劣手段の入るやり方で行くよりも、遙かに甘まく行くであらう。今日の資金調達法は實用的でなく、憶劫で氣まぐれで、而して專制的である。産業を適當の「ギルド」で統制すれば、實用的に熟練的に秩序的に而かも慎重に經營することが出来る。今日の「トラスト」王は金に魂を賣

つて了はなければ、やつて行けない。其のやうに年中離業して働らいた結果は如何、一年間に造船と船舶機械工業との純益が一七、六七八、〇〇〇磅であつて、其の使用人員は一八四、五五七名である。此等の被傭者の信用を合はすれば一七、六七八、〇〇〇磅の金が集まるべきことは、此の事實で推しても知れる。此の如き簡単な事が「ギルド」に分からなければ、共同組合に相談するがよい。然かし一人々々の被傭者が何ほどの働き高をあけるかと言ふ事ばかりが問題ではない。他の「ギルド」にも各員に信用があつて、其の信用が此方の「ギルド」の信用を増して呉れることを考へなくてはならぬ。

是に於てか、吾人は最初の出發點に戻つて來た。最初の問題は——金の獨占者と勞働の獨占者と何れが經濟上は有力か——といふ問題であつた。答へは簡單で説明は入らぬ。勞働群の心の中に少しも奴隸根性が無く、政治の口車に乗せられず、經濟的解放の理想を懷いて居るやうであるなら、今後の大争鬭は「ギルド」の勝利である。「トラスト」は貸銀制度の全廢といふ罅裂が出来た爲めに一大風船の罅裂を生じて四邊に破裂する如く、爆破崩壊して、後には其の骨組みと絹の「カバー」とのみが残るに過ぎない。其の絹が偶ま以て「トラスト」の經帷子となるであらう。



## 第八章 「ギルド」の財政

前章に於て「トラスト」の目的は金融に在ること、「ギルド」の任務は金融事情に制限されざる有力なる需要に應ぜんとするに在ることを陳べた。これは果して實行し得べき事であるか。「ギルド」が、若し自己の實力によりて其の生産を爲し又これを分配し得ば格別、然らざる限り矢張り資本家に金の融通を仰がなくてはなるまい。然るに此時までには、資本家は最早や政府の力では如何ともしがたき有力なる壟斷階級となつて了まひ、然かのみならず、之れに資金の融通を仰いでも、之れは一時の相談だと感づいて、中々貸しては呉れぬであらう。故に個々の資本家を相手にすることは止めねばならぬ。「ギルド」の經營は個人主義的資本制度と相矛盾せるものである。然るに今日の銀行も、亦た之れ資本主義的組織であつて、利益を得んが爲めに金を買つたり賣つたりする機關である。斯ういふ事情だから、先づ銀行業の全組織からして改造して來なければならぬ。

然らば「ギルド」當面の財政問題は何んであるか。

第一、原料品に對し支拂をしなければならぬ。特に外國産の原料品に對して左様である、例へば、綿花は米國で買入れ、穀類小麦は米國、及び印度、露國其他で買ひ、藍、米、絹、珈琲、茶は其れ其れ其の産地から買入れなければならぬ。要するに「ギルド」の第一に出會はず問題は、他邦との

商業及び金融上の關係問題である。此の論の目的から言へば、大英國は「ギルド」組織を採用した唯一の邦だと言へる。吾人は『國際關係と貨銀制度』とを論じたときにも言つて置いた通り、獨逸や佛蘭西や米國などいふやうな國々も、吾英國の先例に倣はねばなるまい。然らざれば、此等の諸國は、使用料と利子と利益との極端なる額の爲めに身働きも出來なく成り乍ら、吾が英國と競争をしなければならぬ事と成るからである。此の利子などの負擔が此等の邦々にとり重もく感ぜられるのは、現在の物價に關してではなく、今後の生産力増加に關してである（生産力増加の結果として交換價値が殖ゑるから）。使用料、利子、及び利益が勞働中に吸収せら（現在の貨幣の交換價値は其儘とするも）るれば生産力は増加する。若し、吾人が『物質的原因の研究』に陳べし如く、現在の運轉費用を節約して、今よりも二百萬人だけ多數の者を實際の生産に従事せしめる事が出來るやうになれば、外國と交換すべき商品の分量も大に増加し、其の結果として、吾國の世界市場に於ける交換價値は無限に増加するであらう。吾人は眞面目な考を持ち、且つ好意を持てる人にして、社會主義を以て實行し得べからざる主義と爲せる人に澤山出逢つた。此等の人々は、社會主義の世の中になれば、吾人が世界の市場で優勢の位を占め得べきことを理解しないのである。國家社會主義の如きに對しては、成るほど此の反對論も有效であらう。國家社會主義は、使用料利子利益の繼續を



假定せるものであつて、國家の拂ふ代價(利付き國債證券で支拂はるゝ)は、國家の買上げた諸産業の資本價值と、増加後の賃銀高(即ち労働者に對する贈賄として賃銀を増加したもの)との加はつたものに相當する。随つて、國家社會主義になれば、現在の生産費用の外に、新に増加した賃銀額と官僚式の不經濟な管理による損失とが加はつて来る。故に、方程式を造れば、左の通りと成る。――

國家社會主義による生産額 = 原料 + 諸消費 + 使用料 + 利子 + 利配 + 諸税金 + 賃銀。

「ギルド」社會主義による生産額 = 原料 + 諸消費 + 賃銀。

國家社會主義によつて假定せらるゝ賃銀増加は、其額少なくとも一人一年十磅に達するに反し、「ギルド」社會主義の假定する報酬は、使用料利子利益が無理に強奪した金額と現在の賃銀とを合せた額に等しくするには及ばないのである。

故に、國家社會主義を採用し、生産費増加といふ重荷を脊負つて世界市場の競争に加入すれば、吾が國民の交換價值は低く、評價せらるゝに反し、「ギルド」社會主義を採用して生産費を減じ、生産額を高めて世界市場に打つて出るときは、吾が國民の交換價值は大に上がつて來のであらう。

假りに、國家社會主義になれば、一年に十磅だけ賃銀は増加し、又た外國と交換すべき商品の生産に従事する労働者が五百萬人も出來ると假定するも、國家は海外から原料又は半加工品を輸入せ

ざるを得ないであらう。斯くて一年につき五千萬磅の重荷が新たに加はることに成り、生産品は今よりも十パーセントだけ増加するわけである。之に反し「ギルド」は、大に生産額を増加する結果として、生産費も格安で済む而已ならず、使用料利子及び利益になる分だけを引かれないから、生産費は十パーセントだけ減するわけになり。随つて五十萬磅だけ生産費と、増加した生産額とを以て、世界の競争市場に臨むことが出来る。

此等の事實を心に留めて置いて、之れから「ギルド」が如何いふやうにして海外市場の買収を行ふかを一考して見よう。

今日の貨幣制度を「ギルド」の國內で始めても、個人的資本制度が外國で行はれて居る間は、吾が商品の海外にて賣らるゝものは、皆な金貨本位で評價されるに極まつて居る。この勘定は單に計算係の仕事に過ぎない。例へば若し「ギルド」を採用して、労働者一人が一日にX量の生産を爲し得たとし、外國では資本制度を採用して労働者一人が(金貨で支拂をうける)又たXを生産したとすれば、而して若しXの費用は金に換算すればYになるとすれば、吾國の労働者一人に對して付せられし金貨の上下の價格を發見することは容易である。即ち「ギルド」に只だYの價でXを賣りさへすればよい、即ちY + 10% 又は Y + 15% (場合によりては)の値段でXを賣りさへすればよい。故に若し「ギルド」



が一年に假りに七億五千萬磅の買物をして、一年に五億萬磅の賣上げをしたとすれば、全體の取引は簡単な銀行取引に成つて了ふ。然かし「ギルド」は既に英國の銀行制度を破壊して居た筈ではないか。これは如何うしたものであらう。

此の答へは簡單である。「ギルド」は自分で銀行に成らなければならぬ。而して聯合「ギルド」は自己の國立銀行と清算所とを持つて居なければならぬ。

故に、外國との取引だけに就いていへば、國立銀行は金貨本位で運轉するものであつて、必要に應じ或は特殊の「ギルド」銀行を借方とし又は貸方にして外國の債權者との債務關係一切を解決するのである。今日のところでは、黄金は大英國にとり有利の方向へ流れて居る。従つて、此の目的で金を十分に供給することも出来る。故に吾國の外國に對する債務だけについて言へば、「ギルド」は有らゆる要求を充たしてくるに都合のよい地位にあるものであつて、隨つて吾國では、原料品も食料品も供給不足を感じる氣づかひはない。

これは對外關係であるが、一たび國內關係での「ギルド」の金融事業（「ギルド」相互間の關係に於ても、又た同一「ギルド」内の會員相互間の關係に於ても）のことを考へて來ると、爰に直ちに問題が起る。果して金貨本位制及び現在の貨幣制度が、何にか適當な價值の單位と取換へる可きものか

如何うかと言ふ問題が其れである。吾人は既に貨銀を全廢した以上は、従つて又た、使用料利子及び利益の出てくる本とを破壊してしまつた上は、労働價值が金貨の價值に取て換はつたことは明白である。故に事實と眞の關係を失なつて了つた貨幣制度を、何時までも固守するのは餘計な世話である。「ギルド」の會員は今後は毎週二磅十五志七片半の働らきをするなどと言つても、それは無意味な言葉になる。其實、彼れは二十四時間、三十六時間又は四十八時間の仕事に等しい價のものを働いて取つた。而して其の價は、自分自身の「ギルド」及び他の「ギルド」から仕拂はれるものである。其の評價は時間の多少で割り出され、又は時間を基礎とした労働單位で割り出されるのである。言ふまでも無く、彼れの仕事の値段が、縫針街の婆さん（英蘭銀行）に極められるやうな事は無い。婆さんは最早や死んでしまつたのである。労働者の労働を金貨で測かる目的は、労働を種子にして生み出す配當を金貨で支拂ひたいからの事である。金といふ標準で労働を評價し、労働の所産を評價するのは、言ふまでもなく現在の銀行制度の要求する所であつて、壓制の原因である。斯くて金貨には澤山の「プレミヤム」が付き、労働には壓制的な割引が付く。然るに、黄金の特色として、それが「モノポリー」となつて労働者が厭やでも其れを買はなければならなく仕向けられる間は、人爲的に貴いものと成るのである。若し「モノポリー」（獨占）といふことが無くなれば、或は又た労働者



が之れを買はせられる事が止めば、黄金の人為的の價值も消滅する。然るに若し「ギルド」が労働の「モノポリー」をやれば、労働價値の測定の標準として黄金を認めさせられる様な壓制は止むであらう。個人的資本主義を代表する銀行は、「吾等汝の労働を買ひ、汝に其の報酬を金にて與へん」といふも、「ギルド」は「否、吾等は賃銀を得んが爲に、又た黄金を得んが爲めに労働を賣るものに非らず、吾等は汝の金を求めず、吾等は原料に對し吾等の労働を加へんと欲す、生産品は吾等自身又は吾等の「ギルド」の消費に任かす」と言ふであらう。斯くせば金時計の値段は十片ぐらゐに下がり、金指輪は三片に下がるであらう。

然かし「ギルド」社會主義の初期に於ては、何にか價值單位(精確に時間單位でなくとも)を、探かさなければならぬ。斯くて、各種の「ギルド」は、各自の職業に於ける労働を各自の評價標準にて評價する事となるであらう。例へば、技師は労働界に於ける今日の貴族としての現地位に留まつて居たいであらうし、市街掃除人は一躍して技師と同價値には成り得ないであらう。報酬(賃銀にあらず)の點に於て萬民平等の世となるまで當分の間は、各種職業に於ける各種の評價別が有つても別に不思議ではない。斯くて技師は一週間に百單位、市街掃除人は六十單位の労働をしたなどといふやうに見做される事に成る。今假りに此の労働單位を名づけて「ギルダー」としよう。——さうすると其

れが直ちに一人前の働らきの基本數となる。そこで市街掃除人は一週に六十「ギルダー」を取り、技師は百「ギルダー」、紡績工は七十五「ギルダー」、坑夫は九十「ギルダー」等となる。扱て、此の「ギルダー」を廉い金屬で表はすか、又は紙片で表はすかと言ふ事は、重要な問題ではない。何で表はさうとも、之れを持って行けば全ての「ギルド」で物に換へて呉れる。今ま其の運用の工合を一寸書いて見よう。

先きにも言つたやうに、各「ギルド」は自分で銀行をやつて居る。然かし、今日の銀行が數個の支店を有する如く、「ギルド」にも支店がある。其の支店が各「ギルド」員の備はるゝ工場の清算所となるのである。今假りに、「ジョン・スミス」といふ者があつて、其の「ギルド」の機械工業部に屬して居るとする。彼れは一週間働らいて百「ギルダー」を貰ふ權利が出来た。然るに今度「フット・ボール」の「マッチ」があるので見物に行きたいと思つて、其中五「ギルダー」だけを懐中する。更に其中から半「ギルダー」を席料に拂ひ、一匁の煙草を買つて又た半「ギルダー」を拂ひ、中食をして一「ギルダー」を拂ふ。歸途には無料の電車に乗つたが、分配「ギルド」の出張所で週刊新聞を買ふ。其れから吾が家に入る。家は自分の家のこともあり(建築「ギルド」から建てゝもらつた)、「ギルド」から借りた場合もある。細君があつて今丁度いろ／＼の買物をして歸つて來たところであつた。其のうち勘



定書が来る。彼れは之れに對し、所屬出張所振出しの小切手を書く。此の如き小切手が終に三十五「ギルダー」に達したとする。百「ギルダー」を取る彼れの事であるから、今までの費用の外に此の三十五「ギルダー」を差引き、六十「ギルダー」だけは自分名義の預金に成る。彼れは今此の六十「ギルダー」を引出さない。これは休暇が来てから引出す積りである。それに又た非常に好い「ピアノ」に目をつけて居る。斯くて毎週毎週、彼れは「ギルダー」を蓄積する。其れが彼れの名義で銀行に溜まる。斯ういふやうにして「ギルド」員の貯蓄は段々殖ゑて行く。之れを預かつて居る「ギルド」は、勿論利子などは拂はぬ。利子の制度は質銀制度と共に廢たれたからである。然かし、今日の銀行が、客の預金を借り手に差し向けると同様に「ギルド」の銀行も「ギルド」自身の改良の爲めとか、其他商賣上の取引の爲めとかには、何時でも此の「ギルダー」を運轉するのである。

斯のやうにして「ギルド」は、各自の金融上の處理をする。即ち「ギルド」は、其の會員の貯蓄を以て銀行風の事を爲し、「ギルド」清算所の手を経て他の「ギルド」に買物の代を支拂ひ、又は賣上高の代金を受取るのである。

「ギルド」の重なる事業は、會員の労働から「ギルド」の生産品にまで變つて行く本當の價值を確實に收める事である。然かし、こゝに一考すべき問題が生ずる。それは、働らく動機についての問題である。之れに關しては章を改ためて一言しよう。

### 第九章 發明家と「ギルド」

經濟的の革命を主張するものは、發明的天才の保護獎勵及び發展策を如何にするかの問題に關し反問を受ける。此の問題たるや、多くは現在の經濟社會贊成者の發する問題であつて、今日の發明家は相當に報酬も尊敬も受けて居るといふ意味合ひの問題である。處が事實は全く反對である。現在の資本制度の下にありて最も確實に壟斷を蒙つて居るものは、發明家である。一人發明家が起れば、必ず數千人は莫大なる生産力増進を遂げる、彼等は其の發明の商業的好果を壟斷せんが爲めに、或時は奸曲の手段を弄す（發明家は特に其手に乗り易しい）る事もあるが、多くは今日産業界を支配せる金融制度を運用して此の壟斷目的を達するのである。

兎に角、吾人は先づ個人々々のことを離れて、一般に發明家なるものゝ職能と其の仕事の範圍とにつき一考して見よう。

時としては絶對的に新らしい發明が産業界に起ることも有る。これは並み外づれた經驗にぶつ突かつた者のする發明であつて、或は甘まい工合に靈覺の湧いた結果たることもある。然かし大體からいふと、發明は前代の發明的及び建設的事業が生み出した賜である。其の新奇といふのは、部分



的に新奇なのであつて、絶對的に新奇なことは少ない。苟くも完全なる發明には新奇といふ特色が有るといふ位のことには過ぎない。其の實、發明とは、既知の要素と其の新應用法との結合のことである。在來實行し來つたことでも、境遇が變はれば其の應用が新たになる。故に發明は社會的所産であつて、其の才の運用に對し相當の報酬をし無くてはならぬものである。これは醫師間には認められて居る。醫師は新しい醫療法を「パテント」にしたり、又は投薬法を私にすることを命ずる權利はないとしてある。今一人の醫者があつて、新しい療法とか處置とかを發見し工夫したとすれば、彼れは「マルコニー」や「エヂスン」と同じやうに一の發明家である。然かし彼れは其の發見の要點を悉く發表せねばならぬ。「マルコニー」の如きは之に反し新しい利權を獲得することが許るされてある。何故醫師の方ばかりを斯うしてあるかといふに、其の理由は明白である。第一、醫師は利益事業でない。醫師は議會の條令の上でも紳士となつて居る。故に醫師は眞理の闡明が第一であつて、私利は第二である。彼れは前代に「ラスキン」のいつた原則に従ふものである。即ち、醫師は自からの危険を冒しても先づ其の患者を救ひ、其の割に少ない報酬を受ける。「ラスキン」は商人にも自ら顧みて恥ぢ、此の原理を承認するやうにさせたいと試みたが、「マンチエスター」主義の商人は彼れの手に負へなかつた。第二に、醫師が自己の天職を果たすには、隔意なく相互の經驗を打明

けなければならぬ。醫師の「ギルド」の比較的大きな利害の中に、個人の小利害は姿を没して居る。醫師會の幹部は此の點を高潮する。其の結果として、醫師の廣告の如きも非議せられ、廣告は醫師の名譽毀損(インフエマス)として罰せられる。醫師の知識は醫師會から得られたものである。故に自から獲得した特殊の學智は又た之れに返さなければならぬ。加之、別に理由がある。經驗は公衆を犠牲として得られたものである。公衆は醫學研究者の經驗の爲めに病院を經營する費用を負擔する而已ならず、青二才の醫者に肉も骨も任かせて了ふ。これあるによりて、醫者は自己の修めた智識や發見を獨占するの權利がないといふ傳説を生じたのである。醫師の獨占し得るものは自己の技倆のみである。丁度「ギルド」の獨占は勞働力の絶對統制に限れる如くである。醫師社會全體の上から見れば、個人々々に其の發明發見上の利權を法律上で與へる事を拒絶したのが、其の損失とならず反つて大に利益となつて居る。

此の點につき醫術業上に設けてある規則の理由は、移して以て技師社會にも當てはめる事が出来る。化學者も製造者も亦た同様である。然かし乍ら、彼等の法律上の身分は紳士でない。彼等は多數の私利追求者の階級に屬して居る。従つて學職者に課せられし如き義務は負つて居ない。之れ現代の資本主義が自己を私利的とし非紳士的と自稱して憚らざる所以である。然かし此の『どうせ私共



は商賣人ですから」といふ棄て臺詞の最もこわいのは、資本主義者が革命主義者に喰つてかゝつて、發明家への報酬は如何うしてくれると尻をまげるときである。

今日は如何なる發明家も、勞働者に負ふ所が多く、又た前人の多數が行つた研究や發明に負ふところが少なくない。之れは三才の童子も知る所の事實である。無論發明家も公平に待遇してやらなければならぬ。然かし發明家は獨占を許るべき権利はない。假令へ絶對的に天下一品なる如き發明をし、何れの點から見ても斬新な發明をしても、其れを獨占すべき謂はれは少しもない。何となれば彼れを育だて又た教育したのは社會である。社會なくば其の發明品に對し十分の需要も起らないであらう。

故に、發明家の要求は相當のところにとどめしめ、其の社會的價值以上には出でしめない様にする必要がある。何となれば發明といへば何でも過分の報酬を取つてよいものゝやうに思ふ商利的觀念が世に流行して居るからである。其のくせ此の報酬は皆んな資本家の懐に這入つて了ふ。資本家は發明家を食ひ物にするからである。實際上、發明家の地位は、漸次規則で規定される傾向がある。例へば鐵道會社や大規模の造船所は、其の傭へる技師の發明した改良は皆んな會社のものとするの權利を保留して居る。甚しきに至つては何等の代償をも拂はない場合も少なくない。大規模の商賣で

は、大抵發明の才ある被傭者を獎勵し報酬するの規定を設けて居る。加奈太に於ける一大農業機械製造工場に於ては、此の獎勵法が大に發達し、數年來發明部を設けて居る。同工場内で發明の才があつて發達の見込ある頭腦を持つた者は皆んな此の發明部に集めてある。而して現在の農具の種類を改良し、又は現在のものに代はるべきものを工夫することを任務として居る。かくて同工場は、一見化學實驗場の觀がある。特に其處に従事せる人間の「タイプ」を見ると此感を深うするものが有る。同會社に傭はるゝ才能ある青年は、此の發明部に入るのを目的として居る。其の結果として、同工場に發明的精神が漲り、隨つて此の會社の製品は、全世界に有名である。扱て此の興味ある工場に入れば、人は數年間實驗をして後始めて完全に商賣になるやうな品を作り出すことが出来る。其の數年間の生活は會社から保證してくれる、斯くの如き事の結果として、非常に機械が改良され、又は新しい機械が出来るやうに成る。若し此の會社に傭はれし發明家が普通の報酬のみを貰ふ(事實は發明品に對し割前を貰つて居るが)ことと成つても、別に不平は無い筈である。傭はれて居る間の報酬は既に拂つてあるのみならず、個人としては到底買ふことも出来ないやうな高價な機械や複雑な機械を使用することを許るされてある。且つ彼れは自分と同じく此の發明部に傭はれ、自分と共に之れを經營して居る二三十人の同僚から助力をうける事も出来る。然かし斯かる施設が如何



に甘まく行つて居ても、先人の事業成績等に鼓舞されなければ、此處に備はれた者の成績はあがらぬであらう。其の鼓舞をうけるのは、年長の技師より受ける事もあるが、農夫の甘まい事をやつて居るのや、下手な事を行つて居るのを見て、突然天來の妙想が浮ぶことも有る。發明は、人の内面的意識から起るものでなく、一種の社會的所産である。

以上の如き場合に於て、發明家は皆の人から尊敬されるのみならず、其の奨励後援をうける。随つて、發明家は自分の仕事に十分満足が有る筈である。然るに、以上の如き待遇は世間一般の發明家に對しては與へられない。此の工場の待遇法を見て、世間一般を推すわけには行かぬ、抑も發明の才は普遍的である。如何なる職業の男女も、絶えず何にか新しい事を工夫して居らぬものは無い。其の新工夫の中の大多數は商賣にならぬものであらうが、利用次第では又た大いに有利なものも有らう。故に若し發明家が相當の信用ある製造事業に少しも關係をして居らぬならば、發明家の得るところも無くなるであらう。此の場合彼れは殆んど必ず金融界のベテン師に引つかゝるであらう。ベテン師は、發明家などを一文なしにするのを目的とする輩だからである。彼等は發明家の利益には少しも顧慮することなく、又た發明品を有効に利用する事もない。今ま假りに例を引いて發明の初めから生ひ立ちまでを調らべて見よう。此所に「エービー」といふ人があつて、初めに思ひつ

きが頭に浮かんだ、それから獨りで種々の想像をする。そして其れを造つて見る。終に之れを完成する。彼れは「モデル」を造つたり、實驗をしたり、或は適當の工業雜誌に發表したりするのに自分の財産を使つてしまふ。それから之れを市場に賣り出す順序に成るのだが、此の男は相當の工場を有する會社に關係して居ないから、先づ「パテント」代理業者のところに行く。代理業者は早く「パテント」を取つて置くのが安全だと教へてくれる。さうするには四百磅ばかりも金が入る。「エービー」は失望落膽する。「私には金の持ち合はせがない。私は發明をするのに全ての財産を消費してつた」と彼れが言へば、代理業者は自分の會では、發明品の「パテント」を取る爲めの代理の業務はするが、金融上に携はることは會則で禁じてゐるといふ。「それでは甚麼うしたらばよからう」と「エービー」が聞く、「それではシージーさんに頼んで見ては如何です」と代理業者がいふ。「エービー」は「シーデー」を尋ねる。「シーデー」は「パテント」を調らべて「これは面白さうな物ですが、あまり金を出すわけに行きませぬ。然かし委任状を下だされば、私の知つて居る金融業者のところを紹介してあげませう」と云ふ。それから二人は此の委任状の書き方について相談をする。「シージー」は「ネカシ物」(ドラッグ)ですから、儲かつたらウンと割り前を戴かなくてはなりませんと言ふ。二人は其れを一割のことと決める。そこで「エービー」と「シーデー」とは連れ立つて「イーエフ」といふ金



融業者の許へ行く。「イーエフ」は同情は致しますが、十分保證のついた發明でなくては金を貸すわけに行きませぬ。若し「エービー」さんが發明を保證して下さいれば相談にも乗りませうと云ふ。そこで「エービー」は再び落膽する。「シーデー」は此の時助け舟になつてくれる。只今の御話で見ると「イーエフ」さんは此の發明に力を貸してもよいと言ふ御話であつたから、折角のこと、一つ「ディーエチ」さんに「バテント」の権利をとる手数料を立替へて貰つてはどうですと云ふ。そこで「ディーエチ」の許へ行く。「ディーエフ」も同情して「イーエフ」さんが相談に乗らうと云ふなら、先づ五百磅ぐらの融通は致しませうといふ。「エービー」は地獄に佛の氣持ちになる。相手は保養の爲めに金融業をして居るのでもないから、發明の儲けの半分は貰へませうと言ふ。斯ういはれると、「エービー」の方でも退つ引きならなく成る。そこで「ディーエチ」には利益の半分をやる事に決める。それから長くかゝつて漸つと「バテント」が下りる。「エービー」は「シーデー」と「ディーエチ」とに連れ立つて「イーエフ」の許へ行く。金融業「イーエフ」は『それは御芽出たい、こゝで一つ三萬磅の會社を起しませう。一萬は「エービー」さん及び御關係の方々へ上げ、一萬は私の會社創立の勞に對する報酬として私が戴き、餘の一萬は融通資金にいたしませう』といふ。斯くて「エービー」は一萬磅を受取る。然かし此中から「ディーエチ」に五十磅、「シーデー」に五百磅を拂はねばならぬ。そこで今は三萬磅のうち

四千五百磅だけしか自分のものではない。然かし一二週間後は「イーエフ」は『生憎一萬五千磅しか調達が出来なかつたから、現金の代はりに株券で取つて下さい』といふ。「エービー」は今は發明で得意に成つて居る時だから其の言葉を信用して二つ返事で承諾する。

其のうち會社が出来る。然かし「イーエフ」は生き馬の目を抜く都のものだけに、今度の「バテント」の値打も知つて居る。彼れは取締役を自分で任命し、之れに會社を經營させる。融通資本は忽ちの間に消えて了ふ。會社は清算をしなくてはならなく成る。「イーエフ」は財産(「バテント」)權が其の主なもの、を只のやうに安く買ふ。そして「エービー」は勞働の所産を騙取されて了ふ。

斯の如くして「バテント」を市場に出すことは倫敦でも「グラスゴウ」でも「マンチエスター」でも何處でも、毎日のやうに行はれて居る、それに拘はらず、發明家は現在の産業制度の下で十分報酬を受けて居るといふ信念が一般に行はれて居る。大英國の發明も「バテント」も、皆な發明者の不遇と失望との歴史を語るものである。

今ま「ギルド」制度の下では、如何うであるかを想像して見よう。「ギルド」制度は賃銀制度を全廢したから、使用料利子及び利益を發明品から生み出さうとするやうな事は全く止み、兀鷹及び「ハービー」(爲身女面の怪物にし)等が、發明者の生き血を吸つて生活するやうなことも止んで了ふ。然か



し労働の節約といふことは「ギルド」の生命であるから、「ギルド」は之れに満足せず、進んで發明者の獎勵を爲し、極度に發明を發達させる事を勉めるであらう。

是に於てか、發明者の心理を一考する必要がある。發明者にとつては、其の發明品（これ元社會的所産ではあるが）は猶ほ母の新生兒に對する如き愛着を起すものである。彼れは之れを生み出す爲めに時間をかけ、之れを保護し、之れより生ずる種々の發達を計畫する爲めにも随分時間をかけねばならぬ。發明者は事實上創作的の藝術家である。彼れの創作の本能は畫家（これも一種の發明家）や又は著述家（これも發明家）又は音楽家（これも發明家である）に於けると同じく大切なものである。故に「ギルド」は發明家の活動に都合のよいやうに境遇や空気を造りかへなければならぬ。發明家は自己の腕なみを證明した上は、「ギルド」から補助と保護と物質的助力とを仰がなくてはならぬ。彼れは「ギルト」の日常事務を免ぜられ、臭氣のない實驗室に置かれ、必要な場合には、知見を博ろめ經驗を増さんが爲に旅行もさせて貰ふやうにし、愉快な位地及び人に尊まるゝ位地を與へてもらはなければならぬ。

大英國民の發明の才は如何う見ても偉らしいものである。大英國民は數代の間實地に機械を操縦することゝ馴れて居る。大英國の工場には、工場の要する如きものは何でも之れを發明し且つ建造する人が澤山に居る。然るに今日は其の折角の發明の才も、制度の惡るい爲めに阻害されて居る。「ギルド」制度が甘まく完成すれば、發明家は勝利を占め、労働者に代はる機械が出来て労働者の品等は上がり、労働者は精神上にも物質上にも都合がよくなり、而かも今日の如く労働者の風紀が亂だれたり、又は失業者の起る心配は起らぬであらう。

### 第十章 頭腦と「ギルド」

社會的又は經濟的の變動に際しては、社會にある諸要素のうち比較的貴いものは如何いふ事になるだらうかと心配し、いろ／＼な疑ひや質問を發するのが人情である。就中前章に説いた發明問題の如きは、特に重要な問題として考へられる。何となれば、人は意識的か半意識的かに、科學と其の婢僕たる機械との力で天然を征服するのが吾人今日の文明だと言ふことをよく知つて居るからである。泰西諸國に於ては、既に奴隸的労働に代ふるに機械を以てした。機械が奴隸制度を破壊したやうに、今よりも進歩した機械は賃銀制度を破壊するに極つて居る。故に、社會の改造は、富の生産を促進こそ遅くらすことはないと言ふ保證をして貰いたいと思ふのが人の人情である。之れを發明家について見るに、前にもいふ如く（a）發明家の勞力の所産は殆んど一般的に社會的所産であつて、既往の諸發見諸發明から必然的に發達して來るべきものである。（b）現制度の下とに



ては、發明家は全體に於て虐待せられ、往々にして其の利得をも奪はるゝ事がある。(c) 社會的意識、及び、人間の安全希求の本能は、社會を「ギルド」化する事により、今よりも有力に刺戟され、國民の發明的天才を促進するの作用を營むであらう。

是に於て左の問題がある。——産業を「ギルド」で統制するとき、人の頭腦の働らきを養成し又は之れに對し報酬することは、如何なる方法で行はるゝやうに成るか。

本章に於ては、世間一般に實際家又は成功家に特有の頭腦として認めらるゝものに就き研究して見たい。廣く一般に文化の發達に關する深遠なる諸問題については、教育のことを論ずる章に至つて論述するつもりである。——即ち、精神的及び知力的の啓發を爲すに適する環境の論は、之れを教育の章で論ずる考である。個人的資本主義の下とて教育をやると言ふことは、一のほんち畫である。一の「グロテスク」(奇怪事)である。そんなものに依つて人間の魂は能力を發揮するものでない。然るに、普通一般の人が「ギルド」は人間の頭腦を如何に取扱ふかと問ふときには、文化は「ギルド」制度では如何うなるかと問ふのでなく、寧ろ所調實際界の「頭腦ある人物」は各その特殊の能力を如何にして十分に發揮する事が出来るやうに成るかといふことを問ふのである。

故に、先づ此の「頭腦ある」人物が今日如何に待遇せらるゝかの問題を研究するのが大切である。

發明家は個人的資本制度の下で榮えろといふ太早計の議論が世間にあるやうに、今日「頭腦」ある人は必ず成功するといふ淺薄な意見が世間にはある。然るに之れは事實であるか。故「エドワード・サッストーン」卿が、弱冠の吾が兒に全部吾が事業の經營を一任すべしとの遺言を爲し、今まで祖先傳來の會社の事業を聰明に經營して居た忠實な番頭どもを排斥するやうな取りかへしの附かぬ事をしたといふ話しは、前にも述べて置いた。然るに、斯く忠良の家來を遇するの途を誤まるといふ事は、個人主義的な資本制度の世の中にはザラに有る話である。さればにや「サッストーン」卿の遺言を見ても世間では却つて當り前だといはぬ計かりに、別に兎角の批評をするものすら無かつた。斯かる珍らしい事件を珍らしいと世間で感ずるやうに成るのは、世の成功者が自分の傭人に其の事業の利益を均霑せんことを遺言するやうな世の中に成つてからの事である。斯かる世に於てのみ、物故した人は珍らしい寛大な人だと世人一般が褒めるやうに成るであらう。今日では斯んな均霑主義をとることが本來正當なことだといふ理窟を、誰れも思ひつかないのである。こんな譯けだから、輿論も「頭腦」は遺傳であるから、無經驗の青年もなほ父祖の富を繼承するのみならず、其の事業に對する適能を繼承するものであると考へて居るらしい。今日の産業的商業的機關が如何に運轉せられて居るかの内情に明かるい人は、斯んな不道理を聞いて一笑に附するであらう。金持ちの息子が



「ラグビー」や牛津に學び、「ゴルフ」や競馬に夢中になるのが、何にも其人の適當な商業的訓練には成らぬ。大きな身體を築き上げることは、家を興こすの第一歩に過ぎない。此の點に於て基督教及び猶太教の倫理は、資本主義的野心と同列一體のものである。説教者も壟斷階級も聲を揃へて、「家族は國家の本なり。故に父祖の蓄積したもの及び此の蓄積の行はれた本となつた各手段は、宜しく其の子孫に繼承せねばならぬ」といふ。此の考が本になつて、長子相続權に關する法律も習慣も生じたものである。此の考が英國の中流階級の氣分に投じてからと言ふものは、今日のやうに社會一般の風習となつて了つた。然かし之れが「頭腦ある者」に其の相當の報酬をやうに成るとは言へぬ。數ヶ月前に、或る人が數百萬磅を遺して死んだ。彼れの財産の一部分は其の秘書役の御蔭で儲かつたものである。此の秘書役は非凡の才子で而かも忠實な男であつた。其の俸給は一年一千磅であつた。儲主が死んでから此男は職を失なつて、今なほ口探がしをして居る。此外にも斯ういふ例は幾らもある。頭腦の人また人格の人で、他人の爲めに大きな身代を盛りあけてやつたに拘はらず、自分は何の利益も得なかつた如き例は、有名な財産家について調らべると直ぐ分かる。現在の米國の鋼鐵「トラスト」は「キャブテン・ジョーンズ」といふ「ピッツバーグ」の無名の士に負ふところ莫大なものがある。彼れは當時の人の未だ知らない改良法を熔鑛爐に施したが、後ち爆破の爲めに

一命を落とした。そして其の事業の恩恵は「カーネギー」が拾つた。「頭腦」の人は労働者以上に資本の後援を要求する権利があるといふのは眞理である。

この様な事實が——同様の例は幾千となくある——あるに拘はらず、現在の法典によりては、頭腦ある者は十分又は適當に報酬を受けて居るなど、議論をするのは、徒勞 (Hog a dead horse) である。今日、私利を營むといふ事は、社會的諸計畫の上にも、家を興し父祖を顯はす事業の上にも、堂々と表はれて居るものであるが、これぞ即ち「頭腦ある」人間をして自から富の生産に手傳ひをし乍ら、之れから公平な分け前を得る能はざらしめるものであつて、即ち「頭腦の人」を有効に除外し、用意周到に其の利權を剝奪する所以の道である。斯くて彼れの嗣承産は壟斷者の所謂「家」とか言ふもの手に落ちる。個人的資本主義は、頭腦ある個人に報酬すること、手の労働者に對するよりも厚い。然し乍ら、頭腦ある者の相當の要求を充たしてやることをしない而已ならず、資本家は場合相當に公平な處置をする事を怠たり、自己の壟斷を専らにするのである。

吾人は「現在法規に照らして」も、頭腦の人の報酬はまだ不相當であると論じた。然るに、若し此の法規が一變すれば如何であらうか。普通一般の人は「商賣の頭がなくては今日の産業はやれるものでない」といふ。それがやれると言ふ證明になるやうな例があるだらうか。吾人は其の確かな例



が有るといつて詳しく之れを説明して見ようと思ふ。若し今日の法規を其の口調の上にも實質の上にも一變して「ギルド」思想と一致したものにする時は、今日の競争制度の世の中に於ても、實用的頭腦の一層よい「タイプ」が生じ、又た實際の事業も爲めに一層完全に行はれるやうに成るであらうといふ事を、吾人は庇理窟で動かぬ實證でもつて證明して見ようと思ふ。

「コロシ」から巴奈馬まで、若くは今少こし北の「グレータウン」(コスタ・リカにある)から「ニカラガ」湖を過ぎて太平洋に通ずるやうにし、米國の地頭を切斷しようといふのは、二世代の昔から土木工學者の大望であつた。一八八一年佛國の某會社が「コロシ」から巴奈馬まで五十哩の間を運河にしようとの計畫を立てた。此の會社は蘇士運河を切り開いた老練の工學者「ドウ・レセツプ」(De Lesseps)の主宰するところであつた。そこで初めは甘まく後援者が付き、金融も相當に行つた。佛國始め佛國投資者は之れが甘く行かねば自分等の名譽に關すると考へて居たから、金は吝しみなく注ぎ込んだ。一八八一年から一八八九年に至る間に、既に五千萬磅以上を費つた。頭腦ある人間が必要なのは斯ういふ時である。労働者の大軍は「コロシ」から内地に深く分け入り、熱帯の沼地を通過せんとするに、蚊軍の襲來をうけた。それが爲に黄熱に罹り又は馬棘利亞に罹つたものがある。彼等は「チエーグレス」河の本當の河床と、「ガタン」湖の中間境界とを探り當てようと思つた。

段々巴奈馬の方に進んで行くうち、一群の山系に達した。之れ有名なる「アンデス」山脈の始まるどころである。彼等は「キユレブラ」谿谷を通ほして深い運河を堀る事に成つて居た。此の間が九哩の長さに亘たり中々の仕事であるのみならず其間に三つの大きな岩石がある。それを切り抜かねば巴奈馬と太平洋には達し得られないのであつた。

この會社の御かけで佛國の大臣は一人々々相ついで犠牲にされ(その實佛國共和國それ自體が危うく成りかけて來た)たので、終に會社も悲劇的な最後を遂げ、こゝに物の哀れを留めた。これも畢竟『商賣』の頭の人には持てあますやうな大計畫を引うけたからであつた。當時は毎日のやうに商賣の頭では迎ても間に合はぬ色々な問題が起つて來た——第一は社會政策問題である。蓋し運河開鑿の爲めに一大軍の労働者の集まつた爲めに、未開の地に新しい社會が起つたわけに成り、自然に公衆衛生問題やら保健問題やら、警察、住宅、水道、瓦斯電燈、食料運輸等の問題が起つたからである。第二には政府の問題及び南米共和國政府との關係問題が起つた。第三には國際間の金融及び利權問題が起つた。之を要するに、此の仕事は餘まり荷が勝ち過ぎて居た。これは「ドウ・レセツプ」のやうな人が五十人かゝつても及びもつかぬ大仕事である。勿論失策も經營下手もあつたらうが、「ドウ・レセツプ」の重荷の苦しいのに同情し、親切に此の老人のことを考へてやる人間の居なかつたの



は遺憾である。

兎に角これは失敗であつた——社會は己れの妙策を借らざれば大事を成す能はずと自負して居る實際家の失敗であつた。

五千萬磅も使つて「ドウ・レセツプ」は何んな仕事をしたと言ふのであらう。彼れは二千四百磅を使つて八千萬立方碼を掘つた。三千六百萬磅を出して巴奈馬鐵道を買収した。(これは倍に高くなつたのである)、其餘の殘金は機關車とか浚渫器とか言ふやうな機械を買ふのに使つて了つた。然かし彼れは全くの失敗をして了つた。其の仕事の四分の一も成就したものは無かつた。實際家の頭腦は失敗であつた。

それから如何うなつたか。

一八八九年には大破産スマッシュが起つた。一八九四年には新たに佛國の會社が出来た。此の會社は時々思ひ出したやうに仕事を續けて居たが、一九〇四年になつて一切の事業を米國政府に譲り渡した。初めから費つた金高は五千萬磅であつた。それを米國政府は八百萬磅で買上げた、今日の資本主義といふものは斯んなものである。頭のよい者の必要なことは明白ではないか。

今若し英國か米國かの會社が、此の運河を造る請負をしたとせよ。中々五百萬磅以下の利益では之れを引受けない。會社では之れだけの利益を取締役と株主とで分けようと言ふのである。然るに前に言つたやうに、巴奈馬の複雑な問題は、私利追求事業では解決の力がない。そこで無論これは政府事業と成つた。かくて一切利益を(少なくとも實際の工事關係に於ては)抜きとなつた。人の愛する私利追求の主義を棄て、之れに代ふるに「ギルド」組織の根本原理たる『無利益』主義を以つてしたのである。之れ驚くべきではないか。

話が岐論に互つてはならぬ。吾人は本章に於ては頭腦のことを論じて居るものである。扱て若し利益を排斥して了へば、此の古今未曾有の大工業に天下の『頭腦ある者』を招致することが如何して出来たであらうか。此の點に於て吾人は世界の奇談を目撃した感がある。米國陸軍工兵隊に屬する無名の一大佐を引張つて來て此の廣汎にして複雑なる工事全體を統轄させた。名義上からいへば、彼れは地頸運河委員の議長に任せられたに過ぎなかつたが、實際は總指揮官であつた。時としては虚名無爲の政治家が大佐の上に据ゑられた事もあつたが、恰かも「コロツサス」(アポロ神の巨像)の鼻の上に蠅が一匹とまつたやうなものであつた。慇懃な挨拶をして、宴會を開いて、工場をひと廻りはり廻はらせて、それで大底どの政治家も御辭儀一つで追つ拂つて了ふ。そんな無用の上官に煩はされない時は、大佐は常に工事監督所に陣どつて居る。偉らい人だが名前はまだ漸つと歐洲に聞こ



えた位である。何んな難問題でも、何んな個人間の反目でも此人に持ち出されぬものはない。此の米國陸軍工兵隊の無名の士官のところには、何か急な悲しみや不幸に逢つたものは、必らず父親の如く頼よつてくる。こんな話を見ると、何故早く要點を言はぬかと諸君は問はるゝであらうが、如何うして此の不思議を浮か／＼看過することが出来やうぞ。それでは一體米國政府は此の男に幾ら拂つて此の貴重な仕事をさせて居るのであらう。一年に一萬磅か。馬鹿なこと。それでは五萬が、まだ々々、苟くも土木技師として名の知れた英國の技師ならば、其んな端た金は見向きもしない。それでは二萬か。さうだ、その位なら相當である。然かし實際の収入は何の位であるか——此の四百四十八平方哩の廣大な土地の絶對王は？。彼や一年三千磅の俸給に過ぎない。而かも其中から陸軍の俸給は差引かれるのである。それでも彼れは別に不平もない。仕事を粗末にしてのける様な事もない。反對に彼れは其の地位に満足して居る、陸軍の俸給だけでやれと言はれても喜んでやつたらう。陸軍給は一年六百磅に過ぎない。そこで諸君は宜しく賃銀と報酬との別を見分けなくてはならぬ。彼れの行爲は賃銀で支配されない。但だ團體精神(*esprit de corps*)で支配されて居るのみである。——この精神こそ「ギルド」の精神である。これは後とで詳しく述べる。さあ斯うなれば、話は段々報酬問題と義務忠勤問題に觸れてくる。然かし今ま一と言、この大佐の話をした。工事竣

成の際は、澤山な御禮が来るのであらうか。「ロバーツ」卿が軍をやめて歸つたときには、國民は感謝して十萬磅を呈した。「キチナー」卿の戻つたときには五萬磅を呈した。「ガーターズ」(*Cochran*)大佐は更に大なる勳功をあけて、これは又た六階級を一と飛びに昇進し且つ相當の賜暇を貰へることと豫期して居る。資本主義の天下には、武士道の時代は來ない。「ギルド」精神あつて始めて武士道は復活する。

吾人は巴奈馬の北方一帯を絶對的に占有せんとする米國政府の計策につき是非の議論を立てる者ではない。「ウイクトリヤ」時代のの中ごろの見解から行けば、こんな事は無論不道德で許るす可らざる事柄である。然かし仕事は今殆ど完成して了つた。今となつては「コロムビヤ」共和國の悲みに對し、吾人の無關心なることを告白するのも差支はあるまい、兎に角、吾人の感服することは、此の仕事が人力の結合によりて成就されたことである。人の結合は「ギルド」組織の第一歩である。

十分に此話の大切なところを理會せんとせば、此の大工事の大仕掛けで且つ複雑なりしことを理會しなければならぬ。前にも言つたやうに、此の仕事は現代の資本制度に取つては大きすぎた仕事である。こんな仕事は、幾つもの「ギルド」に有効に分かたれし社會にとりては何んでもなく完成せらるゝ仕事であるが、然らざる社會にとりては難事である。其の後の出來事に徴して考ふるに、利



益をとつて運河を開鑿するといふやうな事は奇怪千萬な話である。現代の資本主義は利益のないところには存立し得ないものである。巴奈馬運河は利益を顧みずして設けられつゝある運河であつて、其れによつて増進せらるゝ經濟的利益は、金儲け以外は眼中に措かぬ商業的利益よりも大きい。故に此の工事に於ては「ギルド」の主義が一つ丈け行はれて居る。それは即ち一切利益抜きといふ事である。更に驚ろくべきは、使用料や利子までも排斥された事である。毎週拂はるゝ金は他から借りた金ではない。皆な合衆國の歳入から生み出したものである。少なくとも其れ丈けの點は國家社會主義の臭味を脱して居る。然るに今日現に幾十萬の愚者が——社會主義者其他の——居て、七千五百萬磅の大工事を起すには外債を募らなければならぬ、而して資本主義に倣つて一定の利子を拂はなければならぬと言ふやうな間違つた考を懷いて居る。然るに巴奈馬運河の工事は何等の起債をも行はず、公債所持者に利子を拂ふこともなければ、合衆國政府は通過税をかける必要もない。運河を通るのに税をかけ無いのは、道徳上からいつても財政上から言つても自由を保證したものである。此の自由主義の取りめは、大英國と獨逸との外交的反對を受けたが、若し之れを米國の「ギルド」組織でやつたならば何んでもなく行はれ得たことであらう。例へば此所に運輸「ギルド」(その船舶部)があれば、工業「ギルド」と取りめをして、其の船の運河通過を許可する事にするであらう。其れに

は條件がつく。即ち許可の理由が全ての米國の「ギルド」の相當と認めしものでなくてはならぬといふ條件である。各「ギルド」は是より先き全權委員を派遣し、總會を開いて政府よりの代表者も加へ、此所にて右の條件が決議されるのである。故に「ギルド」は想像の所産ではない、大規模の産業の必然的發達結果である。現代の資本主義が七を投げるところを此の組織では易す々と引き受けるのである。

然かし此の議論を更らに進めて行く前に、此の「ギルド」の胚胎とも見るべき工事が如何に進捗せしかを一考しよう。

先きに述べし如く、佛國の資本主義は蚊軍に襲はれた。其の賃銀奴隷は黃熱と馬棘利亞との爲めに残り少なに打なされた。資本主義にとりては斯んな事は何でも無い。商品としての勞働が品切れとなりさへし無ければ、別に痛痒は感じない。然るに米國が手を出し始めてからは、無意識的に「ギルド」的精神が働らいた。その爲めに團體的感謝が生じて、勞働者の病死を以て社會の損失と考へるやうに成つた。依つて工學的作業の始まらぬうちから、『衛生隊』なるものが出來て、軍醫隊の無名の大佐が之れを指導した。斯くて蚊軍退治の戦争は着々進捗した。黃熱を發生する蚊の種類と發生地點とは分明となり、馬棘利亞の方も亦た分かつた。前者は流し元との塵芥から生じ、後者は運



河を造らうとする沼地に発生した事が分かった。そこで停滞した水には石油を流がして蚊を殺ろし、塵芥は取除けて、黄熱傳播の媒介たる蚊が卵を産みつける事の出来ないやうにした。斯う一口にいへば簡單であるが、當時軍醫隊はこれ丈けの事をやるのに、五十哩の沼池を跋涉し四萬の被備者と其の妻子との住む各家庭を一々歴訪せねばならなかつた。抑も英國佛國獨逸又は米國請負工事は世界到る處に見うけられる。「アンデス」より「コーカサス」まで、「ロッキー」より喜馬拉耶まで、賃銀労働者の大軍は資本主義に願使せられて、或は鐵道を敷設し或は港灣を修築し、或は公館を建て、或は堅坑を掘つて居る。此等の労働者が地球の顔にむごたらしい傷を造つたのを見て、戦慄せざる旅人があらうか。然るに、白人だけについて言へば「アンコン」「キユレブラ」及び「ガタン」(巴奈馬地方の)に設けられた假營所は、此種のものゝ模範であつて、英米の工業都市にも珍らしい美事な設備である。若し利益といふ考が此の工事に入つて居れば、巴奈馬は恐るべき醜狀を地表に残されたであらう。然るに利益の考が工事の中になかつた爲めに、此の一年七〇乃至二二五「インチ」の降雨量を存する熱帶地にある巴奈馬が、僅かに千人當り七人七二の病死者を生ずるに過ぎなかつた、本書執筆の當時までの報告によれば、米國が此の衛生費用として支出した金額は、約三百萬磅に達したといふ事である。

此の一時菌の如く發生せし新社會は、斯の如く流行病熱病及び醉<sup>イモテツクチシス</sup>性病に對し有效なる保護を受け、衛生上の問題は既に解決されたから、次に起るは健康と營養とに適する食料品の供給問題であつた。之れを解決する上には、是非とも『給養隊』<sup>サブシスタンス</sup>の助けを必要とした。是に於て又無名の大佐が其の部長の任に當つた。此の仕事は仕出屋<sup>ケイター</sup>(Caterer)又は料理店主人<sup>レストローラール</sup>(Restaurateur)などに一任しては置けなかつたからである。此の大佐は果して食物の供給を儲けの種子にしたであらうか。そんな事はない。彼れは軍人であるだけに、日糧<sup>レーション</sup>(レーション・即ち一日分の食糧)とか報酬とかに就いては多少知つて居ても、賃銀制度を基礎とした産業制度とか賃銀とか言ふものは、得て忘れがちであつた。彼れの任務は自己の危険を冒して此の産業軍の食物供給を絶たないやうにする事であつた。利益を計かるなどは以ての外である。彼れは日々五萬五千人以上に食物のみならず衣服其他の生活必需品を供給せねばならなかつた。而して彼れは一文の利益も貰はずに此の仕事をした。商業界の王侯にもあらざる此の無名の大佐は、労働者が實費で糧食を要求することを明瞭に知覺して居た。彼れは年末には自分が其の仕事から一大利益を得たことを報告せず——そんな事をしやうものなら直ぐ免職に極まつて居る——、反つて純良な性質の食糧を買つて之れを有効に分配し、巴奈馬の労働者の要求に間に合ふやうに時間を違へず迅速に之を配達した事を報告するのを自己の任



務として居た。これ明らかに「ギルド」的精神に段々近づいて来たわけではあるまいか。

給養隊は毎年百二十萬磅を食品に使用して居る、此の隊では、二十二の總販賣店と十八の「ホテル」とを經營して居る。此等の「ホテル」は一食十五片で毎月二十萬の食事を供給し、加ふるに十六の歐洲風の料理があつて、歐洲の勞働者(主として西班牙及び伊太利人)に二十片で一日三度の食事を供給して居る。此外に十四の西印度料理があつて三十片で一日分の食を供給する。毎朝四時には巴奈馬の方面にある「クリストバル」といふ地頭中の一地方から二十一車を連結せる供給列車が出て新らしい食料品を供給する。以上の事はすべて監理部クオター・マス・マシス・ディ・シジョンの手を経て行はるゝものである。而して監理部長と副部長とは、共に又た無名の軍人である。其の頭腦は少しも壟斷的精神によりて無効となつては居ない。此等の人々は團體的精神をよく理解し、「ギルド」的精神を呑み込んで居る。彼等は軍人として立つ人間であるから、紳士的にしなくてはならぬと云ふことが、彼等に強制される。壟斷私利は恰かも海賊の所行の如きもので、紳士的ではないと言ふことを、彼等は本能的に心得て居る。彼等は此等の責任ある仕事を『儲かる』やうにする丈の『頭腦』は持たぬが、所謂『頭腦』ある資本主義者の全然やり得なかつた仕事を完成したのであつた。

將來の『ギルド』には貫徹するだらうと思はれるやうな一種の精神氣魄を以て、此の巴奈馬運河の工事は實行せられ着々と勝利ある結論に近づきつゝある。今や其の開鑿した分量は一億八千萬碼に達し。其の工事の材料を運搬する列車は、之を一行につなげば地球を四周して、而かも其の一立方碼は一噸半の重さを載せて居る勘定に當る。「コンクリート」だけでも五百萬噸は水門と栓道と運河とに使用されて了つた。太平洋から大西洋までの間に、一千呎の長さある「オリムピック」型の船よりも更に大きな船を通過せしめる丈の設備が出来た。此等の船は「ミラフロアース」か又は「ガタン」から海拔八十五呎の高さに引き上げられ、又た此兩地のうち何づれかにて海面の高さに下ろされるのである。其の太平洋から大西洋に出る間は十時間しか掛からぬ。確かに東より西へ出るのに三週乃至六週を節約し得たわけに當たる。

吾人は巴奈馬の工事組織と「ギルド」組織との類似をあまり極端に考へるやうな愚はしないが、然かし「ギルド」の本質と構造とは、資本主義の失敗するに極まつて居る場合に反つて成功するものなることを吾人は證明したのである。又た吾人は「ギルド」的精神を加味するときは、同じ報酬主義で行くにしても、壟斷的精神で養はれ又た訓練された才能や『頭腦』よりも遙かに優ぐれた才能と頭腦を養生せしむるものなることを證明したのである。

「ギルド」組織は巴奈馬工事に似ては居るが、一つ違ふところは、巴奈馬では矢張り賃銀制度が行



はれて居ることである。然かしこの賃銀制度にしても巴奈馬のは世間一般とは餘ほど違ふ。先づ巴奈馬では食料が實費で供給される。斯の如くして、資本制度は巴奈馬では二つの利益の中の一つと、二つの使用料の中の一つとを失なつて居る。第二に、眞の賃銀制度は使用料と利子と利益との爲めに利用されて居ない。これ全體の事業が利益本位でない爲めである。

巴奈馬の工事のやうな仕事は一大社會政策を生じ、隨つて個人的資本主義では如何んともしがたいやうな難問題が起る。左ればと言つて比較的小さな仕事までも資本家や請負者に一任してはならぬと言ふ結論は生じない。然かし大體から言へば小さい仕事は無いわけである、一斤の茶や砂糖を買ふのは、一見至極簡単な仕事のやうだが、之れとても巴奈馬運河工事同様の一大社會政策の問題になる。成るほど巴奈馬は、茶や珈琲の産業組織と比較すれば甚だ些細の事件に過ぎない。食料品店の帳臺の上で一杯の茶の代として拂ふ二志は、印度の苦力や支那の土民の勞働の代價であると同時に、荷造り人夫や船乗りや倫敦の茶商人の勞働の代價であつて、且つ其の茶を積んで來た汽船を建造した造船職工の仕事も、其船を動かす機關を取りつけた技師の仕事も、此の支拂があればこそ行はれるのである。一斤の茶の代として一文を投げるは、猶ほ石を海中に投げるが如くである、其の投ぜられた産業界の外縁までも、漣波は波及するものである。故に一婦人が食品や衣類を買ふの

は至大至重の商取引であつて、巴奈馬運河の工事の如きは其の下位に立つものである。今や此等の商取引が非常に重大となり、且つ甚だ波及する範圍を廣うするに至つた爲めに(事實上も意義上も)、個人的資本制度の如く範圍の狭まいもの又は主義と方法との限られたものでは、逆も斯く複雑な局面を處理することが出来なく成つて居る。資本制度は既に巴奈馬で失敗した。一斤の茶を買ふときにも亦た等しく失敗である。

是に於てか、問題は本に還へる。——資本主義の頭腦は今では時代後くれである。これは「ウィクトリヤ」時代のゴテ／＼した家具に表はれて居る頭腦である。此の吾人の説を精確に言ひ表はせば斯うなる、——實行的及び行政的頭腦は、個人的資本制度の狹隘なる爲め又は其の經驗思想の誤まつて居る爲めに、妨害と檢束とを蒙つて居ると。巴奈馬運河工事をして有終の美あらしめつゝある有力なる陸軍大佐等も、若し其の事業に全國民の信任といふ後援があり又は新しい産業組織で保護されて居なかつたならば、「ドウ・レセツプ」と同じく無能無爲たらざるを得なかつたであらう。彼等は此の大企業の爲めに特に組織された勞働力全部を運河工事に集注するの必要があつた。然るに是れが取りも直ほさず「ギルド」の職能であつた。彼等は先づ其の被備者の勞働力を獨占し、次ぎに此の力を最も有效な用途に差向けねばならなかつた。吾人の曩きに一言せし如く、「サンヂカリズム」



は、土地と建物と機關とを所有しなければならぬと主張するが、之れは先きにも吾人の排斥せし所である。巴奈馬運河の建物や機關が米國政府の所有である如く、「ギルド」の事業を行ふ財産は國民の所有である。然かし、經濟的勢力は政治的勢力を支配するものであるから、「ギルド」は財産の用益權 (usufruct) のみを所有するものである。然し乍ら「ギルド」は勞働を獨占するの權利を有効に適用するのが第一の任務でなくてはならぬ。「ギルド」は(巴奈馬の大佐等の如く)、相當の「ギルド」の手を経て必要な材料の供給を強制せねばならぬ。「ギルド」は個々の資本家の手を離れなければならぬ。資本主義と賃銀制度とは、共に絶縁しなくてはならぬ。斯くて資本制度より起る負擔と拘束と冷酷とは、過ぎし昔しの惡夢と化し去るであらう。

此の場合、今日現に個人的資本制度の探して居るやうな『頭腦の人』は最早や淺薄にして使ひ途も無いものと成つて了ふに極まつて居る。新時代が到來すれば、實行的及び行政的の頭腦は必ず一段の發達を遂げる。斯くて「ギルド」指導者と其の行政者は、眞の意味に於ける爲政家となるであらう。彼等は何なる問題に對しても、私心を挿まざる見解を有するであらう。何となれば彼等は自分が偉らく成らうとか、ケチな儲けをしようと言ふような考を持たないからである。彼等の將來は保證してあるし、其の身分も保證が出来て居る。彼等の魂は資本主義の道德觀の爲めに腐れが入つたり

色がついたりして居ない。少なくとも此の點に於て、彼等は純な空氣を吸ひ、其の仕事は一層豊富な結果を收めるのであらう。素より外かに何にか道德上の缺點も生ずるかも知れぬ、——何んなよい風俗慣習でも世を腐敗させる事があるから。——然かし乍ら少なくとも壟斷階級の腐敗的感化に對しては、之れに抵抗することが出来る。

前陳の如く、個人的資本主義は七千五百萬磅を投じて、巴奈馬で失敗した。然るに此の位の金は「ギルド」にとつては何ともない。例へば纖維工業「ギルド」の如きは、毎年この金額の三倍も拂つて其れで何んとも思つて居ない。此の「ギルド」は、先づ米國其他から少なくとも綿花一億磅を買はねばならぬ。それから資本主義の哲學では思ひも寄らぬ大仕掛けで新機械を買はねばならぬ。其他、衛生とか教育とか公的奉仕とかに對する「ギルド」の費用は、頗る莫大なものであつて、巴奈馬の費用などは足許にも追つつかない。それは其の筈である。巴奈馬は僅か六萬人の人口である。之に反し纖維工業「ギルド」は四千五百萬からの人間と交渉關係を持つて居る。要するに、「ギルド」は、個人的資本主義の考へて居るよりも大規模のものである。吾人の今日出會はす大抵の人々は、何處か大きな會社に出て居ることを誇りとして居る。此の會社といふ字に注目せよ(註——會社即ち「フーム」は羅典語「フィルムマ」(Firma)であつて、「フィルムマ」は「フィルムレ」即ち『確かめる』の意味があ



る)。然るに、如何に大きな資本主義の會社でも、「ギルド」には較べものに成らぬ。愈々「ギルド」の世の中に成れば、人は私人の會社に出ることよりも「ギルド」に關係することを誇りとするに至るであらう。

此の誇りがあれば、「ギルド」を國民經濟上の一大機關となすべき強固なる意志と訓練ある能力とが、自然に發生して来る。斯くて富の生産と分配とは、紳士にも適するの職業と成るであらう。

### 第十一章 「ギルド」制度と動機

國民の經濟生活に何にか變化を起さうとすれば、必らず人を動かす所の動機（特に物質的方面に於て）に關する種々の問題が新に發生して来る。人の本性と今日の經濟制度とが、密接不離の關係あることは、率乎として抜く可からざる多數世人の信仰である。故に、今日の經濟制度は、人間本然の性から生じたものであつて、本來の面目却つて其中に存すとは、言ひ方に強弱の差こそあれ、人皆なの言ふところである。此の説は、米國の某教授（「ベンサム」、「ナツソー」其他の衣鉢を襲いだる）も賛成する説である。此の教授は、米國々會無煙炭調査委員の前で「經濟人」<sup>（エコノミックス）</sup>といふ奇怪なる人間が居るといふ説を出した。此の「フランケンシュタイン」<sup>（Frankenstein）</sup>式の怪人（註——「フランケンシュタイン」は人間を製造したが魂のない人間であつたといふ話）は、人をして物質的追求を爲

さしむる所以の種々なる動機を代表するものとされた。此の不合理な擬<sup>（シミュレーション）</sup>觀は批評するのも馬鹿氣て居る位である。何となれば、個人的資本制度を信する者の大多數も此の説には反對である、彼等は率直に斯う認めて居る、——個人的資本主義の世の中では、世ばなれした——而して資本主義的ならざる——基督といふ人の有難い感化がなくては、人生は一日も耐へ難いものに成ると。「勘定は勘定と言ふ格言も左ること乍ら、冷酷にして巧猶なる、又は押し強よい商賣根性を、私的生活にまでも持ち込んでならぬ」とは、吾人のよく耳にする言葉である。自分の商賣と社會的法典との矛盾は、何時の世にも道德家、小説家及び劇作者の好箇の題目である。大抵の人は自覺して居るであらうが、今日現に行はるゝが如き商賣は、人間の善良なる動機とは一致しない。何となれば、人は日常社交の際に「所嫌はず吾が専門の話をする」と「<sup>（talk shop）</sup>を厭やがるからである。抑も男女が自己の生活の手段につき社交の際に自由に話をしてはならぬと言ふ理窟は、一體全體何處にあるのであらうか。人間は其の社交關係に於て斯んな商賣をして居ますと言ふのを恥ぢ乍ら、工場や帳場に出ては其れを實際にやつて居る。此の事實あるが爲めに、今日の工業又は商業の制度は「ブラッカードリー」<sup>（blackguardly）</sup>（下司ばつた）もの又は人情に反せるものに成るのである。昔は奴隸制度が人情に反して居つた。今の賃銀奴隸制度も同じことではあるまいか。



人間らしい動機の本當に表はれるのは、産業競争に於て、あると言ふ説がある。而して社會的行爲は、畢竟作意であつて、本來の面目は即ち掠奪にあるものである。人間の動機は利己的である。人間の社交的快適は皆な虚託である——といふ説を主張する者が有るかも知れぬ。然るに此の主張は、産業制度は文明の先驅者なりとの主張によつて破壊せられたものである。「マンチエスター」派の經濟學者は、此の根本的矛盾に氣が付いて居たから、「聰明なる利己」(enlightend selfishness)の學説を案出した。彼等乃ち曰、——『無論、人は利己的の動物である。然し乍ら、人間は産業上の經驗があり、隨つて文化的使命を有して居る。故に人間は社會の大なる經濟的利益に服することが、其の實自己の個人的利益を増進するの最も賢明なる方法なることを信するに至つた』と。吾人は之れにつき爰に唯だ一言の批評をするに止めようと思ふ。それは、外かでもない。貨銀制度が繼續すれば、社會の大きな經濟的利益は増進しないのみか、反つて危うくなる事、及び奴隸的屈從は（暇令へ道德的に従ふものであつても無くても）文明社會を破壊するものであつて、且つ不經濟的である。何んとなれば大多數の人民をして有効に富を利用し消費することを得ざらしめるからである——といふ事である。労働者の活動を、無生命の商品と同じ價値のものに引き下けてしまふ事は、労働者を生かす所以の道でなく、反つて之れを殺す所以である。殺すのは經濟的のやり方ではない。

反つて經濟の否定である（他に何の役に立つかも知れぬが）。

假令へ人間の本性が一變しないとしても、物質的及び精神的に幾變遷があつたのに今日まで少しも本質が變つて居ないとしても、吾人はまだ十分人間の本性が分かつて居るとは言へない。肉體饑ゆれば甲の方向に動き、富が増せば乙の方向に動く。吾人若し人間の動機の可能性を認め、其が逆境に於て如何なる點まで奮激し得るかを悟らば、其が一たび物質的の苦勞といふ壓迫や心配を取除かれた場合に、一層美しい色に咲き出でるものと、假定してよくは莫からうか。この時に於て、吾人は人間といふものは天使に餘ほど近いものであつて、光榮と名譽とを擔へるものなることを發見することは無からうか。故に、人間の本性が變化するかせぬかは、問題でない。果して今少しく人道的な又た經濟的に穩當な社會改造を施せば、人の本性は今日の人の豫想以上に偉大なものと成りはしないか——といふのこそ問題である。人間の動機と希望とは貧乏といふ狂瀾怒濤の中から救ひ上げられさへせば、世界を富貴にして之れに生氣を満たすことが出来るといふ、——この不斷の信仰こそは、「ギルド」社會主義の主張の基礎である。

人間の本性と其の動機とに關する議論は、社會主義各派の共通の論據とせるところであるが、吾人は今は唯だ「ギルド」社會主義が如何なる精神と動機とに鼓舞せらるゝかを考究して見よう。「ギ



「ギルド」の財産』に關する章に於て、吾人は會員の勞働が會の生産品に化するまでに、本來の價値が差引かれないやうにし度いと言ふのが「ギルド」の本旨なる事を陳べた。これは「ギルド」組織の生括樣式の基礎である。故に、「ギルド」加入者の多數が同情を以て「ギルド」の富の生産に極力盡瘁すると言ふ確信が得られない以上は、「ギルド」の精神的及び經濟的基礎は危ぶない。然らば吾人は會員全部が律義に其の仕事をするものと當てにして居て好いであらうか。「ギルド」の生産に本來の價値を付けたいといふ動機の有効にして且つ久しきに耐へるものが果して存在するであらうか。吾人は然りと應ふるに躊躇しない。「ギルド」會員の有する如き動機は、個人的資本制度では起らないものである。正直に働らくことの動機は共同生産の場合でなければ起らないものである。共同生産といふものは、勞働商品觀や賃銀制度説を一切排斥する。賃銀制度は正直に働らかうと言ふ人間の動機を殺すものである。これあるが爲めに勞働の中に潜在せる人的要素は破壊されて、人間は賃銀奴隸に化し了るからである。

大英國の勞働者（のみならず他國の勞働者も同様だが）に接近して居る者は、勞働者が働らく機會だに與へらるれば喜んで働らきたいといふ觀念を持つて居ることを知つて居る。此の働らきたいと言ふ觀念が、近代の産業制度の爲めに破壊されなかつたのは、不思議でもあり仕合せでもあつた。

産業國から、其の技巧を奪つたら、後とに何にが残るか。何にも残らぬ。然るにも拘はらず、今日泰西諸國及び米國の製造家の大多數は、其の製造業の生命たる此の技巧を破壊せんとの大隠謀を企て、も居るやうな觀がある。（これは信じがたいが事實その觀があるから仕方がない）。蓋し、今日は機械的生産の世の中だから、分業が極度に行はれ、その結果、人は最早や商賣を覺へると言ふ事が無くなり、僅かに其の一部面のみの仕事にたづさはつて、終生同じ事のみをやつて居るわけに成る。幸にも勞働者には性來社會的にして雜群索居を厭ひ、互に同情同感するの念があるから、相互に經驗を交換する事により各自の商賣の傳説も維持されて行くのである。此の傳説は、勞働が商品視される事が止み、昔の中古時代の「ギルド」制に於ける如く人的要素が豊富と成るに従つて、段々人間本來の面目を造り出すに至るものである。一と廉どの腕のある職人に成らうと思へばこそ勞働者は魂までも賣つて居るのである。吾が子に一人前の工匠を仕立てんが爲めばかりに、其身の餓ゑを忍ぶといふのは、今日の勞働者の現情である。勞働者の動機は今日と雖も斯の如く貴いものである。然かし動機は他かにもある。大望野心も他かにある。例へば「ギルド」の會員が「ギルド」の管理組織の上位に果進し其の管理者と成りたいといふ動機又は野心の如きも其一つである。今日此の種の動機には二の方面がある。或人は段々上達して職工長に成り、自己の専門の業に於ける商業方面に



入つて行かうとし、又た或人は職工組合事業に没頭し、終に役員又は代表者其他として多少重望を負ふ身に成らうと思ふ。此の兩種の人間をして、各その志を遂けしめるの自由を與へなければ、「ギルド」の組織は完全でない。現に技術方面の協會は、今日其の入會資格を擴ろけて技師等よりも劣れる労働者をも入會せしめやうとする傾向が見える。此等の労働者は今でこそ身分が卑いが、「ギルド」制度になれば、技師技手等と同等に見做されて當然入會を許るされるべきものである。個人的資本制度の世の中に於ては、大抵の人は此等の動機を實現する事が許るされない。彼等労働者の當然上ほつて行ける筈の地位は、傭主の血族のみによつて占められる。「ギルド」制度の下に於ては、平ら職工も大將の指揮棒を其手に打揮ることが出来る。

然し乍ら、果して人類の大多數が、自己の生計を立てることを人生主要の事業と考へて居るか如何か、疑はしい。彼等は生きて行かんが爲には喜んで働らく。そして賃銀制度は彼等を働らかせんが爲めに生きて行かんことを強制する。たゞ食つて生きて行かうと言ふ先入主的見解は、無上の價值ある才能と大望とを麻痺させるものである。如何んな安すい賃銀で働らいて居る奴隷同然の者も、其の心の中には天才の閃めきが有り、思想と美術心と文學の念と宗教的情操との兆候が幾らでも見える。前にも言つた事だが爰に今一度反覆の必要あるは、人的、經濟的、社會的、及び精神的

の資源として國民の頼よることの出来る源泉は「デモクラシー」である。此等の資源は皆な「デモクラシー」中に具はつて居る。否な「デモクラシー」の中でなければ見出すことは難い。これは國民的生活の花咲き果を結ぶ土壤である。賃銀制度の惡い點は、この土壤を瘠せ地にするからである。「あとは野となれ山となれ」主義で收穫を急ぐからである。果して然らば、少數階級ならぬ多數労働者の各種の動機、大望、欲求等を充足させるやうな經濟的社會改造は、國民的生活の源泉たる「デモクラシー」を助長するやうな動機と、最もよく調和せるものではなからうか。

よく人の言ふことだが、賃銀奴隷は昔の家畜同然の奴隷と殆んど同じやうに懶惰無爲である。故に、富の生産を維持せんが爲には、餓死しない程度で賃銀奴隷を生かして置く必要がある。「金さへやれば直ぐに呑氣になる (ease off) やつ」だ——など其他色々侮辱の言葉を耳にする。こゝに擧げたのは、其の一端に過ぎない。吾人は此の如き愚なる言説に對し兎角の議論をする必要はない。たゞ吾人も斯んな説のあるのを雲煙過眼視する者でない事を證明して置けば足る。一體こんな説は、議論ではない。たゞ賃銀制度に對する口實である。勿論人を虐めて (grind faces) ハイト ユツレンス 氣力も反撥も亡くならせ、全たく無關心にして惰勢で動く人間として了ふことも出来ないではない。國民中の大多數たる労働者も斯う虐めて大人しくさせる事は出来やうが、然かし其れが果して大英國の名譽で



あらうか。英國の名譽は、無頼無爲の勞働者によつて得たるのであらうか。朝の六時から働らいて九時間も十時間も十一時間も粒々辛苦をする無産階級によつて保らるゝであらうか。斯かる考の根本的に間違つて居ることに氣付いて居る先見の明ある傭主等は、既に高率の賃銀の却つて經濟的なことを發見して居る。即ち科學的に精確な高率賃銀主義は、賃銀基金説を打破し、收益減少法則に抵抗するに足るものである。獲得は蓄積を助長す——即ち食へば食慾が増す——といふことは一般に眞理である。勞働者と其の家族とをして、食ふに困まることの無いやうにしてやり、各自の才能を發揮せしめるだけの機會を與へてやり、多少行動の自由を與へてやれば、勞働者は直ちに國富の源泉となるものである。『多少なりとも貧乏の苦しみから脱することが出来さへせば、自分とても少しは役に立つ仕事が出来やうに』とは、吾人の屢々聞くことである。吾人も亦た中心さう信じて居るものである。個人的資本主義の最も弊害あるは、天才、技能、能力等にして資本家の利用し得ざる部分あれば、之れに對し無情にも輕蔑の態度を採ることである。否な之れよりも甚しきものがある。資本主義は勞働者の富を生産する能力すらも枯死させて了ふものである。

人類の動機は複雑多様にして分解に困難である。或ものは高尚であつて或ものは下卑て居る。然かし其の高尚な動機を助長させるやうに仕組み、下卑た動機を殺し又は矯めることは教化と常識と國富の分布とに依頼する事とするのが、本當の生活法である。之れ吾人の信じて疑はざる所である。

人間の動機を分類し定義し又は要領書きを作ることが出来ないとしても、動機と欲求と大望とを充たすことの出来るやうな本當の條件と環境とを發見することは不可能でもあるまい。動機は意志を要する。然かし之れを實現せんが爲には、意志に力が加はらなければならぬ。故に何よりも先きだつものは意志の力である。然るに、意志力の資源が乏しくて、漸く食つて行けば足る位の意志力であるならば、吾人は意志を有することも出来ない。生活に必要な「エネルギー」以上に意志の餘剰がなければ、駄目である。此の餘剰さへ手に入れば、人は自己の意志力を使用して自己の動機を充たして行くことも出来るのである。人は自己の中にある意志力が目的を達する丈けに有力であるか又は餘まりに弱いかに従つて、成功もすれば失敗もするものである。現代の貴族主義的な考では、此の『力を得んとする意志』は、支配階級の少數者の胸に宿どつて居るのを本則とする——支配階級者とは、學校の教化をうけた者のことである。その學校といふのも、壟斷階級と密接に提携せる學校のことである。此等の階級の者は、生活の維持の爲めに意志を消耗することが無いから、意志力の餘剰は他の階級よりも多い。故に勞働者をして此の統制階級に服従せしめんが爲めに、適當の訓練を彼等に施すのが、國民的生活の眞の道である——と、斯ういふ考である。此の目的を達せんが



爲めに、因習的の道德の力と、王の統率する有形の力との間に調和と平衡とを維持せんことが常に計畫されて居る。此の説は即ち、官僚政治からのみ超人は發生するといふ假説に基づいたものである。之れは「デモクラシー」の説と正反對を相爲すものである。「デモクラシー」の説では、國民の大家を致さんが爲には、多數人民の才能と性向とを助長するの外に道なしと言ふのである。故に畢竟問題は斯うなる——『力を得んとする意志』は、果して支配階級の「パーキジット」(儲けもの、——役得)であるか、或は萬民の性得であるか、と。官僚主義者は自ら之を有すと主張し、「ギルド」も亦た之れを主張する。

## 第十一章 官僚と「ギルド」

大英國に於ける社會主義運動及び労働運動に於ては、近來官僚政治と官僚の地位とが持て囃やされ出して來た。早い頃の英國社會主義に於ては、官僚政治に關係の有るものは、密獵者が山番に成つたやうに厭やがられて居たものである。官僚には既に革命的氣力が無いと見做され。官僚は餘儀なく舊制の味方と成らざるを得なかつた。然かし、之れは獨り官僚に對してのみではなかつた。初期の社會主義者は其の同輩に對しても、此の如き本能的なる疑惑不信の念を懷いて居たのである。社會主義運動が其の革命的の皮を脱落し、經濟に對しても緩和された考を暴露し、政策に對しても

緩和された情を暴露するやうに成るにつれて、政治の機關は次第に彼等の心を惹くやうに成り、終に今日では、名ある英國の社會主義者及び労働黨首領等は、政府の職を奉じ、危うい綱渡りをして以て私腹を肥やす (feather their nest) —— 即ち預り金を中飽) 事が行はるやうに成つた。今日の政府が、名ある社會主義者や労働指導者等を始め、年少氣鋭の「フハビウス」協會員まで、官途につけて、巧みに社會主義的及び労働的の運動を緩和して居る工合は、未だ世人一般の知悉せざる所である。其の就任した地位は、倫敦では大きな地位であるが、地方では割合に卑い地位である。兎も角も此等の任命の行はるは、之れに任ぜらる者が色目を使ふからではない。公の奉仕といふことが現在の社會的政治的及び經濟的制度的「バルレーヂアム」(「バルラス神像即ち守り本尊」) であるから、社會主義者も労働者も全ての破壊運動を未然に防ぐの役目を分擔せねばならぬと言ふ事を、意識的又は無意識的に理會しなければならなく成つて來た所爲である。職業紹介所とか労働保險會とかは、此の緩和策を實行する政府に對し便宜を與へたものであつた。

「デモクラット」だとの評判ある一部人士を公職に就けた事は、少しも「ダウニング」街及び其の附近——即ち官吏町を少しも民政化しなかつた。(即ち大學の民政化は行はれなかつた)。階級別は今以て盛んに行はれ、第一階位への任命は、大學の特權となつて居る。斯の如くして、官僚的組織は、



今もなほ支配階級に付きものに成つて居る。彼等は同一の崇拜物を拜がみ、其の口吻も、其の様子も、其の大望も、皆な同一轍に出で居る。故に大英國の「デモクラシー」が労働階級から壓制の機關と考へられて居るのも當然である。即ち労働者は英國の官僚を目して警察と軍隊と宗教者及び醫師の心理的訓練との實權を有し、兵力を以て之れを保護させて居る一の支配階級であると見て居る。

國家社會主義者と官僚との握手は明白に必然の勢である。國家社會主義は官僚政治を必要條件として居るものである。何となれば「デモクラシー」は賃銀制度と兩立しない事、而して前にも言つたやうに、國家社會主義は賃銀制度の維持によりて債券所持者の支拂ひの能力も出來得るものなる事を、今日まで未だ此の國家社會主義が悟らなかつたからである。「デモクラチック・ビュロークラシー」(民主的官僚政治)は、既に名に於て矛盾である。過去現在未來に亘たり、民主的官僚政治は既に支配階級の支配の片腕である。支配階級の存在そのことが既に「デモクラシー」の否定であるから、官僚政治は根本的に反「デモクラシー」的であると謂へる。故に労働階級が官公職の人望ある事に對して警戒をするのは、本來此の「デモクラシー」の本能から出た警戒である。官僚政治と國家社會主義との提携が行はれて居る範圍内に於て、其の影響は(實際的よりも寧ろ心理的に)專制的である。「フハビウス」協會は元とから官僚主義を標榜して憚らなかつた。同協會は樂觀的改善論者式の

政策を有し、公の奉仕といふ手段によりて此の政策を追求した。年少氣銳の「フハビウス」協會員は快活に「官僚とは何ぞや」と尋ねる。「これ官僚に働らく人の謂なり」といふ。青年は更に其の意味を捕捉せんとて「官僚とは何ぞや」と問ふ。「オフィス」(役所とも事務所とも帳場とも譯す)のこのことのみと答へる。そこで青年は自得せしものゝ如く「其れ然り。故に役人を番頭と呼ぶも亦た不可なからん」といふ。然かし一體言葉といふものには、其の出典上の意味の外に聯想上の意味がある。「オフィス」(役人)は「オフィス」に勤める人なりやと問ふ時と、「オフィサー」は番頭さんなりと問ふ時とを比較して見ても分かる如く、役人即ち官僚の語は字を書いたり十呂盤を弾いたりする事以上の意味がある。「フハビウス」協會員の「デモクラシー」に對する態度——その横柄な態度——は、彼等が官僚に依頼して、上みから社會改革を行はせやうとする考を持つて居るから生ずる態度である。彼等は賃銀制度が自分で社會改革をやることを想像し得ないと言ふのである。「フハビウス」協會主義は、賃銀制度が何物をも生み出さない瘠地同様のものなるを認めた點に於ては正しいが、其の賃銀制度を我慢しようとするのは「デモクラシー」に反するものである。「シドニー・ウェップ」夫妻も其の事を言つて居たではないか。賃銀制度は根本的に全廢する能はずと論じ乍ら、余は「デモクラシー」を信ずと言ふのは、嘗に非論理的なるのみならず、根本に於て産業と有力なる「デモクラシー」との眞の



關係が分かつて居ない證據である。

若し「フハビウス」協會員は官僚といふものに對し相當合理的の態度が有るとしても、労働黨の役員には其んなものすら全く無い。彼れは人生に關する説については全く無智である、彼れはたゞ政權を欲するのみである。彼れは役人の氣樂さを愛する者である。彼れは賃銀制度の『無爲なる』情態から、早く『有爲なる』官僚組織に移りたいと希望するのである。いくら労働政策について働らいて見るも骨折甲斐が無い。それより寧ろ役人になつて見た方が仕事が出来やうと考へて居るものである。然かし、國家社會主義や労働黨員が官僚崇拜に成つた個人々々の事情や理由は暫く措いて問はずとするも、其の主要の理由は、所謂『政治運動主張者』の大多數者が、政治は革命せずして改革するものなりとの確信を得たからである。賃銀全廢といふことに革命的意味がある事を、一般労働者が理解するに至るまでは、名ある労働黨首領等が官僚に成る事も止むまい。そして其れが却つて賃銀労働者の利益を少々増進するの途ともなると考へられるであらう。若し労働者が賃銀を全廢することを欲しないとすれば、彼等は革命も『デモクラシー』も欲しないわけである。斯う話しが極まれば、官僚に馳せ參じて、一向『デモクラシー』の裏切りとも成らず、労働者への裏切りとも成らぬであらう。

然かし、實は是れ最も憎むべき反逆である。抑も此の労働黨員の官僚化した者は、何事をして居るか。彼等は政府の目となり耳となり——即ち狗となつて、一方労働者に對しては、お前達は騒ぐな、今に少しは樂にさせてやると甘言を以て騙ましますかしつゝ、一方政府に對しては、那邊までもおやりなさい、何處から先きは見合はせないと云ふやうな警告をする。今後此の種の官僚労働者が百人二百人と殖ゑて行つても、結果に於ては變りはない。幾くら自分の味方を繰り出して、敵の力を弱はめる事は出来まい。——官僚になる者は労働者を棄てゝ走る奴ばかりであるから、何うせ味方の弱點をこそ覺えても居れ、味方の強味は忘れて居る者どもである。米國は大仕掛けで労働界の政治運動者を驅り集めて官僚にする國柄であり、獨逸は官僚自身で官僚の間諜を使つて居る國であるが、結果は何れも同一である。獨逸でも米國でも、『労働者は騙まされて、貰ふべきものも貰へない』で居る。

然るに「ギルド」からも官僚政治が発生することは無いか。「ギルド」は必然的に官僚政治を採用することであるが、それが果して文官風の官制となりはせぬか。「トラスト」の最高幹部は、今日現に官廳同様に官僚式ではないか。勿論さうである。官吏と同じく「トラスト」の幹部も亦た『これ』使料と資本との利權を保護せんが爲めに』任命せられた者だからである。官廳吏員の職務は皆な斯



んなものである。然るに「ギルド」の役員は、政府又は「トラスト」の役人とは本質上全たく異なつたものである。其の理由が二つある。——(a)壟斷階級を保護するの必要が無い事、——貨銀制度と共に壟斷階級は無くなつて了つたから。(b)「ギルド」は自己の役員を「デモクラシー」式に選出する事。——この二つである。前にも言つた如く、職工は作品の巧拙良否につき又は産業管理の適否につき極めて明快な批判をする眼を持つて居る者である。今後十年ならずして「ギルド」の中には無爲無能の役員は一名も居ないであらう。「ギルド」會員は役員能力を判断するに、辨口の巧拙とか態度の懇懇とかによつて判断する事はない。最少の労働を以て最大の富の生産をあげ得る能力を標準として之れを判断するのである。「ギルド」會員間に成るべく大なる富の分配を爲し得るか、又は其の生活を向上し愉快にするに必要なる閑暇を成るべく多く與へるか、其の何れか、労働經濟である。この事からして甚だ重要な推論が生ずる。即ち——産業的「デモクラシー」は、自由なる社會生活の根柢なりとの推論である。産業的の實力を與へずして政治的自由を與へんとするは、徒らに人の氣を揉ませる残酷な「ベテン」仕掛けである。經濟的勢力は政治的勢力に先立ち、且つ之れを統制するものなることを忘れるのは恐るべき事である。且つ、官僚政治を解剖して研究すれば、其の「デモクラシー」に反し、隨つて「ギルド」組織の精神と主義とに反することは分明である。

「デモクラシー」が決然として政治的行動と絶縁し、其の力を産業的實力の獲得に集注するとき(これも畢竟「デモクラシー」の主義を適用せねば行はれない事である)に至つて、「階級闘争」上の眞の敵は官僚政治(即ち有産階級の權勢の表顯にして、陸海軍の力で後援せられ、教會の信條で非公式に保護せらるゝ所のものである)なることを初めて發見するであらう。政治運動を主張する社會主義の最も危険なる結果の一は、此の階級闘争の實相が其の爲めに隠蔽せらるゝに至ることである。社會主義者及び労働黨員にして政治運動を主張する者は、——其の實此の手合ひが労働黨の重要な要素となつて居る——投票を獲得せんとする餘まり、階級闘争の存在をも無視し、甚だしきは其の存在を忘却するに至るものである。同じ無視するにしても、政治的必然としての無視ならば、まだ幾らか呑み込めるが、時局に於ける重大なる要素として之れを認めないのは、政治的臆病といふ病の極期である。其れに拘はらず、獨立労働黨の指導者等は、階級闘争は全然社會主義的運動と無關係だなど、臆面もなく公言した。而して今に至つて、實際の賃銀が少しも上がらず、却つて段々下向き加減に成るのを見て、今更の如く無念がつて居る。故に吾人は此の階級闘争が遺憾ながら事實なることを反覆し又た反覆せざるを得ない。又此の闘争を「ギルド」社會主義で片付けて終ふには永い間の戦争を續けなければならぬ事、而して「ギルド」社會主義は、眞の革命同様の勢力を必要とす



ることを吾人は反覆力説せざるを得ない。富豪政治は、お辭儀をして送り出すべき代物でなく、宜しく追ひ出して下すべきものである。

官僚政治が段々産業情態の中に侵入して來ること——例へば工業法とか、保險とか、其類のことを設けること——は、本問題に今ま一つ別の重要方面の存することを「デモクラシー」の人々に悟らせる種子になつた。富の生産に關係ある全ての事柄に於ては、官僚の徒は逆でも御話にならぬほど無爲無能である。議會は工場及び工場生活に關する法令案を議決するが、次ぎの會期には直ぐ其の修正をやらなければならぬ。産業のことは政治家といふやうな忙しい人間の素人くさい頭では逆も分らぬ程に複雑なものである。工場監督官などは、備主側から見ても被備主側から見ても、一の滑稽である。彼等は監督官の來るのを待ちうけて、豫じめ手筈をして之れを瞞着することを心得て居る。産業界の人間が心から喜んで同意し服従するに非ざれば、如何なる工場法も工場規則も眞個の價値を發揮するものではない。「ギルド」制になれば、此の如き法規は無用の長物と認められるに至るであらう。若し産業的「デモクラシー」が自からの工場情態を統制し規定することの力がなくば、「ギルド」社會主義も聲氣樓たるに過ぎないであらう。然るに、其の實、官僚政治は從來人道的に労働者を取扱ふ方が利益が多いと言ふことを發見した。即ち人道的の取扱をすれば労働者の商品としての價値が殖ゑると言ふ理窟を發見した。從來工場法はすべて比較的大なる商業的繁榮を結果した。經濟的實力を擁して立てる備主階級は、議會といふ機關を通ほして此の實力を反映して居る。其の結果として、彼等は今や自己の要求通りに労働條件を決定するの便宜を有するに至り、労働者を慰撫し得るに至り、又た名のみ人道的なる如き法規によつて得らるゝ信用で自己の利益を計かることを得るに至つた。斯くてある間に、實際の賃銀は下がる一方で、徒らに使用料と利子と利益とのみを増すに過ぎない事に成つた。

今日、現に官僚と成りし労働黨員と官僚との間に存する所の親しい關係は、速かに一掃して了はねばならぬ。内閣諸公と其の従僕とに叩頭する労働代表者ほど、今日不面目なもの（不道德とは言はぬが）はない。此等の代表者は常に職工組合會議及び労働黨の會議にも忠實に勤とめ、一方内閣諸公には叩頭する、諸公は之に對し笑顔を以て應へる。そこで内閣諸公果して某々事業の某々方面を察し、相當の法規を設くるの意なきかと問ふ。諸公は御注意の段、千萬忝なし、自分も兼々その問題には氣が付かぬでもなかつた。仰の如く早速取り調べさせませうか、さう言つて別かれる。是に於て例の代表者は、倫敦で面白ろ可笑しい生活をして、或は芝居にも行き、或は衆議院にも行く。衆議院議員は、此の代表者を招待して懇親の宴を開く。斯うして代表者は歸つて了ふ。大臣は大臣



で其の下僚に命じ、今回提案された法律案は果して關係商工業に於ける自己の後援者たる富豪の氣を悪くする事はないか否かを取調らばさせる。其の結果次第で大臣の最後の決定は行はれる。斯の如くして年々労働代表者が官僚の御機嫌とりをやるのは、今や醜怪事件を構成する位まで極端に行はれて居る。然かし如何なる醜怪事件も、此の官僚叩頭ほど心理學的に悪影響を及ぼすものはない。之れが爲めに、労働者の組織は今や一個の嘲弄及び籠絡の手段と化せんとして居る。労働者の團結組織が官僚と戦はんが爲めに存在し、其の機嫌をとる爲めに存在するものでないと言ふ事を、永久に悟らしめてやる可きは此の際である。

「ギルド」が起つても官僚は無くなりはない。然かし其れが爲めに、官僚の心は一變し、其の傳説は一轉機を劃するであらう。抑も官僚は生まれや育ちや教育やの上から言つて、其の生活も同情も支配階級とか富豪階級とかに結びついたものではあるが、其れに拘はらず自分自身は決して大身代の人ではない。彼れは其の社會上の相棒が掠奪をやるのを保護しても、自分は餘まり其の御裾分けにあづかる事もない。彼れは假令へば金持ちの邸に抱へられた家庭教師のやうな者である。其の家族と一緒に住むが其の家の人ではない。彼れは宮殿内の宦官の如き者である。又た彼れは城を守る憲兵隊の如き者であつて、——成るほど立派な一隊を成しては居るが、別に利益の山分けに預

かる事もなく、唯だ城主の利權を保護する役目を仰せづかつて居る丈けの事である。官吏も憲兵隊の如く、團體精神といふものが有るから、主人は何代更はつても忠義心に變はりはない。専門技師は良僕たらんも良主公たり難しとは、通俗の言であるが、官僚が正さに然うである。故に、資本主義的個人から「ギルド」の方へ經濟的實力が移つてくれば——結局のところ經濟的實力は労働力であるが——官僚政治の全精神は忽ち一變すること請合である、此の時、最早や官僚政治は行政的壓迫の機關たることが無くなるであらう。官僚政治は、斯の如くして今や新らしい軸を回轉し、新らしい空氣の中に生活するものと成るであらう。斯くて今日

『口をつぐむの奸智と』

賢い但書と、兩股かける事と、

言ひ抜けの出来る文句と』

それから、名ばかりの「デモクラシー」に口先きばかりの奉公をして之れを裏切り、實は富豪政治に奉公して居るやうなゴマカシに馴れた官僚は、今や忽然として自由の身となり、自己の確信に従つて行動するの自由を有するに至つたことを悟るであらう。

余の研究の進行中、適當な場所に於て、國家の眞の職能を陳べ、其の政治が今後純乎たるものに



成るべき事、及び其の政策が財力によつて動かさるゝ事の無いものにならねばならぬ事を概説して見るつもりであるが、今ま差當り官僚だけの事について一言せんか、今後の官僚は地主や資本家の爲めに犬馬の勞を執ること無く、地主資本家等をして政治的に團結し吾れ『國家なり』と言はせないやうにするであらう。そうなると官僚は「ギルド」會員ならで一般市民なるものを目あてに奉公するであらう。之れに關し爰に記憶して置かねばならぬ事がある。人は「ギルド」と共に行動し「ギルド」の利益を保護して行きながら、而かも一方に於て自から依然として一個の公民となり、自己の意見に従つて發言もし奮闘もすること、猶ほ自由の公民の普通に爲す通りであることが出来る。「ギルド」(又は之れに代はるべきもの)に對する政治の制限を主張する如き偏狹な思想には、吾人は同情が來ない。

今日の官僚政治の子孫たる將來の公吏は、(賃銀制度が全廢された以上は主人となる事は出來ぬ)、智慮ある政治的組織(それには一切財政上の重も荷のないやうにせん爲め、「ギルド」が其の重も荷となるべきものを取り去つて呉れた)の奴僕となるであらう。

### 第十三章 「ギルド」相互間の關係

「ギルド」が次第に其の本來の性質に従つて經濟的其他の諸群に分裂するに至るときは、其の間幾

多の利權の衝突が起る。これは忍耐と爲政治家の態度とを以て、論究し解決すべきものである。抑も産業社會の改造は、羅馬式の周密なる思想と希臘式の圓滿なる常識とを以て計畫することが出来る。然し乍ら、之れを指導する精神が、解決を要する多種多様の問題を文化の上から評價する力を缺くときは、中央亞米利加共和國の如く、完全な憲法は出來ても行政が腐敗するやうに成る。「ギルド」を組織することは、訓練ある工匠と産業界の思索家のすべき仕事であつて、小成に安んずる賃銀勞働者のする仕事ではない。此の仕事を爲すには、賃銀制度を全廢するの智謀ある決心と、「ギルド」組織は大工業(今日明瞭に崩壊枯死せんとする)の有力なる後繼者であるといふ事の理解とが無くてはならぬ。

「ギルド」相互間には定めし種々の争議が起るであらうが、之れを先見するのは不可能である。經濟上の利害が相衝突する場合には何時も敏どく毒々しい攻撃が行はるゝものであつて、中々「クエーカー」會議のやうに大人しく理窟で行くと云ふわけには行かぬ。「ギルド」の存在の理由が既に經濟的である以上は、又た物質上の利害ほど人間の考を動かし易いものは無い以上は、假令へ衝突の如何なるものなるか先見し難いとしても、其の經濟的『争闘』の實際に行はるゝ事は初めから覺悟して掛からなくてはならぬ。然かし吾人にして一たび將來の「ギルド」を想像するときは、漠然な



がらも不和の種子は先づ斯んなものではないかと言ふ見當がつく。(尤も其の不和の種が如何んな辛辣な味はひのものであるかは、今のうちは分からぬ)。吾人が前に「ギルド組織に適する産業」の條下にて陳べし所より推して考ふれば、今後の「ギルド」は百五十萬乃至二百五十萬の會員を有することは明らかである。左に主要の「ギルド」が今後何人ぐらゐるの人数を各々會員とするであらうかを一考して見ようと思ふ。これ利害衝突の起る可能の範圍を知るに便せんが爲めである。

ギルド	會員數
一、運輸業	一、五〇〇、〇〇〇
二、農業	二、五〇〇、〇〇〇
三、鑛山業及び石材業	一、〇〇〇、〇〇〇
四、金屬、機關、器具、及び機械工業	一、五〇〇、〇〇〇
五、建築、架設、家具、裝飾	二、〇〇〇、〇〇〇
六、製紙、印刷、製本、文房具	五〇〇、〇〇〇
七、織維工業	一、五〇〇、〇〇〇
八、衣類業	一、五〇〇、〇〇〇
九、食料品、煙草、酒類、住宅	一、五〇〇、〇〇〇
	一三、五〇〇、〇〇〇

是に於てか、一千三百五十萬の會員を有する九種の「ギルド」が起ると見てよい。之れ實に人口の大部分を代表せるものである。此等の各團體間には、今日現在の産業組織と見受くるより以上の經濟的統一が存在して居るであらうが、亦た一面に於ては其の團體闘争も頗る範圍の廣いことと考へなくてはならぬ。理論上から考へれば、甲と乙とが商賣上の取引をするのは其二人の間に經濟的統一を希望して居る證據である。然かし之れも一面から見れば、互ひに満足な結果に達しようと思ひ引き上の闘争をして居るものとも考へられる。而して比較的「闘志」の強い方が少こし懸け引きが甘まいのが普通である。(然かし賢明な辯護士は、双方の十分納得する場合でなくては永が續きのする解け合は六かしいと言ふ。こんなことが理想的な談判なのであらうが)。扱て吾人は此等の「ギルド」は皆な一樣な經濟的實行を有するものと言ふのではない。随つて、吾人は強い「ギルド」が弱い「ギルド」に對し自己の意志を押しつけると弱い方が不平を懷くことを覺悟しなければならぬ。——換言すれば、ド、ドの詰まりは「闘志」を實行することを覺悟せねばならぬ。不公平を矯正せよとの争ひが此の不平から生じて來るは、一體如何なる方面であると見たが至當であらうか。

第一に各「ギルド」が各自の骨折りを高く評價し、他の「ギルド」は之れを其んなに高く見積つてくれないと云ふ事からして不平争論が起ると想像される、先きに「ギルドの財政」の章にも言つたやう



に「ギルド」が出来ても初めの間は、比較的高い熟練を要する工業が所謂「不熟練」職工の群に於けるよりも労働の價を高く評價されんことを要求することであらう。假りに最高限の報酬が一週一百「ギルダ」であつて、最低限が六十「ギルダ」であると六十「ギルダ」のものは絶えず最高限まで上らうと奮闘する。此の闘争は若干「ギルド」の内部にも行はれる。例へば機械組立て職と、其の労働者との間の如きである。此二人は同一「ギルド」の會員である。又た石工と其の労働者との間の如きも同様である。然かし吾人は本章に於ては「ギルド」の内部の關係を研究するのが目的でない。吾人は大闘争の起る場合を考究して居るのである。然るに大闘争は一方の「ギルド」が他の一群の「ギルド」と衝突し、相互の作業及び職務に關し一般的價值標準を決定せんとする場合である。例へば、今日農業は報酬が少ない。其の結果として吾人は食品は安いものといふ考になつて居る。其の實、吾が國民は此の點に於て世界の羨望驚異の的となつて居るのである。然るに、現に農業「ギルド」は、會員數の上では全ての「ギルド」中第一である。果して然らば、今後農業作業、及び農産物に對し、評價變更の議につき諸「ギルド」から有力な主張があるものと覺悟しなければならぬ。農業「ギルド」が全ての他の「ギルド」と直接間接の關係を有することは明瞭である。何となれば、食品の實價が決定されない間は、各「ギルド」の仕事の價も評價することは出来ない。農業價值を高く見積るべしと

の要求は、(實際の農産物に於ても、將た吾が國民生活の重要な要素としても)、果して農業外の「ギルド」からコセツ、コセツた考で受け取られるか、或は大まかな心で受け納れられるか、——これが問題である。之れに就いても爰に忘れてならぬ事がある。最近十年間と雖も、既存の職工組合間に辛辣な争ひが起つた事である。其の争ひは、主として仕事の範圍確定に關してであつた。若し斯かる大問題が皆な同じ精神で極められるやうに成れば、「ギルド」の將來の爲めに芽出度くない事である。然るに吾人の考へて居るやうな「ギルド」は、既存の職工組合のやうなものではない。職工組合と實際界の知識階級との加はつたやうなものである。蓋し、各「ギルド」に屬する労働者と其の「頭腦の人」とは自づから其の内部に於て管理組織を造り出し、すべて産業政策上の大問題は安心して此の組織の決定に一任するやうに成るからである。此の管理組織の背後にあつて之れを支配する勢力は即ち「ギルド」の「デモクラシー」である。即ち苟くも平等公平なる要求ならば必ず之に應ずるといふ精神である。然かし「ギルド」相互間の争論の解決上主として考ふべき問題は、其の時其の場合の經濟的必然といふことであらう。

今假りに、農業「ギルド」が其の報酬六十五「ギルダ」を七十五まで引上げることが出来るやうに其の生産物の價格を引上げんことを要求したとせよ。而して又た他の「ギルド」は成るほど農業労働



の價が引上げらるゝのを中心より歓迎はするが、農業のみに此の引上げが行はるれば、現在の平衡が破れて評價の根柢が動搖するから、之れは如何あつても反對せざるを得ないと感ずる——と假定せよ。此の時、農業「ギルド」は如何なる處置を採るであらうか。

此の問題を解決するに先だち、まづ他の「ギルド」の問題があると假定して見やう。例へば運輸「ギルド」について考へて見る。運輸業は「ギルド」制になつても今日より不用のものと成る事はあるまい。扱て此の運輸「ギルド」が他の「ギルド」の態度に對し不平があると假定せよ。言ふまでもなく運輸「ギルド」は特に戰鬪上の地の利を占めて居る。全くの「ギルド」がかゝつて來ても運輸「ギルド」が頑として動かなければ何とも手のつけやうが無い。然かし此の勢力のあるのは、此の「ギルド」が自から責任を以つて其の勢力を行使する間だけの事である。然るに此の「ギルド」にも不平がある。不平があつても責任感と一致し他の「ギルド」と經濟的統一を守らうといふ念慮を失はざる行動を取るには、如何うしたら好いか。

又た、織維工業と衣類工業との兩「ギルド」も互に密接なる關係を有する。一方が他方から買ふものも随分大きな額に上ほる。今假りに撃争問題が起つたとせよ、これを如何うするか。

又た鑛山業「ギルド」も燃料を要する他の全ての「ギルド」と密接な關係がある。然るに坑夫等は自分の勞働を八十「ギルダー」平均に評價せんとする事があるかも知れぬ。之に反し他の「ギルド」では七十五「ギルダー」平均であるかも知れぬ。此の争端は如何う解決するか。

いふまでも無く、結局のところ、何か一つ共通の標準を作つて、全ての勞働評價を之れに近づけなければ解決はつくまい。然かし當分この結局的解決が六かしいとすれば、其れまでの間の假りの方法は如何したら好いか。

幸にも資本主義の個人が既に一案を案出したのがある。これが丁度この場合の難問題の解決法に適用される。例へば一群の會社が買手賣手として相互的利益關係を有する場合には、種々の面倒な問題を避けんが爲めに相互に財務相談會を開いて取締役を交換するやうな事をする。彼等は相互の利害の相關係せることを認識し、其の關係の紊亂するのに對し豫防をする。同様に「ギルド」も各管理團の代表者を交換し、相互の難問題を理解し同情ある解決を爲さしめん事を期する。又た此等の「ギルド」代表者には、現在の契約又は默約を變更するが如き提議に對し、自己の代表せる「ギルド」に代はつて賛成を表するの權能を與へられても好いわけである。若し大變更の申出でが有つた場合には、斯く代表者を通じての他の「ギルド」の同意は、其の變更の重大な丈けに中々暇がかゝる。然かし此間に一つ貴重な眞理が窺はれる。——相互間も經濟的調和の無い團體と團體との間に不和



が起れば(現今の産業制度に於ける資本と労働との間の如く)、其の不和の結果として瓦解分散を免れない。之に反し相互間の経済的利害が根本的に調和せるものなる場合は、假令へ其の團體間に不和が起つても、反つて経済的團結を密接にする傾きがある。されば「ギルド」間の不和は殆んど必ず斯かる衝突を最小範圍に局限せんとする新運動を喚起するものであつて、各方面の好意により結局その衝突の原因も排除し得るに至るものである。此の目的を達せんが爲めに、「ギルド」代表者の交換により今後益々密接なる關係を設くるが如きは、確かに其の一方法であらう。而して此等の代表者の職分は、丁度今日の大使の如きものであらう。今日の全權大使は、各國の利害を監視する而已ならず、國際間の關係を親密にし、何處かに不和が起れば之れを圓滿に解決する事に助力するの職分を有するものである。「ギルド」の代表者の地位も亦た斯の如きものであるから、其の地位の重任なる事は明白である。随つて「ギルド」中にて第一流の人物は皆な此の地位を希望するであらう。

然るに「ギルド」相互間の不和は十中八九斯の如き代表者交換の制度によりて解決し得べしとするも、亦た不平のある「ギルド」がその不平を極端まで持つて行くことが無いとは言へぬ。吾人は先きに聯合「ギルド」は最高管理團を設けて居るものと假定して置いた。此の管理團は十分の監督権を有するものであつて、各「ギルド」は不平あるとき之れに訴へ出でる事が出来る。それでも猶ほ解決

がつかぬ時は、各「ギルド」は「ストライキ」をする権利がある。但し其の「ストライキ」の理由は今のうちからは豫想は出来ぬ。

然かし大體から考へると、此の不和といふことは、「ギルド」相互間の關係上、別に重大なことではない。今ま一度先きの全權大使の比喻で行かうなら、現に諸國民の大多數は永久に世間と和睦して居るに拘はらず、其の大使は常に閑暇にはならぬ。永久の平和の間にも、何萬といふ問題は常に大使等の解決を待つて居るものである。その如く、各百五十萬からの會員を有する二つの「ギルド」の間には、全國に亘たる複雑な商業關係もあるから、如何うしても其間に適當な外交機關が起つて來ねばならぬ。そして之れによりて其の複雑な事件を處理して行かねばならぬ。

官僚が如何なる範圍まで「ギルド」に影響するかを一考するのは、多少興味がある。前陳の如く外交機關を設くる事は、官僚主義を増加する傾向があるか、將た之れを減する傾向があるか。吾人は或る論者の如く、一にも二にも官僚主義の咎め立てをする者ではない。官僚主義は必要でない事もあると同様に又た大に重要なこともある。又た官僚主義は獨り政府部内に限られたものでない。聞くが如くんば、鋼鐵「トラスト」で決まつた政策に關し或る問題を作るのに一年半も二年も掛かるといふ話である。其他の商業團體に於ても亦た斯くの如く敏活を缺くことがある。然かし其れが當然



である。然るに、「ギルド」相互間に於ては決して起らない難問題が二三ある。第一「ギルド」制度に於ては、利益抜きであるから、秘密は一切廢して萬事公開とし、「ギルド」間には何に一つとして隠くし立てが行はれない。第二に、生産原料の産地又は仕上げ品の向け先きに關しても秘密がない。第三に、機關は私有ならず、随つて何人にも公開する。故に若干の「ギルド」が相會合するときには、完全に胸懷を披瀝することが出来る。「ギルド」各自の政策ですらも、亦た共通の政策となる。何となれば各「ギルド」は全ての他の「ギルド」に代表者を出して居るからである。

「ギルド」相互間に最も多く協議せらるゝ事項は、賣買せらるゝ商品の様式及び品質の問題であらう。恐らく製造方面の「ギルド」は『吾々は斯く々々斯様の商品を製造する』といひ、之れを買ふ方の側の「ギルド」は『そんなものは欲しくない、斯んなものを製つてくれ』と言ふやうな事があらう。さうすると製造方法に關し澤山な議論が起る。此の時買手の方と製造の方とは、何ちらが正當な判断者であるか。工匠側は實際に需要に適するやうに製産せねばならぬのか、それとも又た自分で最もよいと信ずる様式と品質とを主張せねばならぬか。其の妥協の點は那邊に在るか。恐らく斯かる問題は聯合「ギルド」委員が決定する事となるであらう。

「ギルド」相互間には衝突と議論とを免かれないやうな點が澤山にある。——其の點は時として大きな問題に觸れる事があるから、殆んど原理に關する争論に近い事がある。然らば「ギルド」相互間に於て國家政策のことを形式的に論ずることが有るであらうか。今日のところ、商業會議所は政治上の議論をすることを慎んで居るが、職工組合の會議では忌憚なく之れを論じて居る。吾人の前來の議論は、「ギルド」を以て經濟的時局を支配するものと假定しての話である。故に國策にして若し「ギルド」の經濟的職分に影響し又は是れと衝突するときは、「ギルド」は聯合して之れを問題として認めなければならぬ。然かし乍ら全ての「ギルド」が經濟關係を有する政治問題の爲めに皆な一様に影響を蒙むるものとも限らない。甲の「ギルド」は其の爲めに反つて利益をうけ、乙の「ギルド」は損をするやうな事があるかも知れぬ。然かし「ギルド」は互に聯合して一致の行動を採る方が得策だと考へ、重大な損失又は不便から各成員を保護する如き政策變更を主張するであらう。「ギルド」が各自の團體利益を保護せんと工夫しつゝある間は、又た各「ギルド」の成員の多數が一般原理に於て各「ギルド」を保護する間に、他の一方に於ては之れに劣らざる多數の「ギルド」成員が、自分の政權を行使して「ギルド」よりも廣い國家の立ち場から政治的提議に贊否の投票を行ふやうに成るであらう。「ギルド」社會主義は、「ギルド」の情誼の爲めに公民として資格を忘れしめる如き事はない、此の點は吳々も忘れてならぬ事である。人は相當な物質上の理由からして「ギルド」の一員となつて居



るものであつて、此の「ギルド」を通じて其の物質的利益を保護して貰ふものであるが、其人の公民としての権利は其の「ギルド」の交誼を超越せるものである。本論の初めに於て、吾人は多少詳細に賃銀制度が人をして「勞働的の公民」たらしめること、而して有産階級及び壟斷階級のみが「能動的公民」たるの弊あることを陳べた。故に此の賃銀制度が全廢されたらば、社會の各員は自づからにして『能動的』なる公民と化するであらう。此の事實は、國民の社會的及び政治的生活の上に重要な影響を及ぼすものである。即ち此の事實あるが爲めに、國家の政策と「ギルド」の利害とは互に平均のとれたものに成り、「ギルド」は聯合的の行動をするときにも、其の成員に對し公民としての氣分に反して行動することを強制し得ない事に成るであらう。

今一つ「ギルド」間に於ける特異の現象がある。それは同種の團體の間に行はるゝ共同會議である。此等の會議に於ては、單に各自の「ギルド」に於ける各自の立場を論ずるのみならず、新たな行政上の主義も新發見も、又た實に苟くも經濟的關係さへあれば如何なる問題にても、之を論ずるものである。例へば、各「ギルド」の間には、多數の化學者が散在して居ることであるが、彼等は相會して互に其の經驗を交換し、實地の試験によりて學理を試験し、又た其の化學者としての職分地位を保護し相當の安樂を確保せんが爲めには、有るゆる必要な手段を講ずるものである。且つ「ギル

ド」の行政管理各組織も亦た自づから互に相會して相談をすることであらう。此の組織が甘まく効率をあげなければ其の存在は危うくなる。何となれば産業的「デモクラシー」の世の中では、無能なものやグヅ／＼する者は何んでも片つ端から撲滅されて了ふものである。此等の行政部の役員としては、時々會合して意見の交換をすることは大に役に立つ。それは單に能率の高かい標準に達せんが爲めのみならず、各自の地位を安固にする上にも役に立つのである。此の他「ギルド」内の各地位各職分を調らべて其の一々につき相互の接觸と相互利害の共通とを指摘することも出來やうが、今は以上を以て足れりとし、之れで大體余の言はんとするところを髣髴せしめ得たものとして置かう。

#### 第十四章 「ギルド」實現の途

勞働團體が、賃銀制度の眞義を十分に理解してくれば、職工組合の目的及び方法は全たく一變するに至るであらう。これは吾人の信じて疑はざる所である。蓋し苟くも賃銀制度の奴隸たることの本來如何に卑しむべき事なるかを認めし者は、此の制度を永續せしめんが爲めに其の修正や變更を企てるのに貴重な時間を費やす氣は起るまいと思はれる。若し賃銀制度を是認すること其の事が一の卑劣な行動であるとせば、而して又た屈從といふ事が文明人の本能と理性との嫌惡する所である



とするならば、將來の産業闘争は賃銀増加を目的とせず、反つて賃銀廢止を目的として行はれねばならぬと斷定することが出来る。多數の賃銀取得者が異口同音に、吾等は最早や賃銀の爲めに働くことを欲せず（賃銀が高くても何んでも）と切つぱり言ひ放てば、此の時から既に産業革命は始まつたわけである。吾人の結論は即ち斯うならざるを得ない——『賃銀制度を其まゝにして置いては、何等の産業革命も行はれるものでない（随つて何等の政治的革命も行はれるものでない）と。』吾人前來の議論からは今一つ結論が出る。——『賃銀制度と組合制度とは互に相矛盾す』と、言ふのが其れである。組合員は組合員だから賃銀など貰ふものでない。彼れは自分の功勞に對する俸給又は報酬こそ貰へ、彼れは自から賃銀奴隷たることを肯んずるものではない。其の報酬は、競争値段で決まるものでない。彼れは絶対的失業に委棄せられる筈はない。これが賃銀と組合制との相容れざるところである。この矛盾は、組合制と個人的資本制度との間にも存し、又た組合主義と國家主義との間にも存する。若し富の生産者が其の生産事業に於て組合員と成るなれば、永久に其の賃銀奴隷の境涯を蟬脱せんことを欲するに至るや當然である。

吾人は前來餘りに明細に將來の發達を説き明かした爲め、或は吾人を以て「ユートーピヤン」とする者があるかも知れぬ。然し乍ら、吾人のいふ事には少しも「ユートーピヤン」然たることは無い。其の確實なること「ユークリッド」の幾何學の命題の如きものがある。然かし吾人にして若し今の賃銀制度から、一足とびに國設組合へ移つられるものゝ如く考へ、現在の資本制度と組合制度との間に何等か中間の制度を設け、夫を以て理想に進むの道を講ずることを必要とするならば、吾人自から生粹の「ユートーピヤン」たることを證するものである。賃銀制度を一夜にして「ギルド」制にするやうな魔術師の棒は有る筈がない。其の進化は一步步と進まなければならぬ。運動は漸進的たるの必要がある。急激發展の障礙は多くして且つ大きい。先づ其の第一の障礙は、資本主義の有力にして労働組織の微力且つ無能なことである。

労働者にして一度び、賃銀制度の永久的屈從を意味することを認め、之れを片付けて了はんことを決心し、賃銀値上げとか、労働時間短縮とか、何んだとか彼んだとか言ふやうな、さういふ賃銀制度の改正のみを目的とする部分的「ストライキ」を増加するやうな事をせず、今後は賃銀全廢論の基礎に立ち、以て産業闘争をやるやうに成れば、労働者に對し資本家は利益分配と出かけて来て、此の手で自己を救はふとするであらう。然るに、利益は商品としての労働に對し支拂はれた價格と、出來上がった生産物との交換價值との差から生ずるものである。而して此の交換價值は、(a)同じく賃銀制度を維持せる他の産業と、(b)銀行の課する金貨標準値との二つによりて定まるものである。



故に、資本家は今後労働者に贈賄して此の賃銀制度を扶持し、少なくとも之れを繼續せんとし、現在の商業方法から浮いてくる利益を分配して労働者への埋め合せにしようと言ふであらう。資本家が果して、競争値段で労働者を備ふのは自分等の根本的権利だと主張し、此の主張に基づいて飽くまでも戦争をし、労働者をして永久に賃銀の奴隷とするが如き態度に出るか如何うか、之れ甚だ疑ふべきである。素より富の生産の上に於て労働者が今まで以上の分配を得んとする主張は容れられるであらうか、資本家は別に乙矢を控へて居る。彼れは職工組合に向つて、汝等の組織は未だ不完全な點が二つあると言ふであらう。其の一は、職工組合が技術者、専門家、科學者を加入せしめない事である。然るに此等の人々は富の生産上に甚だ重大な任務を有するものである。第二に、職工組合の組織に缺陷がある爲め、各業に於ける賃銀労働者の大多數を加入せしめる事が出来ない。果して然らば、資本家も、此の少數に過ぎざる組合員を仲間とし、大多數を構成せる他の二方面の者を排除することが、如何うして出来やう——と。ところが其れは出来る。資本家は「なし崩し」で行く。彼れは職工組合員には特別の便宜を與へると言つて組合員を騙ます。所が其の特別の便宜といふのが實は名ばかりである。組合員以外の者も加へなければ名ばかりに成るのである。加入しない賃銀労働者、即ち組合外のもものは、資本家から恩典を蒙むるといふ組合員から扶助されるか、

左もなくば一緒に加入して賃銀値段を下げる事に成る。そのみならず、一方では技術者が不相變、資本家の忠良なる婢僕となつて居る。斯んなわけだから、労働者も餘程氣を着けなければ、妙な羽目になる。即ち組合には這入つたが、賃銀制度は永續する。そして使用料や利子や利益は少しも減らない——といふ事に成る。

賃銀制度の意義を了解した労働者は、僅かに第一の教訓を覺えたに過ぎない。彼等は第二の教訓まで覺とらなくては、資本家の良から遁がれる事は出来ない。其の第二の教訓とは、使用料と利子と利益とを排除しなければ經濟的解放は六かしいと言ふ教訓である。生活標準を向上するの效力もないやうな、報酬形式の變更ぐらゐるの事では、何にも大した効果はない。之れ畢竟瞞着手段である。苦である。然るに、斯く生活を向上するには、金が入る。其の金を引出すには使用料と利子と利益とから引き出すの外に道は無い。生産費用の増加(利益分配の擴張の必然的結果たる)は、今日現在の賃銀の下落問題を更らに甚からしめるに終はるものである。現代の經濟に於ては訓練ある而して自重心ある産業的「デモクラシー」にも、使用料取りや壟斷階級にも、共に這入り込む餘裕がない。賃銀制度を維持せざれば、利益壟斷は行ふことが出来ない。爰に又た宜しく記憶せざる可らざる事がある。經濟には生産及び分配の費用の減少の必要こそあれ、其れを増加させる必要は無い、と言ふ事



である、故に、労働者は壟斷者に向つて、『君よ、君か又は余かの中、何れか一人は去らねばならぬ。然るに余は留まつて居なくてはならぬ。君が居なくても世界は成り立つて行けるが、吾輩が居なくては一日も立つて行かぬ』と言はざるを得ない。今夫れ労働者又は其の一部分をして、深かく使用料利子及び利益に食ひ込まないやうな利益分配案に均霑せしむるときは、反つて生産費を増加するやうな結果になり、少しも問題の解決にはならぬ。然るに、若し資本家が『切り崩し』(ヂバイド・アンド・コンカー)の方法で行かうなら、労働者も其の手をやる。斯くて壟斷階級が一たび労働者から絞ほられて居るぞと氣付くときは、使用料を絞つたり、又た其他の自然増收の形式によつて、極力自分の利益を保護するの道を講ずるであらう。然るに、壟斷階級の自然の味方は使用料と利子とである。壟斷階級が労働者の『切り崩し』をやる事が出来れば、彼れは自己の經濟上の仲間の保護もするであらうが、若し労働者が之れにも屈せず應戦せんか、壟斷階級は其の仲間を犠牲にして顧みず、身を以て遁がれんとする(Sauve qui peut)であらう。蓋し其の仲間は眠つて居る。眠つて居るものは見殺しも己むを得まい。眠つて居る者に比すれば醒めて居る資本家の方が、經濟上には有用な人物である。

労働者が新經濟の第一及び第二の教訓を十分に覺えた上は、其の對戰法は明瞭になる。まづ第一の教訓に従つて労働者は労働制度の破壊に取かゝり、今後一切賃銀の爲めに働くことをせぬと言明する。——即ち商品として自己を賣ることはせぬと言ひ放つ。それから第二の教訓に従つて、労働者は、現に眠つて居て働らない者共の「ポケット」に這入る餘剩價値は、すべて今後自分で取つて了ふことに、一致の行動を取るであらう。此の目的を達せんが爲めには、労働者は先づ其の團結組織を改めなくてはならぬ。労働者は相當に禮を厚うして、専門家とか、化學者とか、「マネジャー」とか販賣方とか事務員とか言ふやうな「頭腦」者を顧問とせねばならぬ。又た今日食ふや食はずの境遇に置かれて居る大多數の組合不加入の労働者をも、此の際改めて自己と同列に入れなくてはならぬ。基督の結婚式の喩への如く、婚姻の席に列なるやうに道に出で、人を拉し來たるの態度を採るべきである。

賃銀制度を全廢し、引いて利子使用料及び利益を全廢せんとする戰爭に於て、労働者にとり第一に必要なことは、戰列の亂れざらん事である。知識階級より成る左翼も、無組織不熟練の労働者より成る右翼も、一糸亂れざるの陣列を保持すべきである。然かし、若し頭腦の人と筋肉の人とを打つて一丸とする事が出来れば、——今少しく精確な言葉でいへば、頭腦労働者と筋肉労働者とを唯だ一つの組合組織に入れる事が出来れば、之れ既に「ギルド」の形式(その實質とまでは行かずと



も)を達したわけに當たる。労働者は壟斷階級との談判に際し、此の全軍一致の行動をとり、何んな事があつても陣列を亂ださないやうにせねばならぬ。換言すれば、此の胚胎的「ギルド」は、實に全ての談判を徹底させるのみならず、自から一の團體として、壟斷階級から使用料と眠れる資本とより生ずる利得悉皆を奪つて了はねばならぬ。この一事は非常に重要な事である。何となれば、個人として、なく團體として、労働者が使用料及び眠れる資本の分け前を受け取るまでは、賃銀制度は繼續するからである。資本家と其の傭つて居る個々の労働者との間でなく、個々の資本家と胚胎的「ギルド」との間にこそ、組合を結ぶ必要がある。此の法則を嚴格に守るに非ざれば、個人的資本主義は一層有力になること、猶ほ南部首府サウスポート瓦斯ワス會社、又は東北沿岸の「フハーネス」組合の如くであらう。斯の如く重要な點は、何ほど力説しても足らぬ位である。今後の新經濟にとり根本的に必要なことは大なれ小なれ一切個人としての資本家は作らぬ事である。製造又は分配の事業に従事せる個々の被傭者の間に、利益(消費者よりでなく、使用料や利子から生み出されたる)を分配することは、たゞ益々多數の小資本家を殖やすばかりである。又た爰に忘れてはならぬ事は、此等の小資本家は、皆な自己の奮勵努力によらず、其の職業上の組織の團結力(彼等自からは其中の少數黨に過ぎない)によりて資産を造つた者であるといふ一事である。彼等の富を増したものは團結

の力であるから、其の富は團體に歸すべきである。利益分配にあづかる被傭者等は、完全に組織された労働ならば、自から特權ある經濟上の地位を占むる事には却つて同意しないものだと言ふことを、久しからずして發見するであらう。然かし之れと共に又た、彼等は永久の利害を「ギルド」と共にすべきものであつて、壟斷階級と共にすべきでないことを、發見するであらう。蓋し、團體といふものを背後に背負つて居なければ、折角利益分配にあづかる被傭者も、他の被傭者同様になんどき失職者となるかも知かり難い心配がある。あまり會社の決算報告を八釜しく言ふ者は、邪魔になるから追ひ出される機會も多い。然るに彼れ若し金もあり組織も完全せる如き「ギルド」を背後に背負つて居れば、其の地位も可なり安固なものになる。

今ま労働者が團結を纏とめて了つた後に於て、先づ第一に如何んな戦争をするかを想像して見よう。こゝに一年につき株主間に十萬磅の配當をする一大産業企業があつて、其の委員會長と總支配人との側に「ギルド」の代表者が侍つて居ると假定しよう。

議長、諸君よ、諸君の御要求は如何。

代表者——吾等の今日こゝに集まつたのは、貴下の會社の財政につき論ぜんが爲めである。之れは特に貴下の被傭者等に關係があるからの事です。



議長、——諸君は吾々の支拂ふ賃銀に不満足ですか。

代表者、——貴下は標準率だけは御拂ひに成る。然かし吾々は賃銀値段では働らかない事に決定しました。

議長、——諸君の變更又は改正の方案は如何です。

代表者、——第一、貴下の只今傭つて居られる労働者は、今後は仕事があつても無くても解雇しない事とせねばならぬ。

總支配人、——それは有益な制度でない。本社は諸君の會員に其の勞力の代を拂つた上に、諸君の證明次第組合員割増金をも拂つて居る。

代表者、——左様、今日までは吾人も吾人の労働を商品として賣りました。貴下等は其れを市價で買つた。而して貴下等が吾人に支拂ふ額と、仕上げた生産品を賣つた高との間の差を以て、貴下等は一年十萬磅の配當を株主に拂つて來た。吾等は此の度び貴下の會社の事に直接干渉せねばならぬと言ふ決議をした。吾々は個人としても貴下等の事業の行り方と利益の分配とに關係がある。若し今後引つゞき吾人の労働を商品として賣るときは、貴下等の利益には與かり關しないであらうが、商品として労働を賣らぬと決めた以上は、吾等の身體と労働とを貴下等と對等の地位に置かねばならぬ。故に今後は貴下等と組合を始めの事になる。組合では事業をする爲めには、先づ絶對的の勤

續保障が必要である。

總支配人、——業績の良否に拘はらず解雇は出來ないと言ふのか。

代表者、——「ギルド」は自己の利益の上から考へても、組合員の業績及び伎倆の高かい標準を落とさない様にしなければならぬ。會社側にて若し少しでも小言が出るやうなら、吾等引うけて何とか致します。必要の場合には御迷惑に成る者を訓練してやります。

總支配人、——よく分りました。が然かし會社には傭主があります。こちらの責任を諸君に一任は出來かねます。

代表者、——會社の事業は貴下と吾等とが組んでやる仕事ですから、貴下も傭主なら吾等も傭主です。

議長、——組合員には如何なる條件で成られますか。

代表者、——吾等は労働を提供し、其の代りに利益の半額を戴きます。

議長、——君は冗談を言つて居るのではないか。そんな事をすれば吾等の配當は半分になつて了ふではないか。



代表者、——極めて眞面目です。會社の株主は十萬磅の働きをしたとは思はれない。依つて吾々は今度五萬磅を貰ふ事にして頂きたいのです。其の小切手を吾が「ギルド」拂ひにして書いて貰へれば結構です。

議長、——これはしたり。何といふ専制だらう。

總支配人、——會社の方でも、被傭人と利益分配の相談にはあづかつて好いが、君のいふことは途方もない話だ。

代表者、——吾々は會社の被傭人相手の私しの取極には不賛成です。被傭者相手ならば吾々自身でやります。吾々の申出でを途方もないとは何事です。吾々は甚だ相當の申出でだと考へて居る。今後五年も経てば、此の上の利益分割をやる積りです。

議長、——本社の株主等は多くは寡婦や孤兒です。

代表者、——會社の株主中に一人の寡婦があれば、吾々の間には十人も居る割りに當る。貴下方の間に一人の孤兒が居れば、こちらには十人も居る。貴下がたの御かけで、労働者は子澤山ですからね。

總支配人、——値段改正が出来るか如何うかを考へて見る暇を與へて貰へやうね。

代表者、——それは暇つぶしと言ふのです。吾々の方では少しでも物價を引上げる事には不同意です。何となれば、労働者が犠牲となるばかりですから。

總支配人、——それはよく分かつた。然かし會社では大分輸出もするし、そつちの方で何とか成りさうだから。

代表者、——吾國からの輸出品が總體に高くなれば、食料品とか原料とかの値段が増すばかりです。吾々は物價引上げどころか、反つて引下げをしなければならぬ。

議長、——何を犠牲として？

代表者、——使用料と利子とを。

議長、——御注意いたして置きたいが、私の今日こゝに出て居るのは、株主側の利益を保護するのが主要の目的ですぞ。

代表者、——御社の株主は五萬磅貰ふがよいか、それとも一文も貰へぬが好いか。

總支配人、——諸君の申出では。當社の事業の資本價値を半分だけ低下しようと言ふわけに成る。それは株主側に對する殘酷といふものです。君等は株主に對する思ひやりは無いから仕方がないとしても、それでは事業の擴張は今後覺束ないですぞ。會社の資本供給の源を斷ち切られては、



商賣の手を擴げる事が如何うして出來やう。

代表者、——それは御相談に應じます。吾々の方でも何とか御相談に乗りませう。吾々も仲間になつた上は、喜んで共力分勞を致します。

總支配人、——あちら立てれば、こちらが立たぬ。一體私が此所に參つて居るのは、事業の指導をするのみならず、株主等の保護をする爲めです。此の二つの職分を持つ吾々は、君のいふ事を聞いて居ては何方か一方の職分を棄てねばならぬ事になる。

代表者、——若し貴下が株主と結托する方がよいと思へば、さうなさい。十分貴下等の後任としてやつて行ける人物が一人や二人は何時でも居ますから。然かし吾々の方では別に貴下に對し何等の不平もない。其まゝ勤績なりたくば、さうなさい。

議長、——諸君の革命的提議を一考せんが爲めに、株主の臨時會議を開きませう。其時まで私は一言も申しませぬ。私は從來吾々の間に存在した良好なる關係が傷つけられるのを悲しみます。一言御注意いたして置かねばならぬが、株主等は多分諸君の提議は拒絶しませうぞ。

代表者、——是非とも株主を召集して下さい。無論御承知の事と思ふが、吾々は株主側が何といはうとも少しも氣にかけません。一ヶ月内に吾々の提議が承認されなければ、工場は閉鎖して下さいませう。

「サミュエル・ジョンソン」は常に「ホウイツグ黨」(民權黨)を散々やつつけたが、恐らく此の議論では吾人は壟斷階級を負かしたであらう。労働階級にして若し毅然たる態度を採るならば、そして「ギルド」代表者が「ギルド」のみならず關係者全部の團結的權威を以て論議するならば、全く前陳のやうな事に成るであらう。前陳の豫想には少しも誇張はない。

吾人若し此の豫想が大體に於て當つて居るものとせば、爰に澤山な問題が起つてくる。第一、「ギルド」は敵から奪つた金を如何する積りか。「ギルド」會員は如何に之れによつて利益を得るか。之に對し吾人は斯う應へる。抑も「ギルド」は其の胚胎時(吾人の前來の議論は「ギルド」の初期について言つて居るのである)に於ても、既に民主的施設であるから、全會員は其の財源を如何に使用したれば好いかに就いても、素より承知して居る筈である。然かし何よりも先づ考へらるべき事が一つ二つある。其一は、軍資金として巨額の費用を割當てる事である。例へば前陳の場合に於て、假りに株主等を始め其の輩下のものが、決然として争鬭の決心をしたとせよ。又た特殊産業の傭主階級(互に利益關係を一にせる)が此の鬭争に加入したと假定せよ。此の時は「ゼネラル・ストライク」(總ストライキ)の外はなからう。『賃銀制度の過渡』の章で吾人は今後起るべき「ストライキ」



の形式を概説して置いた。此の如き大規模にして天下分け目の争ひたる「ストライキ」をして、有終の美を濟さしめんが爲には、組織と指導との完全ならん事を要するは勿論、亦た巨額の軍資金を要するであらう。故に組合の主義が一般に承認せらるゝまでは、——即ち貸銀制度に代つて組合主義が必要なことを世人一般の認めるやうに成るまでは、——「ギルド」も巨額の資金を要するものである。然かし何等かの組合の形式が設定された後に於ても、産業的機關を組み直ほし、之れを擴張するに又た大なる財源を必要とするであらう。前陳の議論中に「ギルド」の代表者が總支配人に向つて、事業擴張の爲めに金（又は之に代はるべきもの）を出すのは少しも吝しまぬ旨を約束した言葉が見える。此の「金に代はるもの」と言ふのは、無論他の「ギルド」の間に於いて相互的便宜を講ずるの謂ひであらうが、實際の金も恐らく必要であらう。

第二の問題——會員は如何にして利益を得るか——に對する答は簡單である。第一、會員は失業をしないと云ふ保證が得られるから利益である。それだけで既に無限の利益である。これあるが爲めに競争賃銀値段などは無くなつて了ふ。第二、「ギルド」會員間に毎年基金の分配を行ふことが出来る。之れを本として、前陳の如き軍資金にも充て、又た前陳の事業發展の費用にも充てるのである。

#### 第十五章 農業と「ギルド」

農業に關する書籍は汗牛充棟も言だならず、農業科學、農業經濟、農業的商業、等に關し、大卷小冊、山の如く出版され、或は面白きもあり面白からざるも有り、或は輕快なるあり鈍重なるあり、或は偏見に満てるものなど、迎も數へ切れぬ位にある。毎日また毎週、新聞に出る市場記事、農夫の集合、其他農業關係の時事も、随分澤山なものである。全すべて此等の無限に印刷さるゝものに共通の點が一つある。それは、農業労働者の情態を靜的スタティックと考へて居る事である。成るほど今日の農業労働者は、吾が大英國の一千五百萬の賃銀奴隷中にて最も靜的なものである。而して其の靜的なだけに、之れが最も始末に行かぬやつである。愚なる政治家なるものあり、人の耳もとに來て、爲めにもならぬ事を聞かせ、有害なる刺戟を與ふること、蚊よりも有害である。其の刺したあとから膿潰する腫物が出来る。之れを名けて「單一税」(シングル・タックス)とか、「自作小地面制度」(「スモール・ホールディングス」)とか、「最低賃銀制」(「ミニマム・ウエージ」)とか、「労働者住宅制」(「レーパライズ・カテゴリー」)とか言つて居る。然るに彼等は皆な、農業労働者は靜的なものであつて、終生土に着いたものである。再び空に飛び上がる事の出来ない「イカロス」(「イカロス」は希臘神話の人物である。「クリート」島より翼に搏ちて逃れしに、高く飛び上がリ過ぎた爲め、其翼を支へて居た蠅が日光に溶けた爲め、終に多島海中に墜ちたといふ。其所今に「イカロス」海の名がある。)であるとき考へて居る。



労働黨及び職工組合は、農業労働者を成るまゝに放任して顧みない。彼等にして若し農業労働組織の費用として二十五萬磅も出せば、必ず自分等にも其だけの利益はある。然るに労働者中の最賢明なる人たる此の「ホツヂ」(Hodge)氏(田夫野人氏)は、都市労働者の仲間から除け者にされて居る。農業労働者は「キムメリイ」(Cimmerii)——(太古常闇の中に住みしといふ怪しき民族)である。此の常闇の世界には誰れあつて救済の手を伸べてやる人がない。然るに此の農業労働者あればこそ、吾人の食物も得られ生命もつないで行けるのである。地主には農業税の半分を負担してやり、大百姓には法規や慣習によつて地主同様の獨立を得させてある。それから又た都會に育つて消費する一方の者や、都會で食ふや食はずの境遇に居る者には、「土地に歸へれ」といつて土地を授けてやる。獨り「ホツヂ」氏(田夫野人)氏のみは、誰れあつて顧みる者が無い。彼れは此の狂曲の裏面に委棄されて居る。然るに土を耕やし、種子を蒔き、五穀を刈り入れ、灌漑を爲し、溝渠を浚渫し、籬根をかり、小屋を葺き、羊を養ひ、小羊を育て、牛を飼ひ、馬を馴らすのは此の「ホツヂ」氏であつて、牛乳を搾り、鶏を飼ふのは此人の娘である。牧場であれ耕地であれ、仕事をするのは「ホツヂ」氏である。否な忠實に仕事をして世に忘れられるのは此の人である。

農場作業には甚だ高度の熟練を要する。然らば何が故に然かく報酬が低いのか。今假りに農業労働者に支拂はるゝ普通の賃銀高を一見しよう。農業統計によれば――

北 部 地 方	平均現金 一週當り	平均働き高 一週當り
「ヨークシャ」「ランキャシャ」及び「チェシヤ」	一六 志五片	二〇 志一〇片
西部及び北部中央諸地方	一五 二	一九 八
南部中央諸地方及び東部諸地方	一四 四	一七 七
東 南 諸 地 方	一五 一〇	一八 九
西 南 諸 地 方	一三 一一	一七 四
「ウエールズ」及「モンマスシヤ」	一三 九	一八 〇
蘇 克 蘭	一四 二	一九 七
愛 克 蘭	九 三	一一 三

吾が産業中にて最も大且つ貴重なる農業に従事せる高級熟練の労働者に對し、斯くも僅少なる賃銀を支給するのは如何うした譯けか。農夫が「ハインド」(下男、田夫)及び「サーフ」(農奴)の境涯から「ウイレーン」(賊奴)となり、封建制度を経て今や額に汗する賃銀労働者と成り果てゝ居る史的沿革の跡を辿るのは、吾人本論の趣旨でない。然かし一言の力説を要するものがある。――他



なし、農業は吾邦の最も古くから傳はつて居る産業だと言ふ一事である。英國の農業は「ノルマン」時代から「ブランドヂネット」「チュードル」「スチュアート」諸家を経て今日に傳はつたものである。其の古るきことは、「セフィールド」「バーミンガム」の名よりも古く、「マンチエスター」「グラスゴウ」なども、之れに比すれば新らしい。此の如く長い幾世紀の間に、慣習は深く土中に根を下ろし、全體の組織は結晶化した。報酬低減の法則は此所にも働らいた、然かのみならず使用料が富豪政治の方法と同化した。斯くて勞働は常に苛斂誅求を蒙つた。然かし大百姓は榮へて居る。差配も得意である。獨り吾が「ホツヂ」氏のみが誅求をうけて貧乏し、儂麻斯に罹り、どどの詰まりは貧民院に送られるのが落ちであつた。

自由貿易で大英國にどしどし、食料品が入つて来る。之れが爲めに英國國民は自國の農業の根本的價値に對し盲目となる傾きがある。今日では國內の農産業が無かつたら國民生活は如何なるかと想像するのにも骨の折れる位に、然かく農業は有りふれたものに見なされて來た。余が今ま此所に書いて居るのは「カリビヤン」海に臨める一小都市である。此の都市は一萬四千の人口を有し、其中三百五十人は純然たる白人であるが、残りは皆な土着の者と黒奴との混血である。家の周圍には深い林と「マングローヴ」の生えた沼澤地がある。此所の人民は殆んど全部桃心木の販賣で食つて居

る。桃心木は所々方々の川から筏で下だすのである。今日は丁度基督降誕祭の日であつて、桃心木の樵夫を備ひ入れる季節に當つて居る。樵夫等は一年間備はれる契約をして數ヶ月分の賃銀を前借りする。故に現在彼等は、盛んに「ラム」を飲むのに此の金を使つて居る時である、狭まい通りには、鋪石もないのに「ゴロ／＼」と酔つて居る黒奴や「カリブ」人や「クローリー」や混血兒などが居る。附近の監獄には、酔つて居る間の喧嘩で人を加害した者が一杯入つて居る。今朝の食事に茶を喰んだが、之れは英克蘭から輸入したものである。又た朝食の「コンデンスミルク」は紐育からの輸入、罐詰の牛の舌は市俄古からの輸入、鶏卵は「ニューオルレアンス」からの輸入、果糖糕は倫敦からの輸入である。今夜の晚餐に食べる筍の罐詰豚肉は市俄古からの輸入、牛酪と馬鈴薯と豆と豌豆と燕菁と米と珈琲とは「ニューオルレアンス」「モービール」(米の「アラバマ」州)及び紐育からの輸入である。此の土地で手に入るものは魚類のみである。然るに此の地方は地味も相當に肥沃であつて、奥へ數哩も這入れれば、珈琲の實がハラ／＼と地に落ほれて居る。甘蔗などは幾くらでも生える。牧畜に適する地もある。米はよいのがとれる。數年前の如きは日本の政府から試植見本として二百五十「サック」を注文して來た位である。事によつたら二萬五千「サック」からの注文も來るであらう。斯んなわけで、此所の人たちは、土地で造られる農産物を造らず、之れを輸入するのに血



の出るやうな金を拂つて居る。

米國や大英國の輸出者が法外の値段を取つても、此所の人たちは如何んともする事が出来ない。これは又た如何うした譯けであるか。つまり此の地に農業が無い爲めである。然らば何故に無いのか。働らく者が居ないからである。農業の基礎は（何業でも然うだが）労働である。政府は世界中探がしまわつて労働者を求めて居る、大英國の農業労働者の支拂はるゝ賃銀よりも遙かに高い賃銀を、黒奴にも苦力にも「シーク」族にも「アフガン」にも支拂つて居る。

此の地の事情を見て思ひ起すのは、大英國の農業情態である。農業は經濟上より見て「ギルド」組織に適して居る。然るに農業労働者に組織團が無い。それが爲めに「ギルド」組織も出来ない事になる。

前にも一言せし如く、大英國の農業労働者の組織團結を作るには二十五萬磅を要する。然かし之れだけ出して職工組合の損にはならぬ。一九二〇年には職工組合の積立金が五、二二二、五三九磅に達し、一人當り三磅十志二片に當つて居た。二十五萬磅といへば、此の積立金の雜つと二十分の一である。即ち一人當り三志六片の負擔である。農業労働者の賃銀の低下されて居るのを放任して置く事は、都市に住む賃銀労働者にとりては二重の損である。——（一）まづ廣い地方一帯に於ける

世間一般の賃銀率は、其の地方にある都市に於て支拂はるゝ賃銀の上に影響する。（二）農業労働賃銀が低い時は、若い者は都會に集まり、益々競争的に賃銀値段がせり下けらるゝ勢を助長する。今夫れ、二志六片は、週に割つて僅かに一片以下である。若し田舎の農業労働者が賃銀市場に其身を賣るの必要な境涯に置かるゝときは、都市の賃銀労働者は、爲めに一週數片の利益をうけるであらう。職工組合が眞面目に農業労働の組織を企てる事をしないならば「ギルド」が緊急に此の任務を引うけねばならぬ事と成るであらう。

蓋し「ギルド」は大規模の經濟的組織である。食料品の統制及び供給の如き大任務は、此の如き大規模なる經濟組織に於て引きうくべき最重要の任務である。彼等にして若し市俄古の鑛業の資本家や、世界各地の小麥泥棒どもから生殺與奪の權を占められて甘んじて居るやうならば、之れ愚を通り越して罪惡である。（恐らく「ギルド」の起る頃までには、加奈太にも小麥買占屋が起るであらう）。されど以上よりも重大な理由がある。——土地の正當なる分配と、土地の經濟的利用とは、産業革命の必然的結果として生ずるものである。——といふ一事である。労働を獨占し、労働を商品として賣ることを拒絶する「ギルド」が起れば、土地を私有せる大身代の者は破壊し、慰みに土地を持つといふことは、意味を爲さなく成るであらう。此の時に當り、其の土地を開拓し、又は之れ



を經濟的に利用するといふ事は、「ギルド」の責任となるであらう。「ギルド」が食料品の消費を統制する以上は、其の生産をも統制せざるを得ない事に成る。然るに此の如く「ギルド」組織が國家に網の如く廣がつて來た英國が、賃銀奴隸制度で出來て、今日既に無用となれる土地制度を保存するといふ事は、矛盾である。「ギルド」の會員は折角甘まく革命をしたのに、矢張り舊制度の下で生産さるゝ食料品を食はせられるのは、如何にも心苦しくて、食ふ物も喉には通ほらぬ感じがするであらう。

今日の土地制度は既に用済みに成つた無用の長物である。之れより以上は進みやうの無いものである。一八五七年現在の調によれば、耕地面積が四七、八九〇、〇〇「エーカー」である。人口は年々に増加し食品に對する需要は増加するに拘はらず、一九一一年の耕地面積は四六、九二九、〇〇〇「エーカー」である。聞くが如くんば、耕地を牧場にかへた方が利が多いといふので耕地面積が斯くも残つたと言ふ説もあるやうだが、之れは本當でない。一八九七年現在では、農業のみに使用する馬と、種畜の爲に飼ふ雌馬と野飼の馬との統計が、二、〇七〇、〇〇〇頭であつた。一九一一年に其の頭数は減じて、二、〇三三、〇〇〇と成つた。同じく一八九七年と一九一一年との間に、牛は一、〇〇四、〇〇〇頭より一、八六六、〇〇〇に増加した。羊は三〇、五六七、〇〇〇から三〇、四八〇、

〇〇〇に減じ。豚は、三、七二九、〇〇〇から、四、二五〇、〇〇〇に増加した。これは恐らく、愛蘭の土地制度の一變が原因であらう。翻へつて穀類の産額を見よう。小麥は五六、二九五、七七四「ブツセル」から六四、三二二、四五六「ブツセル」に上ほつた（同じ年數の間に）。然かし之れは例外の豐年の爲めであつた。一九一〇年の如きは五六、五九三、四三二「ブツセル」であつた。此等十五ヶ年間のうちで九ヶ年間は平均收穫が、六〇、〇〇〇、〇〇〇「ブツセル」以下になつて居る。一九〇四年には三七、九一九、七八一「ブツセル」であつた。大麥は一層みじめである。一八九七年には、七二、六一三、四五五「ブツセル」のものが、一九一一年には、五七、八〇三、二一六「ブツセル」となつた。燕麥は、一六三、五五六、一五六「ブツセル」から一六二、九三三、三三六「ブツセル」に下がつた。蠶豆と豌豆とは、一一、九〇〇、一五七「ブツセル」から、一一、四四七、一一二「ブツセル」に下がつた。馬鈴薯は少し良くて、四、一〇六、六〇九噸から、七、五二〇、一六八噸に上つた。之に反し、蕪菁と瑞典蕪菁と「マンゴルド」は、三七、一六四、六七三噸から、三〇、八八五、一一二噸に下がつた。枯草は、一四、〇四二、七〇三から、一一、六五六、四七一に下がり、忽布は四一一、〇八六「ハンドレッドウエイト」から三二二八、〇二二「ハンドレッドウエイト」(ハンドレットウエイト)は十二貫五百四十七匁五二に低下した。勿論此等の穀類青物其他の收穫は季節によつて差等がある。然かし以上の統



計を見て、此等の收穫が人口の増加に従つて増加すべきに拘はらず、つとして居ること文は明白である。

此の問題から澤山な農業専門の問題が起る。然かし吾人は其んなものを論ずる必要はない。其の實此等の専門問題は吾人に關係がない。何となれば「ギルド」にとりては、労働を獨占する事である。従つて吾人の仕事は、農業上の賃銀奴隷制度を支配せる條件を考察するを以て足れりとする。「ギルド」が農業問題に入らんとするには、先づ農業労働者を糾合し、次ぎに之れを現代の實際と適應せしめることが必要である。勿論、吾人と雖も、農業労働者の甚しく保守的なることを知つて居る。然かしあのやうな安い賃銀を貰つて居ては、誰れとて保守的ならざるを得ないではないか。勿論吾人は教育の力により能率ある農業を實現するやうにしなければならぬ事も心得て居る。然かし賃銀の低い。衣食の粗末な農業労働者——その讀むものとは、聖書並に「ムーディー」及び「サンキー」の讚美歌に「ムアア」の年中暦だけであるやうな——者に對して、如何に教育を施したとて何の役に立たう。吾人はこんな事は百も承知である。それに拘はらず吾人の第一にやらうとするのは、改良農耕法でもなければ、新課税法でもなく、住宅改良でもない。却つて農業労働者をして有效なる職業組合を組織せしめんとする事である。

一八八一年現在調では、農業従事者の總計は二、五七四、〇三一名であつた。此中には樵夫も園藝者（庭師も其外のものも）苗師も、種子屋も、花造りも、含まれて居る。一九〇一年現在では、此の數字が二、二六二、四五四となつた。——即ち二十年間に於て約三十萬人からの減少である。然るに此の二十年間に、英國の人口は三四、八八四、八四八名から四二、四五八、七二一名に上つた。——即ち二十一「パーセント」の増加である。此の人口の自然増加から考ふるときは、農業労働者の數も増加した筈なのに、斯く事實の上で減じて居るのは、之れ即ち此の二十年間に七十五萬人からの男女及び兒童が農場を去つて競争賃銀市場の人となつた證據ではあるまいか。農業を止めた者の數は三十萬人であるが、吾人は人口増加に比例し農業労働者の自然増加數は五百五十萬人なるべきことを考へて置かなければならぬ。然るに老幼合せて五百五十人が農業に入つて居ないのは、農業事情が悪い爲めである、隨つて彼等は田舎を去て或は外國に移住し或は都會に蘭集したのである。二十年間に七十五萬人といへば、一年には三萬七千五百人である。此の如く多數のものが年々滔々として賃銀市場に入りこむのに對し、職工組合は黙過して居られるであらうか。政治に關係せる老輩は、單一税とか自作小地面制とか言ふやうな「ホーカス・ポーカス」(手品)をやつて、此の滔々たる大勢を防止する事が出來ると考へて居る、政治運動を主張する労働黨員は、初めから馬鹿であ



ちから、何んでも信ずる。然かし労働指導者中の比較的若い連中は、政治的幻想を看破して居るから、有效なる労働組織のみが経済的解放の第一着手たることを理解して居る。

土地と農業との経営を誤まり、之れを徒費暴殄する地主等に對し、年々二億萬磅の大金を拂ふことを続ける理由が那邊にある。國民は寧ろ二代つゞきの終身年金でもよいから直接土地を買ひ取つて、之れを農業「ギルド」に引渡した方が安上がりでは無からうか。斯くせば、農業は吾國民の経済的過程の一要素と成るであらう。今日のところでは農業は國民の贅肉エキストラレッツェンスとなつて居る。自國の農事から馬鈴薯も牛酪も何も手に入らなければ、今日の人は肩ゆすりをして「嘲弄の姿」丁抹や和蘭や、佛蘭西から輸入する。こんな冷笑的な態度を農業に對し探るときは、國民の健康は無論のこと國民の安全を保持せる所の、都會と田舎との釣り合ひといふものが壊はれる——今の人は其んな事は何んとも思つて居ないと見える。大地の人間に及ぼす心理的及び精神的影響は言はずもがなである。試みに佛國を見よ。多數の佛國人は、出でゝは工業に就き入つては吾が畑を耕して居る。其の結果として、都市と農村との間には自然の潮の干満がある。これによつて佛國民の経済的安定は保もたれて居る。此の干満——この融通性——刈入れ時に歸り、終つて又た町に出る——これが大英國にとりても國民の保健上、また一つには経済上大いに都合のよい事ではあるまいか。現在の商業

制度は大英國に此の大規模の労働移動を行ふのに不適當である。佛國では、工業と農業とが結婚をした。大英國では離縁をして居る。然るに、「ギルド」組織の世となれば、何事も簡單に面白く行かぬ事はない。農業「ギルド」は他の「ギルド」に向つて、今は種子蒔き時だ今は刈入れ時だなど言つて、十萬人位の融通を頼むことに成るであらう。之れは想像に難くない。斯く共同して労働を使用するの案が成り立てば、人類の幼稚のときから天然の賜物即ち地の幸ちを祝せんが爲めに手筈をした年中の節會も國民一同に復活する事が出来るであらう。

然かし吾人は、農業の復活を想像するの嬉しさに耽つて、現在目下のあぢきない事實を忘れてはならぬ。借地法の複雑なる、農業市場の面倒なる、商業中心地に於いて、農業に關し發生する利權——（諸君は愛蘭の高利貸ゴムペインと違つた別種の高利貸ゴムペインが、英克蘭蘇克蘭及び威斯に發生した事に氣が付いて居られるであらう）——のあること、此等のことは、農業問題の急速なる解決の邪魔になる。然かし少なくとも左の一事は眞理である。——「ギルド」が労働者を糾合し次いで賃銀制度を全廢して、農業問題の解決上に一步を進むるやうに成れば、本問題解決も端緒についたものと言つてよい。故に、先づ第一に覺とるべき教訓は、「ホツヂ」（田夫野人氏）氏を経済的に解放するときは、之れを心靈的にも心理的にも専門的にも生まれ更はつた人間に化するの道である——といふ事である。



精神的價值といふことに就いて敢て無視した譯けではないが、今までは賃銀制度全廢の結果についてのみ考へて來たから、勢ひ新産業社會の説述のみを主として居た。抑も勞働者が其の勞働を商品として賣るのを止めるを決心したことは、既に其の精神的の一變動である。然かし其の精神的に何れ位の價值があるかは、物質的に如何なる具體的關係を及ぼすかを見なければ評價する事が出來ぬ。此の物質的方面のことは、吾人上來の所論で大抵完了した積りである。故に此所で筆を擱き、諸君をして此の物質的變化の國民の精神上に及ぼす影響を想見せしめるのも好からう。然かし吾人は自己の主義に基づいて造られた社會に關する吾人の概念から、精神的なり物質的なりに何んな結果が生ずるとしても、之れに對し最後まで責任を負はなければならぬ。吾人は此の責任を恐るゝものではない。否な吾人は吾人の報道した社會が、今よりも良い公民を生ずるに非ざれば、此の新社會を有效なものとする事は出來まいと思ふ。使用料利子及び利益を全廢して、富の生産と分配とに及ぼした經濟的影響は、無限の社會的價值が有る。然かし其の價值は「ギルド」の成員としての價值の上に表はるゝよりも、寧ろ公民としての價值の上に表はれなくては駄目である。吾人は今や勞働者の感情なり人格なりの上に於て、此の兩面の職分が分かれるかも知れないといふ事を發見した。

勞働者は公民としては甲又は乙の政策を取るであらうが、「ギルド」の一員としては富の生産及び分配に専心一意ならざるを得ない。是に於て人類の歴史あつて以來初めて、彼れは個人と同様に國民も「パン」のみにて生きるものに非らずと言ふ事を、明瞭に理會するであらう。今日各國の行動が癡痺状態を呈して居るのは、精神的の考へと經濟的の考へとを混同して居るからである。今後は斯かる混同は止むであらう。既に物質的の事は一切「ギルド」に一任（嘗に生産のみならず、病者負傷者の扶助の責任までも）した事であるから、今後の爲政家は自分の問題のみに専らとなり、階級問題とか、無價値な經濟的問題とかに頭腦をなやますの必要も無くなるであらう。かく言へば吾人が屢々繰返した經濟力は政治的實力の前提なりといふ言葉と矛盾するやうにも見えるが、少しも矛盾でない。如何なる國民も、純乎たる政治的政策を追求して經濟的に弱い國と成りたいと思ふ者は無からう。（産業政策が政治政策と分離され得る限りは）。然るに、大藏大臣に經濟上の使用料に代はるものを供給し（「ギルド」の特許に對して課する年々の税）た以上は、經濟は政治と分離し得られるわけである。但し其れも勞働者（「ギルド」の一員として）なく、公民として行動する所の）政府を扶ける心が當てになる間の事である。「ギルド」の成員は、自分は一の公民であつて、「ギルド」を離れた義務がある。——と思ひ出す事がある。斯の如き事は「ギルド」にもある。即ち「ギルド」も亦



た國家は産業組織の各方面の事情如何に拘はらず遂行すべき職分及び義務を有する事を認めるであらう。

「ギルド」組織の實際に行はれて居るところを想像すれば、國家と「ギルド」との職分上の區別を理會することが容易である。假りに「ギルド」の三大要素たる管理者と専門家と労働者により各代表者を選んで造つた「ギルド」會議があるとする。之れは性質上永久常設的のものであつて、自然産業界の執政官たる格を帯びる。これには各「ギルド」及び各「ギルド」の各方面が代表者を出す。そして産業管理者化學者發明者筋肉労働者の頭腦をなやます凡ての難問題は、皆な此の會議の決定を仰ぐ事に成る。此の會議は當然それ自身の問題のみに集注する。而して丁度今日職工組合が特殊の「タイプ」を具備し、商業會議所其他各種の會合——土木工學、機械工學、化學、鐵及び鋼鐵、纖維工業等の各専門家の會合——等が各々特殊の「タイプ」を發生する如く、此の「ギルド」の會議も特殊の「タイプ」を生ずるであらう。又た高等政策の任に堪ふる如き人物も、無論此の會議から生まれるであらう。彼等は國家との交渉談判一切を委任せられ、經濟的實力の強よみがあるから、其の一言一句は大に傾聽されるであらう。然かし「ギルド」の爲政家は誰れも彼れも一致した説のみを立てるものとは思はれない。若し一致したならば必ず其の意志を強制するであらう。其の實、吾

人は斯く考へて差支あるまい。「ギルド」會議では丁度今日（漠然ながら）職工組合の會議で種々の思想傾向が認めらるゝ如く、同様にまた思想上の異派が幾つも生まれ出るであらう。然し大體に於て、苟くも「ギルド」會議に臨まんほどの人は産業上の問題に没頭して了つて、また國事を議するの暇なきに至るべしと、斯く想定して好からう。之れについて興味あるは、毎年一億萬磅からの取引をする組合運動が、今まで世間に名なき人々によつて處理せらるゝに至ることである。彼等は各々自分のする仕事に關與し、幾らか自己の地方の政治的生活に參與するとしても、其れは、無論僅かの程度に過ぎない。其の經濟的環境に於いて、如何に此等の組合指導の勢力や感化が強くても、彼等は政治には出しやばらない。これも別に不思議はない。大きな産業問題に參與せる者の頭腦には政治などの問題は這入つてくる力がない。「ギルド」管理者の大多數に於ても亦た同様であらうと思ふ。故に、組織立つた「ギルド」と組織立つた國家との間には、別に衝突の起ることも有るまい。斯く假定しても大失策の本には成るまいかと思ふ。「ギルド」管理者等は各自の責任ある仕事を取らせて置き、一風變つた氣質の人が居たら其ういふ人のみに政治をやらせてよからう。斯くしても前者は後者と同じく満足して居るであらう。吾人にして一たび政治と經濟との職分を引離して了へば、政治も純乎たる形式のものとなり、今後の政治家は今日以上の立派な「タイプ」のもの



と成ること請合である。之れは吾人の主張の中でも大事なところである。

故に、現代國家の問題は、各國の事情の許るす範圍に従つて、經濟的及び政治的諸勢用を自由に活動せしめん事である。曩きにも言つたやうに、此の二つの勢用ポオレセスに衝突するものでない。但だ之れを混淆せしめるのが好くない。混淆せしめるときは兩者互に力を殺ぎ合ふのみならず、當然政治的方面に於て表出され満足せしめられねばならぬ人類の精美な欲情と大望とを腐敗せしめるの害がある。個人としての資本家は、自分が之れまで労働者を壟斷せし如く、國家までも今後自分の目的に都合のよいやうに變形せずんば止まざらんとする者である。若し資本家の利害が、社會全體の利害と一致せる場合に於ては、此の危険も實際上でなく理論上のみに存するの危険と見て安心して好からうが、其の實、個人的資本主義者と國家との利害が一致せるものゝ如く假定してかゝるのは、國民的生活の標準を低下し、大國家の理想たる精神的感化力を獲得せんとする全ての希望を水泡に歸せしめる所以である。然かるに政治と經濟とを分離することが、國家に均齊と安定とを與へる本であると共に、結局のところ、國家の政策と運命とは、其の經濟過程の健全平等なるか否かによつて定まるものである。是の故に、「ギルド」の一員としてにあらざる、公民としての人間の利益の爲めに働らくところの、此の國家なるものは、「ギルド」の管理團からも相當に代表者を出させなければ

ならぬ。

健全なる國家經濟の達成と共に、斯の如くして達せられた經濟的實力を、成るべく高き社會的及び精神的高壓に變壓するのが、爲政家の任務である。人若し之れを理解せんとせば、先づ此の二種の職分の區別を知る必要がある。世には爲政家の遠大の任務を知らないものが有る。彼等は「ギルド」(又は何にか之れに類したもの)が有れば、其れでも、澤山だと考へて居る。そして、労働者が十分に經濟的過程を掌握すれば、労働者だけで國事は甘まく處理して行けるやうに考へて居る。宛かも政治は「ギルド」會議の一項目に過ぎないとでも考へて居るの觀がある。故に吾人は、「ギルド」の經濟的活動を列舉した後には、なほ政治方面に於て如何なる用事が残つて居るかを一考しなければならぬ。政治の問題は、左の諸項に屬する。——(一)法律、(二)醫事、(三)陸海軍及び警察、(四)外交關係、(五)教育、(六)中央及び地方政廳及び行政。此外に加はるのが教會であるが、之れは一種の「ギルド」である。

(一)神ならぬ身は、誰れも法律及び訴訟關係の學職者の將來を豫言する事は出来ぬ。辯護士は世にも最も保障の安固な「トレード・ユニオン」であるとは、世間一般のいふ事である。然かし最も儲かる商賣は、個人の財産の保護及び管理の方面である。——例へば、裁判手續代理、讓渡證書



の作成、株式法、特許法に關する仕事である。要するに、法律が個人の壟斷を許可するところには、其處に必ず辯護士が集まつてくる。今後貨銀制度が全廢せらるれば、此の壟斷も止み、隨つて、かの使用料、利子及び利益に關する一切の法律も無用となる。且つ今日行はるゝ如き澤山な刑事法規も、亦た大部分は無用となると考へても、あまり空想ではあるまい。貧乏から起る犯罪は今は昔の夢と化すると、さう信ずるのも不合理ではない。又た、よし幾らか刑事犯が残るとしても、今日よりは科學的に處刑が行はれるやうに成るであらう。「ギルド」は、別に法律を要せずして、其の定款とか内規とかによりて、自から始めて行くことも出來やう。然かし如何なる範圍まで其れが可能であるかは、一寸想像がつかぬ。今日の産業法規は、主として傭主と被傭者との關係の規定（これは貨銀制度の全廢によりて廢される）である。婦人小兒の雇傭に關する規定である。（このやうなものは「ギルド」が獨りで處理して行く事である）、疾病傷害老廢（これも「ギルド」に一任せらるべきもの）に關する法規である。「ギルド」の成員には、法律上の認定が與へらるゝだらうか、如何うか等の問題は、今から考へても何の役にも立たぬ。然かし今日現在の法律關係の仕事が、大部分無用になることだけは疑ひが無い。然かし如何なる社會になつても、法律といふ頭は人間に必要である。假令へ法律の需要は減つても、法的習慣は役に立つ事がある。今日でも大きな團體、——特に

鐵道のやうなもの——は、自分で辯護士を傭つて居るのが常である。恐らく將來も此のやうなことに成るであらう。然かし之れは個人についての事である。國家としては矢張り法律を立てたり法治をやつたりするのが仕事であらう。

(一) 醫業は法律上の業務と大に異つて居る。個人及び家族の生活は、生の初めより死の終りまで、醫者の厄介になる。法律の方も然うであるが醫術ほどには行かぬ。醫業は財産の法律上の解釋如何にも關係なく、財産に關心することもなく、寧ろ人命に對し關心するものである。恐らく醫師こそ「ギルド」を構成すべき第一番目の人であらう。然かし豫防衛生が、法律と行政とに依頼しなければ成功せざる爲め醫師の「ギルド」も國家に對しては「ギルド」會議に對するよりも責任を帯ぶるに至るものである。

(二) 軍國主義の如き面倒な問題に論及せずとも、これ丈けのことは言へる。——吾が陸海軍の力と組織とは、必然的に國家政策次第で極まると。又た今後は壟斷階級の利益の爲めに濫りに他國と干戈を交ふるが如きことは、自然に消滅するであらうと、さう假定しても差支はあるまい。然かし、列國間に於ては未だ「ギルド」まで發達せず、依然として壟斷を事とせる部分があつて、自己の利益の保存の爲めに、吾人に對し戰端を開くやうな危險は常にあるであらうが。吾人は此事を豫期



するものではない。吾人は吾國の優れたる「ギルド」組織（之れによりて使用料も利子も利益も全廢された）の爲めに、競争に負ける心配のある諸外國は、吾國の先例に倣つて「ギルド」を組織するより外に道はあるまい。優れた經濟的方法を有する國は、昔から結局の勝利を得て居る。それは文明時代に於ても野蠻時代に於ても同様である。故に陸海軍を必要と認むる以上（善くも悪くも）は、又た陸海軍の維持が國家政策によつて決定せらるゝことを思へば、國民の利益の爲めに存在する國家が、其の政策を宣言するの機關とならざるを得ないのは當然である。

（四）吾が諸外國との關係の今後いよゝ複雑となり親密となることも、亦疑ひを容れない。恐らく今日の王室と王室との間柄で行はるゝ外交關係に比し、遙かに面倒な關係を生ずるであらう。前章（『國際間の經濟と貨銀制度』）に於て、吾人は社會が「ギルド」組織になれば領事的任務は今後如何うなるかと言ふことにつき概略の話をして置いた。思ふに今後各領事は各國の信任をうけて他國に赴任し、自國の代表者となると共に、自國を介して其「ギルド」をも代表する人となるであらう。斯くて各領事館に於て「ギルド」代表者は各國間の交易問題を取扱ひ、赴任國にて賣買を爲し、自國の勞働價值單位（「ギルダー」）を赴任國の通貨で換算して計算するの役目に當るであらう。吾が國の外國貿易は、現に年々十億磅以上に達することを思へば、吾が國將來の經濟的外交も亦た想像

するに餘りある次第である。思ふに、將來の領事任務は、今日の職業局の如きものとなる事であらう。而かも其の職分は今日のものよりも擴張したものと成り、國家と「ギルド」との間の交通の通路となるであらう。然し乍ら、吾が外交機關の任務が國際間の交易のみに止まるやうに考へてはならぬ。現今と雖も既に無限の問題が將來あることを豫想し得られる。——例へば隸屬國民の問題、熱帶醫學問題、黃白人種の衝突問題、種族混血、民族自治、勢力圏問題等の如く、算へ來れば際限が無い位である。且つ、外交上には國家の職分中の最も重要なものが見える。正しい外交が行はれなければ、列國との國交が面白く行くものでない。

（五）教育の問題は倉卒には説き難い。別に一章を設ける必要がある。

（六）中央と地方との政廳の行政事務は、之れまた明らかに國家の任務である。何となれば、之れは團體としての各「ギルド」全體に共通せる問題たるのみならず、亦其の公民としての成員各自の問題だからである。中央及び地方の政治は、豫算の吝みなき支出と、爲政者の精神的洞察によつて良否の別を生ずるものである。前きにも論ぜし如く、國家は年々の經費に對し豫算を定めて、其の支出方を「ギルド」に命じ、其れによつて維持せらるゝものである。この金額は大體に於て、今日經濟上の所謂使用料に相當するものと見てよい。今日の經濟制度では屑物扱ひにされて居る失



業者も、今後は國家から相當に注意されるやうに成る。勞働の能力を失つて遊んで居る者は、社會の犠牲者として見られ、犯罪者と見らるべきものでない。苟くも「ギルド」を造る位に發達した社會は、此等の失業者に相當に同情することは吾人の信じて疑はざる所である。地方の政治については、言せんに、經濟的に解放された人民の爲めに、慰樂と愉快とを與へてやる上に、地方の政治の大に關係あることは明らかである。之れも將來は、「ギルド」會議の取扱ふ問題とならずして、國會の取扱ふ問題に成るであらう。

勿論、國家(「ギルド」と異なる)の任務と職能とを此上更らに詳説することは容易である。國家の法規を立て又た實施する上に於て、たゞ「ギルド」のみの力に依頼することは危険である。此所には之れを十分に證明すれば足る。別に之れ以上に國家の職能のことを詳説するの要はない。國家と「ギルド」との何れに屬せしめて然かるべきかの、未だ明白ならざる如き任務も少くはない。例へば郵便電信事務の如きである。此等のことに従事せる者は、本來、國務従事者の一員と見るべきか、又は寧ろ「ギルド」に屬すと見た方が相當か。彼等は事實上は交通「ギルド」に屬するものであるか、又は遞信大臣の配下に置く可きものか、如何。吾人は之れを國務従事者と見るの論をとる者である。然かし彼等にして若し其の事務上に必要な勞働を獨占するとせば、其の何れの地位

を取るかは、彼等自身に決定せしめたが宜しからう。

大體に於ていへば、政府と國會と文官の各機關とを有する國家が、「ギルド」會議に對し獨立を繼續すべきことは、吾人の信じて疑はざる所である。否な之れと獨立するのみでなく、之れより超越して居るべきである。其の超越し得ると否とは、各國の公民の道德的實力と文化の力とによつて定まるのである。以上吾人は、富の生産と交換と分配との問題を解釋し了つて、爰に確信の動かざるものがある。それを何んぞといへば、他なし、斯くの如く物質的に解放せられし人民は、人類進歩の螺旋をめぐつて登ほり、其の向上運動のうち、自づから純乎たる政治的系統を發生するに極つて居ることである。而して此の如き政治的系統に於ては、必ず大爲政治家が十分に其の能を發揮すべきや疑ひなき所である。

### 第十七章 教育と「ギルド」

現今行はるゝ教育制度に曉通せる者は、吾人の之れに對し不満足を表するものも無理からぬ事と信じ、又は、何人も建設的な意見を提出し得ざるべしと信ずるものである。此等の批難は、教師に向けらるゝ事があり、當局に向けらるゝ事があり、教育系統に向けらるゝ事があり、或は學科課程の上に向けらるゝ事もある。然かし、或る程度に於ては誰れも幾分づゝは悪いとは言ふものゝ、實



際の缺陷は矢張り政治制度一般の根本に伏在せる缺陷から來て居る。即ち經濟的目的と政治的目的との混淆、國家的職能と産業的職能との混同より來て居る。

恐らく吾が教育制度ほど、此の缺陷より生ずる弊害の顯著なるは他にあるまい。蓋し、一方に於ては「ハーバート・スペンサー」、他方に於ては「マシユ・アーノールド」——此の兩人から始まつた反對の兩意見は、今日までも猶ほ依然として教育界に鎬を削り、或る時期の間は甲の意見が人道的公民的理想の方面で高調されるかと思へば、又た或る時期に於ては乙の意見が技術的科學的方面で受けのよい事がある。一年の内でも半歳の間は、「教育の目的とは何ぞや、圓滿に發達せる心意、完全なる公民、世間有用の人物を生ずること以外ならず」との議論を聞かされ、又た後との半歳は、「何等の腕も養はないやうな公民、現代の社會が複雑な機械を托しても之れを操縦するの手を有せざる如き無能の公民は、國家にとり何の役にも立たぬ」と、かういふ議論を聞かされる。此の兩つの議論には、何つちに團扇のあけやうも無い。蓋し双方どつちにも十分の理由があり、何つちも相手を攻撃するの理由を有するからである。教育は生活一般の爲めのものであると云ふ辯論に對しては、技藝の教師は、専門の技能なき一般的生活なるものは想像がつかぬと答へる。然るに、専門技能の教授を有效ならしめんとせば幼少時よりして始めなければならぬとの議論に對しては、人文主義者は

斯く答へる。今日の社會は最早や昔の如く諸階級諸藝能の固定した社會ではない。藝能の如何に論なく、餘まり幼少の時より之れを授くるときは、長じて如何なる職業を採らせらるゝ事が有るかも知れぬ所の吾が青少年を誤まるものであると。

此の反對意見は、理論上も、實際上も兩々相對して、何時議論が果つべしとも見えない。而して今日まで未だ解決の道もつかないから、吾が國民教育は、人文主義と専門主義と、公民教育主義と職業教育主義と、普通教育主義と實業教育主義との間に動搖し、兩派何れの側にも満足を與へ得ず、結局は國民全體の不幸を結果せんとするの憂ある羽目に立ち至つて居る。

然るに吾人に一の主義がある。之れを教育に應用せば必ずや有效なること、猶ほ政治及び産業に於いて有效なる如きものが有る。吾人は、産業といふ職能は第二位に立つべきものであつて（第二位とはいつても必要不可欠ではあるが）、社會國家の一般的職能を第一位とし其の下とに従屬せしむべきものである。此の兩職能の別を立てるのに最も有效なる方法は、國家をして一國の産業に關する權能と責任とを合せて生産「ギルド」に委託せしむることである。——この事は吾人の前來既に説き去つたところである。

若し全體としての國家と、自治的なる（而かも亦た自づから職能上の制限は有る）「ギルド」との



間に、斯く任務の分擔を行ふことが可能であるとすれば、而して此の主義を教育の方面にも及ぼすことが出来ると思ふ。例の公民教育と實業教育との領域争ひは止むであらうと思ふ。蓋し「ギルド」にして既に熟練を要する産業の責任を委托されたる以上は、「ギルド」各方面の職業に必要な相當の實業教育に對する責任をも同時に有するに至るであらう。斯くて「ギルド」が實業教育全體に對し責任を負ふ間に、全體としての國家は一般的なる公民教育上の責任を負ふ事と成るであらう。

これが目前の難問題に對する吾人の解決法である。斯くて「ギルド」には、其の現在の會員の爲め而已ならず其の將來の會員の爲めにも、職業の發達に必要な實業教育の手段を講ずるの任務を與へ、國家には、其の次代の國民の爲めに、公民たるに必要な訓練を授くべき國民教育の手段を講ずるの任務を與ふる事となる。

此の計策が、實際的であり理想的であつて、何人の希望をも副ふものなる事は、今更ら證明の要もあるまい。世人が何にか斯のやうな案を希望して居ることは、前に陳べた二派の反對意見の間に、到底調和すべからざる深かい差別の存するによつても知られる。蓋し、人文主義者は、其の教育理想が實業教育論者の理想の下位に立たされるを中々承知すまいし、又た一方に於て實業教育論者は、

時代の進歩するにつれて、人文主義者の下位に立つことを以て益々満足しなく成るであらう。故に此の喧嘩は引分けにする方が、双方とも希望である。之れを希望する理由は他かにもある。此事は一方の論者が少年の爲に昔の徒弟制度を復活すべしと主張するに對し、反對論者は純然たる普通教育の時期を延長すべしと言ふ——此の矛盾した主張の間に窺はれる。蓋し、各主張は獨立してこそ正しい論であるが、之れを同時に行はふとすれば相容れざるものと成るといふ、——此の天然自然の認識によるに非ざれば、此の矛盾した主張を動かす事は出来ない。且つ徒弟制度の思想の復活によつても證明せらるゝ如く、目下實際界の人は、昔の個人的徒弟制度により師匠が弟子に腕を仕込んで呉れたやうに、今日の各職業にも此の傳統的技巧教授を復活したいといふ念慮の存する事は明らかである。故に之れ以上調査をするにも及ばず、吾人は結論を下して、教育上の此の二方面を互に獨立せしめん事は萬人の希望なりとするものである。

此の分離策が國策として理想的でもあり且つ賢明でもあることは、吾人の今まで陳べた一般的原理より推して知らるゝ通りである。國家が個々の國民及び次代の國民に對し義務を負ふことは疑ふの餘地がない。之れと共に、今一つ疑ふことの出来ない事實が有る。此の國家の任務を前提として主張せらるゝ人文主義の教育が、同じ國家の實業教育當局の追求しつゝある理想と柄鑿相容れざる



事である。之れを古今東西の経験に徴するも、常事者（國家にせよ一人にせよ）は首鼠兩端を持しては何れの側にも満足を與へる事が出来ないと言ふ事は、吾人の言明して憚らざるところである。現今國家は此の相反對する兩思想を妥協せしめて教育を施して居るが、人文主義者は果して之れに満足して居るであらうか。——といふに決して然うでない。之れに反し専門業に於ける製造家や商業家は、其の方が都合がよいと満足して居るのであらうか。之れも然うでない。其の實、双方とも不平を言つて居る。又た其の不平にも一應尤もなところがある。而かも双方とも自分では分からぬだらうが、其の不平の原因は、二本ならざる一本の行政で二つの目的を達しやうとする失策から來て居る。

是に於てか、吾人の提示した方策の實行不可能ならざるや否やといふ問題が残つて居る。先づ吾人の明白に言つて置きたい事がある。目下のところ、小中學以上の教育系統を如何うしようと言ふ案も吾人には無い。追つて社會の基礎が一變するに従ひ、其の基礎の上に建てられたもの（社會は有機的であるから）も、亦た随つて一變するかも知れぬ、否な恐らく必ず一變するであらう。下は小學より中學まで、上は中學より大學までに亘たる各階段は、是の時に及んでや亦た今日の如く障壁によつて通行妨害をされる事が無くない。不遇の子弟は上まで行けぬと言ふやうな事が無くなる

であらう。既に教員登記レツスターといふ事が始まり、下は教生より上は大學先生ドンに至るまでを包含せる教職者の名が列ねてゐるのは、臆がて將來に起るべき教育上の統一の前提と見てよい。然かし今日の進化程度に於ては、吾人は過分のことは望まない。唯だ、國家に對し公民教育の最小限の任務を課すれば足る。例へば、十分に國家の公民たるに必要な如き教育を青少年に授けんことを以て最小限度と定め、其れだけの任務を果たせば好い事にするのである。而して此の最小限度の任務を果たすには如何うするのが最もよいかと言ふに、國家をして全國教員會に對し此の任務遂行に必要な権能と又た其れに伴ふ社會への責任とを負はさせる事である。此の點に於いて、吾人の案は保守的と革命的とを兼ねて居る。即ち、公教育といふ事が始めて行はれた昔の定義通りに國民教育の方針を復活するといふ事、——即ち良民たらしめんが爲に兒童を教育するの方針に立ちかへる事を主張する點に於ては、保守的であるが。又た吾が全國の諸學校から全ての實業教育的要素を排斥し、且つ今日教育當局及個々の教師に托されて居る所の任務を、教員團體に一任すると言ふ點に於ては、革命的である。これは遂行し得られないやうな計畫ではない。苟くも教員組合（ティーチャース・ユニオン）の將來を豫想せんほどの人は、其組合員の實力でもつて此の組合が漸次發達するにつれ、漸次その経験も増し、大望も發生し來るであらう。成るほど今日のところ未だ教員組合が、青少年教



育の任を托せられし「ギルド」としての地位を要求又は引き受ける丈けの實力を有せざる事は事實かも知れぬが、將來は此の「ギルド」としての地位まで上ほり得る事は確實である。之れを否定するものは、現在の素より歴史上の價值觀念も無いものであると言はねばならぬ。抑も亦た之れが實行上如何ういふ故障があるのか。何も無いではないか。戦をするのは陸軍の役目で、沿海及通商を保護するのは海軍の役目であるが、此等の役目のあるものには又た其れ丈けに大きな權力も與へられ、殆んど自治に近い自由まで與へられて居る。而かも此の役目を果たすには國家としての權能により又たその權能を持つて果たして居る。而して細かい指圖は自分でやり、たゞ大體の方針を國家から授かるに過ぎない。現今の如く何事にも恐慌を起したがる世の中に於てすら、斯かる絶大なる權力を此等の軍職者に一任して、誰れ一人これを恐るゝものも無いとすれば、教育上に全國民の指圖をうけ之れを遂行すべき權能を、教職者に與へる事は、亦た同じく可能でもあり實行し得べき事でもあると謂はねばならぬ。實に一國內の人民の如何なる團體も、公民教育の最少限度に關する責任を果たすこと、教員組合に如くものは莫い。假令へ文部當局が、甘まく地方當局と共同し、形影相伴ふ如くに共力分勞の實をあげたとしても、逆も此の教員組合ほどの成績はあげ得まい。何となれば、當局は中央たると地方たるとの別なく、等しく兒童の實際問題と離れて居る。之れに反

し教員組合は之れと毎日直接に觸れて居る。責任を果たすに最も適する者が其の責任を取るの適任者であるといふ原理に基づき、今後此の教員組合は、全國の公民教育全體を支配すべき任務を與へられ、國家の下位に立つて働らく共同者として、特筆大書せらるべきものである。

次に、實業教育の任務を「ギルド」に一任することが、果して實行され得るや否やの問題に移らう。然るに此の事は、主義に於ては既に萬人の認めて居る所である。現今熟練を要する如き各職業に従事せる者は、其の職業に必要な特殊の學校を、當局の手を経て設けること（特に昔の徒弟制度の全く廢たれし今日に於て）の、到底望みなきを見て、各その専門家によりて、特殊の實業學校を設け、下は一技一藝を授くる低級の學校より、上は應用科學上の最高教授を爲す教育施設までを具備せざるなき世の中となつた。成るほど、一方に於ては團體的先見の缺けたると、他方に於ては當局が何とかして呉れるだらうとの希望のある爲めとで、今日のところ未だ各熟練職業が、全國又た全企業界にわたり、其れ々々の職業學校を系統的に組織するまでには立至つて居ない。且つ、今日の如き競争制度の世の中に於ては、各職業の傭主全部が、互に寄附し合つて實業學校を起しても、其の得るところの利益が皆な相齊しいと言ふ譯けには行き兼ねる。又た當局は此等傭主の爲めのみ、に此の教育機關を設けてやる事は有るまいと思はれる。隨つて、前陳の如く系統的に此の實業教育



を行はんとするにも、當分は種々の故障が出るものと思はねばならぬ。然かし乍ら、吾人前陳の假定、——即ち、各産業は一個の團體的「モノポリー」であつて、其道の技巧に就いて責任を有するものである（何時何處で行はるゝ作業に於ても）——といふ假定から出發して推論せば、各産業が各自の新ら手の養成に必要な施設を設けんことを念とするに至るべきや明らかである。且つ、前にいふ如く國民教育の學校の課程から、今後實業教育的要素を排除する事となれば、各産業自身にて教育施設を起すの必要は、一層切實を告げて來るわけである。其の實、各専門の職業を授くる如き各種の學校を設け又た之れを指導して行くのに、最も適任なるは、其の職業を實行し、それに對して責任を有する所の「ギルド」の外には無い。若し傭主——相互に競争をするのみならず、被傭者に對してまで利益を争ふ如き——壟斷的なる傭主が、其専門の業に於ける特殊の實業學校を設くる事、（全國一般でなく所々に於てのみとは言へ）、につき、從來精神上及び物質上より援助を與へ來つたとすれば、況んや、學者技師技手熟練職工等を、悉く一團體内に包含せる如き「ギルド」、——又た現在は無論將來にわたりて各職業に對し責任を負つて居る如き「ギルド」——が、此等の傭主以上の盡力を爲し得べきや明らかである。吾人のいつて居ることは、時日が證明して呉れるであらう。そして將來の「ギルド」の設くる實業學校は、將來の工匠等の誇りとなるであらう。其時に成れば

「ギルド」が其の基金と知力と競争力とを、全部この特殊學校系統の設置に捧げ、公學校を出づる學生を此所に誘ひ、各自の好む専門の職業に於ける最高素養を與へてやる事に成るであらう。斯くて「ギルド」は、各専門の勞働を美化して技能とし、技能を藝術とまで向上せんことに着手し、誰れ憚かることもなく、堂々と此の方針を進めて行くであらう。「モリス」の言つたやうに、「ギルド」の精神があれば、製作といふことが献身的なる奉仕となるであらう。若し國家が公學校にて人文教育を授けた年少者を、「ギルド」の手に托してくれるやうに成れば、此の事は一層迅速に實現されるであらう。

## 第十八章 結論

勞働を商品と視るの説が、現代不平の原因であることは、今や疑を容るゝの餘地が無い。如何に眞劍に此の説を信ずる私利追求者や經濟學者が有らうとも、之れ畢竟、勞働者を瞞着するの手段に過ぎない。此の説も歴史的沿革の上からは相當の辯護は出來やうが、それは吾人の關するところでは無い。然かし何んな辯護よりも有力な辯護は、——如何んな善い慣習でも世の中を腐敗せしめるものだ——といふ辯護であらう。所謂「アントルブルナール」（請負人）は、未だ産業制度の幼稚なところには、相當の役割も持つて居たものである。否な恐らく彼れは、社會を今日の如く經濟的に纏



まつたものに作り上げるうへには、大いに必要な役割を演じたものであらう。然かし、危機に際會して見ると、——即ち多勢の賃銀労働者が、自分の労働の價値の三分の二を奪はれるやうな經濟制度の不當なことに、氣が付いて來ると、最早や此の制度も運命の極まつたものに成り、而かも其の滅却も程近い事に成つた。是に於てか、本來この制度の不正なる事よりして、倫理的の弊害も無限に生じて來るといふ事が分かる。現に今日資本家の「シローアム」[Siloam]——希伯來語「出す」の義にして、此所には固有名詞として、此所には固有名詞として使用され、「エルサレム」の水溜りを攪き亂だして居る労働紛議は、即ち人類の大多數をして經濟的屈從と精神的虚脱状態とを呈せしむる、今日の賃銀制度に對し、無意識的の反抗の行はれて居る證據である。——と言つても過言ではあるまい。労働を商品として賣るは労働の神聖を汚がすものである。人間の不斷の勢力を綿花や石炭の如き原料と同視するは罪惡であつて、聖靈に對する罪である。——といふ根本的事實の上に、労働者が今後その要求を根柢せしめ、意識的に其の主張を行ふに至りてこそ、此の資本家に對する反對も、合理となり且つ抵抗し難き強いものとも成るのである。故に、吾人目前の焦眉の急務は、賃銀労働者に對し、最新の賃銀制度を理解せしめる事である。こゝが今後の革命と在來の革命及び反亂との根本的に違ふ點である。在來のものは新たに「シーザー」〔新政府〕の出でんことを求めた。其の争ひや、政治的であり、種族的であり、或は國際的であつた。

今後の革命は、審美的倫理的の命題を基礎とせるものである。——即ち、人間の労働の價値及び意義は、富の生産の要素たる無生物と同一視すべきものでないといふ「デモンストレーション」に根柢したものである。商品は交換價値を有するものであるが、労働は不換金である。其の價値は以て表すべきものがない。之れを銅や材木と同視するは、労働者を家畜と同視する所以であつて、——形式は兎に角、實際上は家畜同然の昔の奴隷に引下げるわけに當たる。奴隷所有者が、奴隷の肉體と労働とを考へなかつた事は、奴隷制度又は「ピーオン」[Peon]——借金の補償として債主に使はるる人のこと、元印度の使丁の意の制度に於ける奇妙な特異現象であつた。彼等は家長制度もどきに、自分は死ぬまで奴隷の世話をする氣で居たが、奴隷の肉體と、其の中に宿どれる労働とは一つものだと信じて居た。近代の産業論者に至つて、初めて肉體と労働とを區別して考へるやうに成つた。近代の産業論者は、労働といふものに價値を措き、労働が澤山に得られさへせば、肉體は腐さり、魂は死んでも構はぬと考へるやうに成つた。借問す、彼れは死者より労働を得ることが出来るか。若し然りとせば、死骸には「プレミヤム」が付き、木乃伊づくりの商賣は、醫者の商賣を奪つて了ふ世の中に成るであらう。人間の肉體は、其中にある労働と共に、労働需要者の手に歸すべきものでない——といふ考が起つたのが、治的「デモクラシー」の起り始めであつた。次に、労働は宜しく人體内にある其の元との住み



家に還へすべしと——いふ考の起つたのが、經濟的「デモクラシー」の始めを爲したものであつた。労働者の労働が、今ま一たび元との如くに自己の一部となるとき、彼れは何處に備はれて行つても其の労働の行き先きに自分の身も伴なつて行き、労働の收める好果を自分のものとする事が初めて出来るやうに成る。是の時に及んでや、労働は労働者の生ける一部分となり、——自己の運命の機關となり、最早や商品と成るやうな事はなく成るであらう。

吾人の賃銀制度の説明は甚だ簡單であるが、人類大多數が現に此の制度を是認して居ることを看過してはならぬ。それが事實だとすれば、實に奇怪至極だと、思ふ人もあらうが、社會の良心が長い間それに馴れて居ることを思へば無理もない話である。基督教會——特に英國の非國教の徒——は、現に賃銀制度の人類を毒害する結果につき深憂を懷いて居るの觀がある。此の人々は、過去二十年間の久しき、賃銀制度より生ずる凡百の弊害を根治する「ノストラム」(家傳藥)を廣告して居た。然るに、吾人の寡聞を以てするに、此の派の人々にして、基督教社會主義の主張をする者が、一人として、未だ賃銀制度を非議し其の全廢を主張したのを聞かぬ。彼等は賃銀條件の改善を説くことはあるが、其の全廢を説くことは無い。彼等は祖先等と同じく賃銀に衣食して居る輩であつて、其の指導者の間には賃銀制度を辯護した人もある。信者の良心を墮斷して飯を食つて居る者共の良

心は賃銀制度の悪いことを感じないと見える。又た賃銀制度を非難し其の全廢を説く者あれば、必ず此等の基督教中の重立者から非難されると言ふ事實がある。吾人が此んな事を言ふのは、徒らに憎くまれ口をきくのではない。人が社會的惡弊救済の簡單なる方法を看過せんとする(否な現に看過して居る)のを指摘せんが爲めである。現代生活が放縱である爲めに、世人の頭腦は混雜し、其の元氣は消磨する。労働は商品なりとの信仰を排斥せんとするものは、今後も永く惡戰苦闘しなくてはなるまい。蓋し社會的良心が斯くの如く未だ眠つて居る事は暫く間はすとするも、賃銀制度を全廢するには、勢ひ先づ使用料利子及び利益の全廢を伴ふべきことを思ふからである。

使用料利子及び利益の生ずる本とが、労働の商品としての賣買が止むと同時に自然に消滅すべき事を、諸君に信ぜしめ得なかつたとすれば、吾人の論は未だ目的を達せざるわけである。労働の<sup>コスト</sup>實費と、仕上げた商品の値段との間に差があればこそ、使用料利子及び利益のやうな諸掛りも支拂つて行ける譯けである。如何なる階級とでも、甘んじて地位を奪はれる者ではない。況んや有産階級の如きは、今日力の及ぶ限りの有力なる聯合を造つて、或は脅迫し或は甘言を弄し、或は暴力までも用ひて見て、如何うしても駄目だと分かつた上でなければ降伏はしないであらう。然かし其の武器の中で最も有力なるものがある。それは既定の事實といふものである。有産階級は、現在の産



業制度は成るほど缺點も有らうけれど、折角甘まく運轉して居るのに、今更ら之れを破壊するのは宜しくない。破壊するならば其の代はりを出せと主張するであらう。故に、労働者が破壊事業から建設事業に移るに非ざるよりは、壟斷者は其の地位を退かないであらう。

依つて吾人自身も建設的な方案を提出したわけであるが、批評家の中には「ギルド」といふ名稱を好まぬものも有つて、中世紀の「ギルド」が、傭主の組合であつて、獨占を目的として居た事を以つて、反對するのである。米國に於ては、「ギルド」といへば、自足的にして自利的なる工匠の團體のことを意味する。其の實、中世紀の「ギルド」と吾人の想像する「ギルド」との間には、少しも似通つた點が無い。ただ一つ共通の點は、獨占といふことである。但し、中世の「ギルド」は商賣の獨占を目的とせしに反し、現代の「ギルド」は労働の獨占を基礎とするものである。吾人が「ユニオン」(組合)の字を採用しなかつたのは、それが手の労働者(即ち「プロレタリアン」)の結合を意味するからである。然るに、吾人の所謂「ギルド」は、全ての商工業従事者(賃銀、俸給等を貰つて働らく者及び經營行政等の任に當たるもの一切を含む)全部の合同團結である。此の労働獨占こそ、賃銀制度に代はるべきものであつて、今日のところ之れ以上のもは考へ得られない。又た「ギルド」の名が適當だといふ事については、別に理由がある。抑も昔の「ギルド」は經濟的自

由の「バルレーヂアム」(「バルラス」神像——即ち守本尊)であつたのみならず(主人と職工とは社會上の身分が同一であつた)、亦た「ギルド」は、戦争があつても黨派争ひがあつても、或は政治的變動が有つても、殆んど其の爲めに攪き亂だされる事が無かつた。「ギルド」の職能は經濟的のものであつた。王や政治家は社會を窮乏に導くことが有るかも知れぬが、「ギルド」は之れに衣食を給するものと成つた。現代の「ギルド」も此所に鑑むべきである。即ち今後の「ギルド」の目的は人生の物質目的のみに限つて置く可きである。健全なる經濟社會を造りさへせば、健全な國民生活が發達するものだと言ふ確實な希望を懷いて、専ら經濟的の爲に盡くすが今後の「ギルド」の本分である。

歐洲の「ギルド」が、英國の「ギルド」と同時代に榮えたと言ふことは、意味ある事である。若し當時の通りの産業組織が、今日まで依然として續いて居たならば、國民的及び列國的の「ギルド」會議が今頃は既に起つて居るべき筈である。そして各「ギルド」の間に職業分擔が行はれ、各「ギルド」に特有なる生産仕上げ品を互に交換するの便宜を開いて居たであらう。斯くて、今頃は既に共同組合運動(コオペラチヴ・ムーヴメント)の仕事をも實際にやつて居る事であらう。それは兎に角、吾人は今ま國家「ギルド」を模範として特に選んだ。その理由に二つある。——地方々々の「ギ



「ギルド」は、微力にして、現代の要求に適合する事が全然覺束ない。之れを現在の地理上の關係のみから考へても、一國全體を「ギルド」とする位の處が、丁度國內及び國際上の任務を遂行するに便宜である。此の第一の點に關して記憶し置く可き事は、「ギルド」が出来たらば、國家から有らゆる經濟上の責任を譲り受けねばならぬ事である。——例へば老廢基金制度、災害賠償金制度、疾病基金制度、各種の保險事業、並に勞働時間の規定、生産額の完全なる統制等の責任である。若し此の大「プログラム」が實行せらるゝときは、各「ギルド」の責任は必然的に國家的のものと成るや明白である。斯ほどの大責任は、逆でも地方のみの「ギルド」では負ひ切れるものでない。昔は數千の「ギルド」があつた。今日は生産「ギルド」を十四ばかりと。外に文官勤務を起せば其れでよい。能率と經濟との見地よりいへば、國家的「ギルド」とするのは論理的に必然である。海外のことを考へ合せても、其の必要は分かる。吾國の海外貿易上に於ては、「ギルド」は、全く異なつた二つの政策を發展するに至ることであらう。吾人の確信するところに依れば、他國も吾國に倣つて「ギルド」組織を採用するであらう。他國は否やでも應でも其うしなくてはなるまい。何となれば、大英國が既に使用料利子及び利益の桎梏を脱した上は、他國も依然この桎梏をつけては、吾國と競争することが出来まい。是に於てか、國際間の「ギルド」政策が行はれ、佛國、獨逸、和蘭、白耳

義及び米國の各「ギルド」は、相互の間に其の物資の交換を行ふことを承諾するであらう。斯くて世界的の聯盟といふものが初めて端緒につくであらう。世界聯盟は從來詩人の頌歌せしところなるも、詩人は其の何の意たるかを理會しなかつたのである。最近十年間に於て、「トラスト」は國際的資本主義（世界的とまでは行かぬが）に向つて進まうとして居た。「ギルド」は、國內的にも國際的にも「トラスト」を打破せんことを目的とするものである。「トラスト」ば人類を永久に奴隸とせんとし、「ギルド」は經濟的自由を與へて精神上の羈絆を緩るめんことを期するものである。然かし吾人は、未だ經濟的に發達せざる諸國民及び社會をも相手とせねばならぬ。其等の國及び社會は、今後まだ數代の間は、依然として賃銀制度をつゞける事であらう。此等の後進國、後進社會を相手のときは、「ギルド」もコンモンアノミニター公通分母を割り出して之れを基礎とした交易制度を造るを以て満足しなければならぬ。曩きに『ギルドの財政』の章に於て、「ギルド」の勞働は金を標準として測かる事があつてはならぬと言つて置いた。黄金とは無關係なる勞働測定單位を發見するは吾人の任務である。然して、國際間の交易——特に經濟的に未だ十分發達せざる諸國との取引に於ては、今後も金が交換の媒介となるであらう。之れは吾人が其の方を希望するからではなく、久しい間の金屬交換の習慣上已むを得ざる故である。



國家を單位とせる「ギルド」を造らねばならぬ第三の理由がある。大英國に於ける「ギルド」の成功は、今後複雑の面倒な問題を生ずるかも知れない。全世界の壟斷階級者は、或る政府——獨逸か、露西亞か、何處かの——を強制するほどに有力であるかも知れない。そして吾國に對し經濟上（又は軍事上）の戰爭を仕向けるやうに成るかも知れぬ。貨銀全廢について必要な革命は大規模のものである。其の影響は世界の端までも波及し、舊慣舊風を根こそぎにし、從來の利權を破壊し、政府と宗教との諸制度を脅かすに至るであらう。故に「ギルド」行政に變はるときは、先づ國民總體が、自から新しい高尚な時代に驀進する者なることを意識して居なくてはならぬ。吾人は斯かる危機を待ちかまへて居るのではない。反對に、吾人は他國も喜こんで跟いて來るやうな道を案内する國民となることであらうと信じて居るものである。

なほ論すべき問題が残つて居る。過渡期に於ける失望と煩悶とに就いてある。吾人の屢々言つた如く、今後の鬭争は激烈にして且つ永く續くであらう。此の如き鬭争に取かゝる前に、吾人は先づ現代産業制度の基礎たる貨銀制度の要素が何々であるかを列舉し、且つ貨銀制度の弊害の少しもないやうな新たな産業組織を設ける事も不可能でないと云ふことを論證するの必要があつた。此の二つは吾人の前來十分に説き盡くした所である。吾人は斷然「ユートピア」式の計畫には反對

じた。然かし吾人は、又た歴史上の連續といふ事が、英國國民の心胸及び頭腦から離れざる問題であることを認めた。故に吾人は今日のまゝの産業社會を土臺にして考へ、労働商品説の排斥された後如何なる發展を爲すものかと云ふことを考究した。「トレード・ユニオン」が、將來の産業組織の胚胎であると言ふことは、各派の社會問題研究者の絶對的に一致せる所である。「チャールス・ブース」(Charles Booth)の如き用心深かい事をいふ學者より、「アイダブリュー・ダブリュー」の極端派に至るまで、落ちつく先きは違つても、出發點は皆な此の労働組合にして居る。労働者の團結により、労働の獨占の目的を達するまでは、貨銀制度の全廢は逆も行はるゝの道がない。故に、吾人の第一着歩は、「トレード・ユニオン」の事業を成るべく擴張する事ではなくてはならぬ。依つて吾人は「トレード・ユニオン」をして、産業組織のみに熱中せしめんことに努力して來た。然かし之が爲には、何にか準備の手筈が要る。各産業の「ユニオン」は、互に結合又は聯合コアレス・フエドレイトしなくてはならぬ。次に此等の組合は、當該職業に従事せる労働者をして其組合に加入せしめんが爲めに、金力も人力も吝しまず費はなくてはならぬ。此の目的の爲めに百萬磅も費へば、可なりの仕事が出来ぬ。例へば農業労働者を一例とせよ。吾人は先きに既設の「ユニオン」たるもの、宜しく二十五萬磅を投じて農業組織を設く可きだと説いた。之れをやりさへせば、今後二ヶ年の内には、必ず二倍の